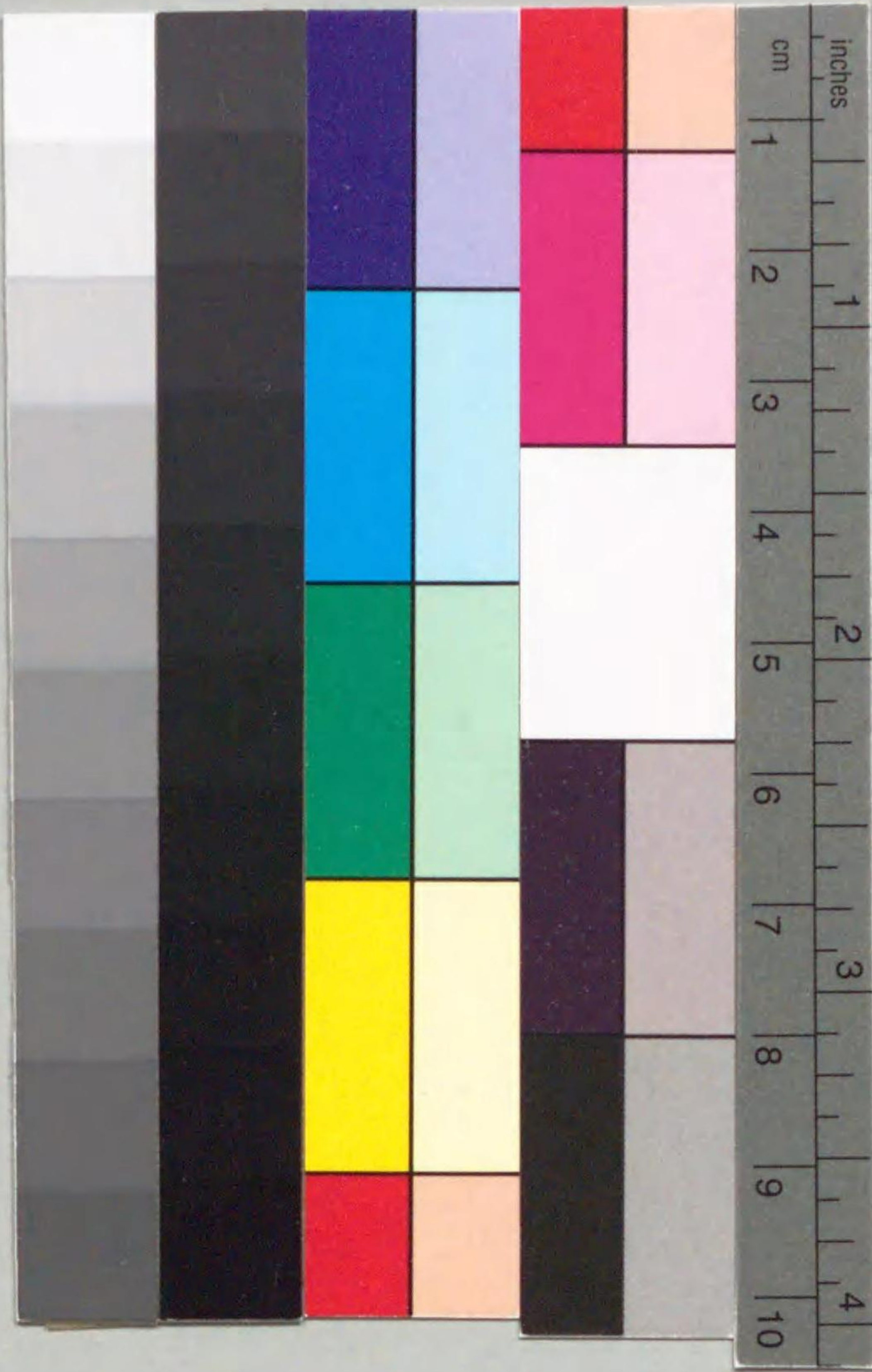
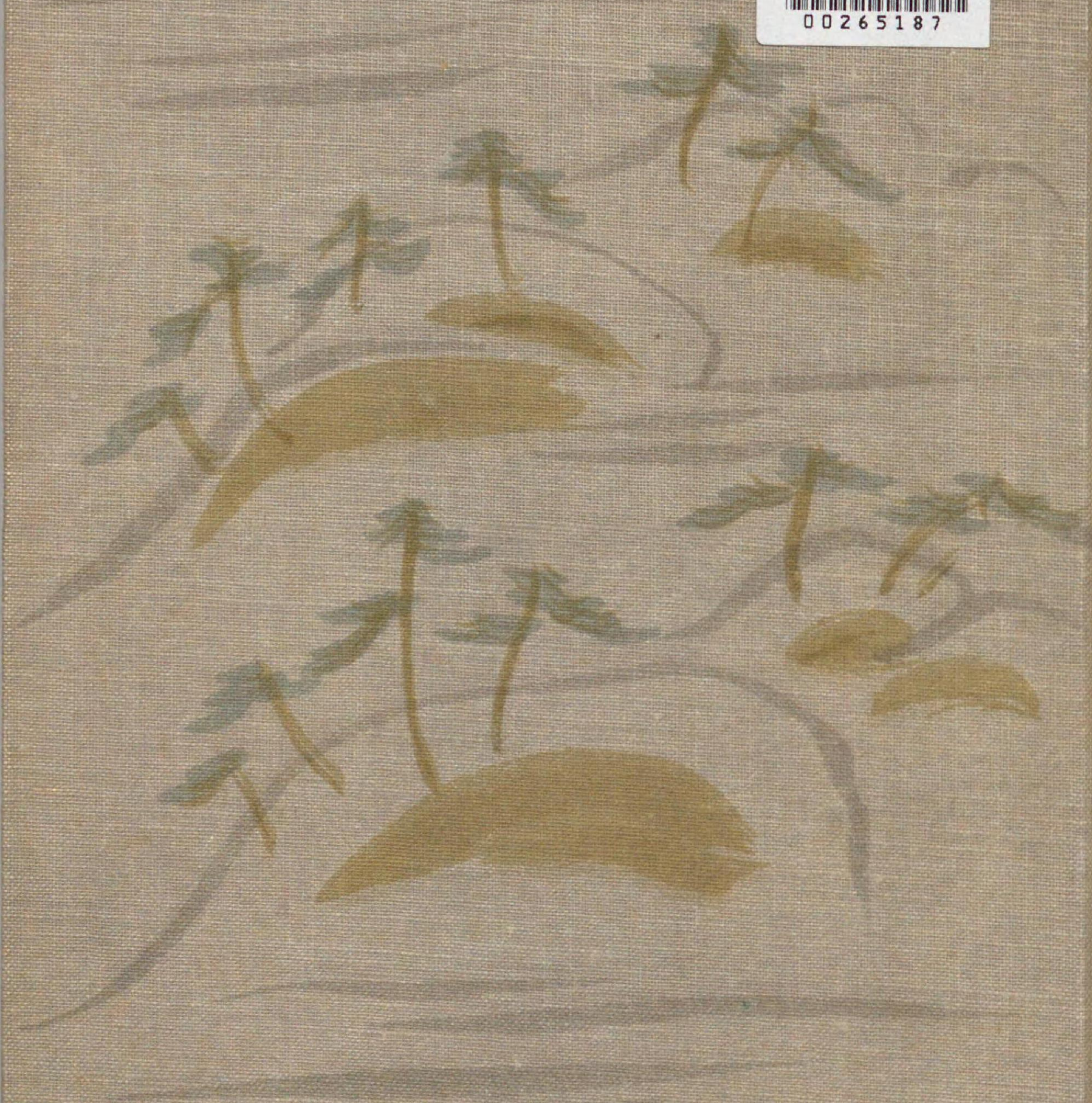


918.6
W38b



00265187





牧水全集 第五卷

牧水全集 第五卷



夕張炭山にて (大正十五年十一月)



265137



（昭和二年六月）金剛山にて



千本松原にて（昭和三年五月）



（月七年三和昭）族 家

第五卷紀行文・夫人宛書簡目次

紀行文

1

鳳來寺紀行	三
木枯紀行	二〇
身延七面山紀行	五一
こんどの旅	八〇
信濃の春	一九
半折行脚日記	二四
九州めぐりの追憶	一四七
梅雨紀行	一七四

北海道行脚日記……………一九四
 北海道雜觀……………二五五
 葉書日記……………二六七
 朝鮮紀行……………二七二
 岬の若葉と雨……………三二五

夫人宛書簡

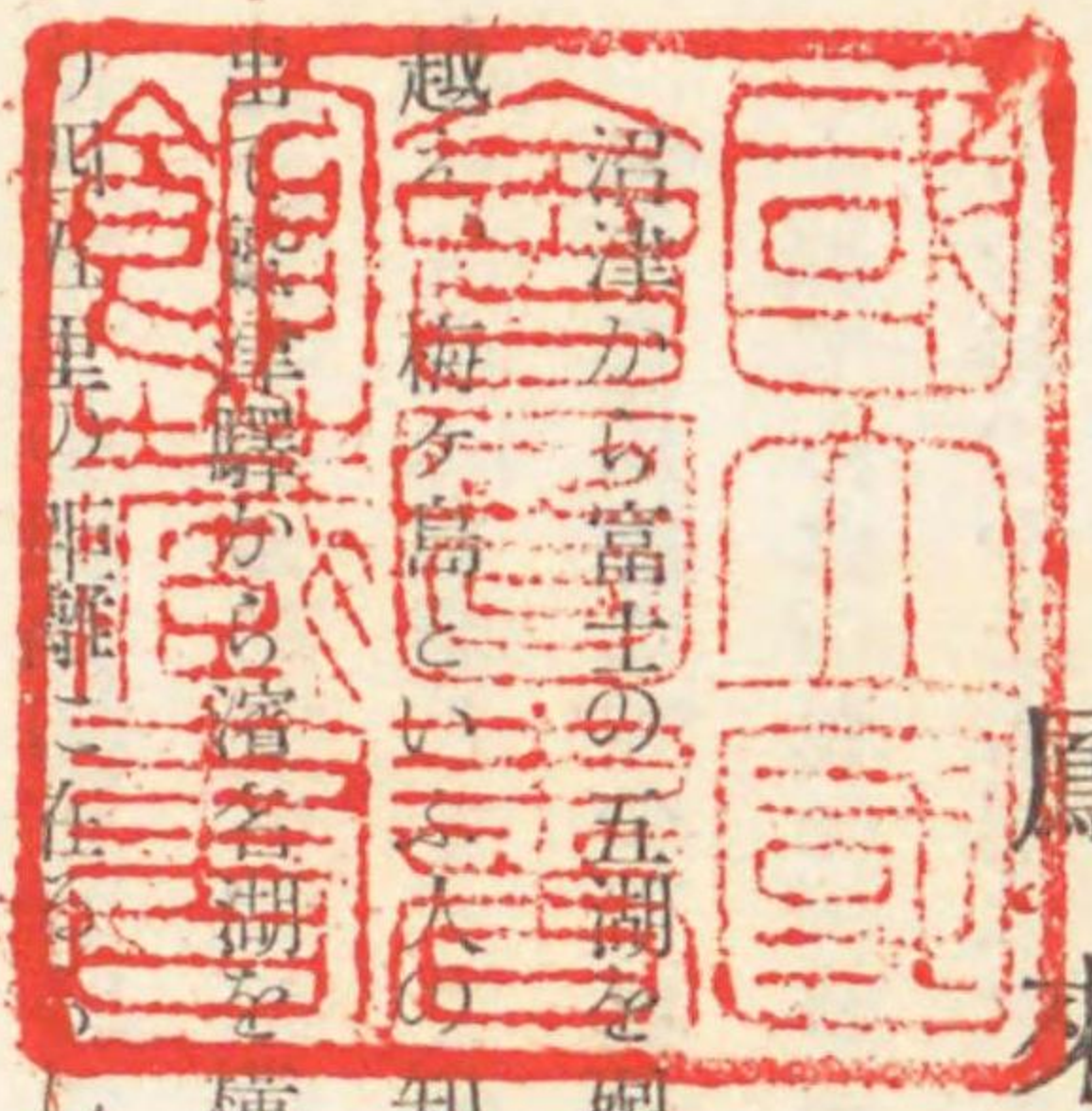
明治四十五年(二二通)……………三三一
 大正二年(一〇通)……………三七六
 大正六年(九通)……………三九三
 大正七年(四一通)……………三九五
 大正八年(二〇通)……………四一五

大正九年(三五通)……………四二三
 大正十年(四一通)……………四三七
 大正十一年(二七通)……………四六〇
 大正十二年(二五通)……………四七七
 大正十三年(三二通)……………四九二
 大正十四年(六通)……………五一二
 大正十五年(五通)……………五一四
 昭和二年(一通)……………五一七
 昭和三年(二通)……………五二九
 愛兒宛書簡(一四通)……………五二〇

紀
行
文

二

鳳來寺紀行



其處から遠くない鳳來山に登り、山中に在るといふ古寺に泊めて貰つて古來その山の評判になつて居る佛法僧鳥を聽いて來よう、イヤ、佛法僧に限らず、さうして歴巡る山から山に啼いてゐるであらう杜鵑だの郭公だの黒つがだの、すべて若葉の頃に啼く鳥を心ゆくまで聽いて來度いとちやんと豫定をたててその空想を楽しみ始めたのは五月の初めからであつた。折悪しく用が溜つてゐて直ぐには出かけられず、急いでそれを片附けてどうでも六月の初めには發足しようときめてゐた。

3 ところが恰度そのころから持病の腸がわるくなつた。旅行は愚か、部屋の中を歩くのすら大儀な有様となつた。さうして起きたり寝たりして居るうちにいつか六月は暮れてしまつた。七月に入つてや

や恢復はしたものの、サテ急に草鞋を穿く勇氣はなく、且つ旅費にあてておいた金もいつの間になくなつてゐた。

七月七日、神経衰弱がひどくなつたと言つて勤めさを休んで東京からM——君がやつて来た。そして私の家に三四日寝轉んでゐた。その間に話が出て、それでは二人してその計畫の最後の部である三河行だけを實行しようといふことになつた。

七月十二日午前九時沼津發、同午後二時豊橋着、其處まで新城からK——君が迎へに来てゐた。案外な健康體で、ルバシカなどを着込んでゐた。まだ然し、聲は前通りにかれてゐた。豊川線に乗換へ、豊川驛下車、稻荷様に詣でた。此處は亡くなつた神戸の叔父が非常に信仰したところで、九州へ歸省の途中彼を訪ふことに、何故御近所を通りながら參詣せぬと幾度も叱られたものであつた。謂はゞ偶然今日其處へ參詣して、この叔父の事が思ひ出され、その位牌に額づく思ひで、頭を垂れた。

再び豊川線に乗つて奥に向ふ。この沿線の風景は武藏の立川驛から青梅に向ふ青梅線のそれに實によく似てゐた。たゞ、車窓から見る豊川の流が多摩川より大きいごとく、こちらの方が幾分廣やかな眺めを持つかとも思はれた。

新城の町は一里にも餘らうかと思はれる古びやかな長々しい一すぢ町で、多少の傾斜を帶び、俾で見て行く兩側の店々には漸くいま灯のついた所で、なか／＼に賑つて見えた。豊川流域の平原が次第

につまつて来た奥に在る附近一帶の主都らしく、さうした位置もまた武藏の青梅によく似てゐた。

K——君の家はその長々しい町のはづれに在り、豫ねて聞いてゐた様に酒類を商ふ古めかしい店構へであつた。鬚の眞白なその父を初め兄夫婦には初対面で、たゞ姉のつた子さんには沼津で一度逢つてゐた。名物の鮎の料理で、夜更くるまで馳走になつた。

翌日一日滞在、降りみ降らずみの雨間に出でて辨天橋といふあたりを散歩した。この邊の豊川は早や平野の川の姿を變へて溪谷となり、兩岸ともに岩床で、激しい瀬と深い淵とが相繼いで流れてゐる。橋は相迫つた斷崖の間にかけれ、なか／＼の高度で、眞下の淵には大きな渦が卷いてゐた。淵を挟んだ上下は共に白々とした瀬となつて、上にも下にも鮎を釣る姿が一人二人と眺められた。この橋の様子は高さから何から青梅の萬年橋に似て居り、鮎を名物とするところもまた同所と似て居る。武藏の青梅は私の好きな古びた町であつた。

夜はK——君父子に誘はれて觀月樓といふ料理屋に赴いた。座敷は南向きで嶮崖に臨み、眼下に稻田が開けて、野末の丘陵、更に遠く連山の起伏に對するあたり、成程月や星を觀るにはいい場所であらうと思はれた。惜しいかなその夜も數日来打ち續いた雨催ひの空で、低く垂れた密雲を仰ぐのみであつた。

友の老父も酒を愛する方であつた。徐ろに相酌みつつ終にまた深更まで飲んでしまつた。

七月十四日。眼が覺めるとすさまじい雨の音である。今日は鳳來山へ登らうときめてゐた日なので、一層この音が耳についた。

櫻、柏、冬青、木犀などの老木の立ち込んだ中庭は狭いながら非常に靜かであつた。ことごとしく手の入れてないまゝに苔が自然に深々といつてゐた。離室の縁に籐椅子を持出してぼんやり庭を見、雨を聞いて居るのは悪い氣持ではなかつたが、サテさうしてもゐられなかつた。M——君と兩人で出立の用意をしてゐると、家内總がかりで留めらるる。そのうちに持ち出された徳利の数が二つ三つと増してゆく間に、いつか正午近くなつてしまつた。雨は小止みもないばかりか、次第に勢を強めて來た。

漸く私は一つの折衷案を持ち出した。鳳來山登りをやめにして、今日はこれからK——君も一緒にこの溪奥に在る由案内記に書いてある湯谷温泉へ行きませう、そして其處から我等は明日山へ登り、君はこちらへ引返し給へ、若し君獨り引返すのがいやだつたら姉さんを誘はうぢやないか、と。

斯くして四人、降りしきる中を停車場へ急いで、辛く間に合つた汽車に乗つた。古戦場で聞えてゐる長篠驛あたりからの線路は峽間の溪流に沿つた。そして其處に雨と雲と青葉との作りなす景色は溪好きの私を少なからず喜ばしめた。

三四驛目で湯谷に着いた。改札口で温泉の所在を訊くと、改札口から廊下續きの建物を指して、それですといふ。成程考へたものだと思つた。湯谷ホテルと呼んでゐるこの温泉宿はこの鐵道會社の經營

してゐるものであるのだ。何しろ難有かつた。この大降りに女連れではあるし、田舎道の若し遠くでもあられては眞實困るところであつたのだ。

通された二階からは溪が眞近に見下された。數日來の雨で、見ゆるかぎりが一聯の瀑布となつた形でたゞ滔々と流れ下つてゐる。この邊から上流をば豊川と言はず、板敷川と呼んで居る様に川床全體が板を敷いた様な岩であるため、その流はまことに清らかなものであるさうだが、今日は流石に濁つてゐた。濁つてゐるといふより、隨所に白い渦を巻き飛沫をあげて流れ下つてゐた。對岸の崖には山百合の花、蓼の花など、雨に揺られながら咲きしだれてゐるのが見えた。その上に聳えた山には見ごとくに若杉が植ゑ込んであつた。山の嶮しい姿と言ひ、杉の青みといひ、徂徠する雲といひ、必ず杜鵑の居さうな所に思はれたが、雨の烈しいためか終に一聲をも聞かなかつた。

温泉と云つても沸かし湯であつた。酒や料理は、會社經營の手前か、案外にいいものを出して呉れた。繪葉書四五十枚を取り寄せ知れる限りに寄せ書きをした。

七月十五日。かれこれしてゐるうちに時間がたつて、十二時幾分かの汽車に乗つた。重い曇ではあるが、珍しく雨は落ちて來なかつた。M——君と私とは長篠驛下車、寒狹川に沿うて鳳來山の方へ溯つて行つた。寒狹川もまた岩を穿つて流れてゐる溪であつた。

途中、鮎瀧といふがあつた。平常から見ごとな瀧とは聞いてゐるが、今日は雨後のせるで凄しい水

勢であつた。路を下りてそれに近づかうとすると遠く水煙が巻いて来て、思はず面を反けねばならなかつた。

行くこと二里で、麓の村門谷かどやといふに着いた。見るからに古びはてた七八十戸の村で農家の間には煤び切つた荒目な格子で間口を廻らした家なども混つてゐた。山駕籠や、芝居でしか見ない普通の駕籠などの軒先に吊るされてあるのも見えた。とある一軒に寄つて郵便切手を買ひながら山上のお寺に泊めて貰へるか否かを訊ねた。上品な内儀が、泊めては貰へませうが喰べ物が誠に不自由で、とにかく今日の夕飯だけでもこの村の宿屋で召上つてからお登りになつた方がいいでせうといふ。

厚意を謝して其處を出ると直ぐ一軒の宿屋があつた。これも廣重の繪などで見るべき造りの家である。其儘立ち寄らうとしたが、然し其處で夕飯をとるとすると到底今日山へ登る事をばやうしないにきまつてゐる。私はいいとしてもM——君は明日はまた山を下らねばならぬ人である。それを思ふて、兎にも角にも寺まで行つて見ようといふことになつた。宿屋のはづれに硯を造つてゐる一二軒の家が眼についた。この山の石で造るもので良質の硯の出来るといふ話を聞いたのを思ひ出した。

黒々と樹木のたちこんだ岩山が眼の前に聳えてゐた。妙義山の小さい形であるが、樹木の茂みが山を深く見せた。宿を外れると直ぐ杉木立の暗い中に入り、石段にかゝつた。僅に數段を登るか登らぬに早やすぐ路の傍へから啼き立つた雉子の聲に心をときめかせられた。

石段の數は人によつて多少の差はあつたが、いま途中で休んだ茶店の老爺老婆は一千八百七十七段ありますと言下に答へたのであつた。數は兎に角兩人は直ぐ勞れてしまつた。一度二度と腰をおろして休みながら登るうちに右手に一軒の寺があつた、松高院と云つた。今少し登ると醫王院といふがあり、接待茶、繪葉書ありの看板が出てゐた。其處へ寄つて茶の馳走になり繪葉書を買ひ、本堂再建の屋根瓦一枚つつの寄進につき、更に山上遙に續いてゐる石段を登り始めやうとすると、應接してゐたまだ三十歳前後の年若い僧侶が、貴下は若山といふ人ではないか、と訊く。いぶかりながらその旨を答へると、實は今日の正午頃に私の知人の某君といふが来て、昨日か今日、其人が佛法僧鳥を聽くために登つて来る筈だ、來たらばこの寺に泊めて呉れと言ひ置いてツイ先刻歸つたばかりだとの事であつた。では新城町のK——家から山のお寺へも紹介しておくからとの話はその事であつたのかと思ひながら、意外の便宜に二人とも大いに喜んだ。のんきな我等は、この石段の續いた果にまだお寺があるだらうしその一番高い所に在るお寺に泊めて貰はうなどと言ひながらなほ勞れた足を運ばうとしてゐたのであつた。聞けばこの上には東照宮があるのみで、お寺はもう無いのださうである。もと本堂があつただけけれど、この大正三年に焼失したのださうだ。

9 喜びながら手荷物を其處に預け、足ついで故その東照宮までお参りして來ようと再び石段を登つて行つた。大きくはないが古びながらに美しいお宮は見事な老木の杉木立のうす暗いなかに在つた。社

務所があつても雨戸が固く閉ざされてゐた。

お寺に引返して足を伸して居ると、程なく夕飯が出た。新城から提げて歩いてゐた酒の壺を取出して遠慮しながら冷たいまゝ、飲んでゐると、爛をして來ませうと温めて貰ふ事が出來た。お膳を出されたのは、廊下に疊の敷かれた様な所であつたが、居ながらにして眼さきから直ぐ下に押し降くだつて行つてゐる峽間の峻しい傾斜の森林を見下すことが出來た。誠によく茂つた森である。そして峽間の斜め向うにはその森にかぶさる様に露出した岩壁の山が高々と聳えてゐるのである。湧くともなく消ゆるとない薄雲が峽間の森の上に浮いてゐるが、やがて白々と其處を閉ざしてしまつた。そしてツイ窓さきの木立の間をも颯々と流れ始めた。

まだ酒の終らぬ時であつた。突然、隣室から先刻の年若い僧侶——T——君といふ人で快活な親切な青年であつた——が、

『いま佛法僧が啼いてゐます』

と注意してくれた。

驚いて盃を置き、耳を傾けたが一向に聞えない。

『随分遠くにゐますが、段々近づいて來ませう』

と言ひながらT——君はやつて來て、同じく耳を澄ましながら、

『ソレ、啼いてませう、あの山に』

と、岩山の方を指す。

『ア、啼いてます〜、随分かすかだけれど——』

M——君も言つて立ち上つた。

まだ私には聞えない。何處を流れてゐるか、森なかの溪川の音ばかりが耳に満ちてゐる。

二人とも庭に出た。身體の近くを雲の流れてゐるのが解る。

『啼いてますが、あれでは先生には聞えますまい』

と、M——君が氣の毒さうにいふ。彼は私の耳の遠いのを前から知つてゐるのである。

近づくのを待つことに諦めて部屋に入り、酒を續けた。酒が終ると酔と、勞れとで二人とも直ぐぐつすりと眠つてしまつた。

M——君はその翌十六日、降りしきる雨を冒して山を下つて行つた。そして私だけ獨りその後二十一日までその寺に滞在してゐた。その間の見聞記を少し書いて見度い。

11 鳳來山は元來噴火しかけて途中でやみ、その噴出物が凝固して斯うした怪奇な形の山を成したものださうである。で、土地の岩層や岩質などを研究するとなか〜複雑で面白いといふことである。高

さは海拔僅かに二千三百尺、山塊全體もさう大きなものではないが、切りそいだやうに聳えた大きな岩壁、それらの間に刻み込まれた溪谷など、とにかく眼に立つ眺めを持つて居る。それにさうした岩山に似合はず、不思議によく樹木が育つて、岩壁や裂目にまで見ごとな大木が隙間もなくびつたりと立ち茂つてゐる。この樹木の繁いことが少なからずこの山の眺めを深くもし大きくもしてゐるのである。多く杉檜等の針葉樹であるが、間々この山獨特の珍しい草木もあるとのことである。

南面した山の中腹に鳳來寺がある。推古天皇の時僧理修の開創で、更に文武天皇大寶年間に勅願所として大きな堂宇が建立されたのださうだ。その後源頼朝もいたくこの寺の薬師如來を信仰して多くの莊園を奉納し、下つて徳川廣忠は子なきを患ひて此所に參籠祈願して家康を生んだといふので家光家綱相續いて殿堂鐘樓樓門その他山林方三里、及び多大の境地を寄附し、新に家康の廟東照宮を置き一時は寺封千三百五十石、十九ヶ村の多きに上つたといふことである。(加藤與會次郎氏著『門谷附近の史蹟』に據る)ところが明治の革新に際し制度の變遷から悉く此等の寺封を取除かれ、その上明治八年及び大正三年兩度の火災で本堂初め十二坊からあつた他の寺々まで焼け失せて今では僅に醫王院松高院の二堂を残すのみとなつてゐる。現在の住職服部賢定氏これを嘆いて數年間に涉つて鳳來山の裏山にあたる森林の拂下けを願ひ出て終に許可を得、それより費用を得て目下本堂建築の工事中である。拂下けを受けた面積三千百十三町七反歩、而かもなほ寺の境内として残してある森林の面積百五

十八町三反歩といふのにも如何にこの山を包む森林の廣いかは解るであらう。

或日私は案内せられて東照宮の裏手から山の頂上の方に登つて行つた。前にも言ふ通りこの山は岩山の爲、みつちりと樹木の立ち込んだ峯のところ／＼に恰も鉾を立てた様に森から露出して聳え立つた岩の尖りがある。それらの一つ一つに這ひ登つてこちらの溪、そちらの峽間に茂り合つて麓の方に擴がつて行つてゐる森の流を見下してゐると、まことに何とも言へぬ伸びやかな靜かな心になつてゆくのであつた。

何百丈か何千丈か、乾反り返つて聳え立つた岩壁の頂上に坐つて恐る／＼眼下を見てゐると、多くは迫せまになつた森の茂みに籠つて實に數知れぬ鳥の聲が起つてゐる。我等の知つてゐるものは僅にその中の一割にも足らぬ。多くは名も聲も聞いた事のないもののみである。僅に姿を見せて飛ぶは鴨椋鳥に啄木鳥位のもので、その他はたゞ其處此處に微妙な音色を立て、ゐるのみで、見渡す限りたゞ青やかな森である。

中に水戀鳥といふの、啼くのを聞いた。非常に透る聲で、短い節の中に複雑な微妙さを含んで聞きなされる。これは全身眞紅色をした鳥ださうで自身の色の水に映るを恐れて水邊に近寄らず、雨降るを待ち嘴を開いてこれを受けるのださうである。そして早ひやうが續けば水を戀つて啼く、その聲がおのづからあの哀しい音いろとなつたのだと云ふ。

私は此處に来てつくづく自分に鳥についての知識の無いのを悲しんだ。あれは、あれはと徒にその啼聲に心をときめかすばかりで、一向にその名を知らず、姿をも知らないのである。山の人もんきで、殆んど私よりも知らない位であつた。

石楠木のこの山に多いのを聞いてゐるが、いかにも豫想外に多かつた。そして他の山のものと同つた種類であるのに氣がついた。さうなると植物上の知識の乏しいのを悲しまねばならぬことになるが、兎に角他の石楠木と比べて葉が甚だ細くて技が繁い。檜や樺の大木の下にこの木ばかりが下草をなしてゐる所もあつた。花のころはどんなであらうと思はれた。葉も枝もどうだんの木と少しも違はないやうな木で釣鐘躑躅といふのがあつた。花がみな釣鐘の形をなし、それこそ指でさす隙間もないほどぎつちりと咲き群がるのださうである。ふり仰ぐ絶壁の中腹などに僅に深山躑躅の散り残つてゐるのを見る所もあつた。また、苔清水の滴つてゐる岩の肌にうす紫のこまかな花の咲いてゐるのがあつた。岩千鳥といふのださうでいかにも高山植物に似た可憐な花であつた。鳳來寺百合といふ百合も岩に垂れ下つて咲いてゐた。この百合もこの山獨特のものだと聞いてゐた。

山の尾根から傳つて歩いてゐると、遠く渥美半島が見えた。またその反對の北の方には果もなく次から次と蜿蜒合つた山脈が見えて、やがて雲の間にその末を消してゐる。美濃路信濃路の山となるのであらう。さうした大きな景色を眺めてゐると、我等の坐つた懸崖の眞下の森を啼いて渡る杜鵑の聲が

をり／＼聞えて來た。もう時季が遅いために、この鳥の啼くのはめつきり少くなつてゐるのださうである。

私が山に登つてから三日間は少しの雨間もなく降り續いた。しかも並大抵の降りではなく、すさまじい響をたて、降る豪雨であつた。で、その間は全くその山を包んだ雨聲の中に身うごきもならぬ氣持で過してゐたのである。雨に連れて雲が深かつた。明けても暮れても眞白な密雲のなかに、殆んど人の聲を聞かず顔を見ずに過してゐた。

十八日の晝すぎから晴れて來た。

『今夜こそ啼きますぞ』

寺の人が斯う言つて微笑した。最初この寺に登つて來た晩に遠くで啼いたと聞くばかりで、私はまだ楽しんで來た佛法僧を聞くことなしにその日まで過して來たのであつた。この鳥は晴れねば啼かぬのださうだ。

『啼きませうか、啼いて呉れるといふなア』

その夕方は飲み過ぎない様に酒の量をも加減して啼くのを待つた。洋燈がともし、私の癖の永い時間酒も終つたが、まだ啼かない。庭に出て見ると、久しく見なかつた星が、嶮しい峰の上にもちらちら輝いてゐる。墨の様に深い色をした峽間の森には、例の名も知れぬ鳥が頻りに啼いてゐるのだが、

待つてゐるのはなかく啼かない。

九時頃であつた。半ば諦めた私は床を敷いて寝ようとしながら、フツと耳を立てた。そして急いで廊下の窓のところへ行つた。其處へ勝手の方からも寺の人が出て來た。

『解りましたか、啼いてますよ』

『ア、矢張りあれですか、なるほど、啼きます、啼きます』

私はおのづから心臓の鼓動の高まるのを覺えた、そしてまたおのづからにして次第に心氣の潜んでゆくのを。

なるほどよく啼く。そして實にい、聲である。世の人の珍しがるのも無理ならぬことだと眼を瞑ちて耳を傾けながら微笑した。

『自分の考へてゐたのとは違つてゐる』

とも、また、思つた。

私は初めこの佛法僧といふ鳥を、山城の比叡山あたりで言つてゐる筒鳥といふのと同じものだと豫想してゐた。その啼き聲が、佛、法、僧といふと云ふところから、曾つて親しく聞いたことのある筒鳥の啼き聲を聯想せざるを得なかつた。筒鳥の聲が聞きやうによつてはさう聞えないものでもないからである。たゞ筒鳥は單に佛、法、僧といふ如く三音に響いて切れるでなく、ホツ／＼／＼／＼／＼ホウ

と幾つも續いて釣瓶打に啼きつゞけるのである。然し、その寂びた靜かな音いろはともすると佛法僧といふ發音や文字づらと關聯して考へられがちであつたのだ。

まことの佛法僧は筒鳥とは違つてゐた。然し、その啼き聲を佛、法、僧と響くといふのも甚だ當を得てゐない。これは佛法の盛んな頃か何か、或る僧侶たちの考へたこぢつけに相違ないと私は思つた。この鳥の聲はそんな枯れさびれたものではないのである。いかにも哀音悲調と謂つた風の、うるほひのある澄み徹つた聲であるのだ。いかにも物かなしけの、迫つた調子を持つてゐるのである。

そして佛、法、僧といふ風に三音をば續けない。高く低くたゞ二音だけ繰返す。その二音の繰返しが十度び位も切々として繰返さるゝと、合の手見た様に僅かに一度、もう一音を加へて三音に啼く。それをこぢつけて佛法僧と呼んだものであらう。普通はたゞ二音を重ねて啼くのである。

たとへば郭公の啼くのが、カツ、コウ、と二音を重ねるのであるが、あれと似てゐる。然し似てゐるのはたゞそれだけで、その音色の持つ調子や心持は全然違つてゐる。郭公も實に澄んだ寂しい聲であるが、佛法僧はその寂びの中に更に迫つた深みと鋭どさを含んで居る。さればとて杜鵑の鋭どさでは決してない。言ひがたい圓みとうるほびとを其鋭どさの中に包んでゐる。兎に角、筒鳥にせよ、郭公にせよ、杜鵑にせよ、その啼聲のおほよその口眞似も出來、文字にも書くことが出来るが、佛法僧だけは到底むつかしい。器用な人ならば或は口眞似は出来るかも知れぬが、文字には到底不能であ

る。それだけ他に比して複雑さを持つてゐるとも謂へるであらう。

不思議に四月の二十七日か若しくはその翌日の八日か、ら啼き始めるのださうである。殆んどその日を誤らないといふ。南洋からの渡り鳥で、全身緑色、嘴と足とだけが紅く、大きさはおほよそ鴨に似てゐるさうだ。稀には書間に啼くこともあるさうだが、決して姿を見せない。山に住んで居る者でも誰一人それを見た者はないといふ。

この鳥も郭公などと同じく、暫くも同じところに留つてゐない。啼き始めると続けさまにその物悲しげな啼聲を続けるのであるが、殆んどその一聯ごとに場所を換へて啼いてゐる。それも一本の木の枝をかへて啼くといふでなく、一町位の間を置いて飛び移りつゝ、啼くのである。このことが一層この鳥の聲を迫つたものに聞きなさせる。

十八日、私は殆んど夜どほし窓の下に坐つて聽いてゐた。うとくと眠つて眼をさますと、向うの峯で啼くのが聞える。一聲二聲と聞いていると次第に眼が冴えて、どうしても寢てゐられないのである。

星あかりの空を限つて聳えた峻しい山の峯からその聲が落ちて来る。ぢいつと耳を澄ましてゐると、其處に行き、彼處に移つて聞えて来る。時とすると更け沈んだ山全體が、その聲一つのために動いてゐる様にも感ぜらるゝのである。

十九日の夜もよく啼いた。そして午前の四時頃、他のものでは鯛が一番早く聲を立つるのであるが、それをきつかけに佛法僧はびつたりと黙つてしまふ様である。それから後はあれが啼きこれが叫び、いろ／＼な鳥の聲々が入り亂れて山が明けて行く。

二十日に私は山を下つた。滞在六日のうち、二晩だけ完全にこの鳥を聞くことが出来た。二晩とも闇であつたが、月夜だつたら一層よかつたらうにと思はれた。また、月夜にはとりわけてよく啼くのださうである。いつかまた月のところに登つてこの寂しい鳥の聲に親しみたいものだ。

木枯紀行

——ひと年にひとたび逢はむ斯く言ひて別れきまなり今ぞ逢ひぬる——

十月二十八日。

御殿場より馬車、乗客はわたし一人、非常に寒かつた。馬車の中ばかりでなく、枯れかけたあたりの野も林も、頂きは雲にかくれ其處ばかりがあらはに見えて居る富士山麓一帯もすべてが陰鬱で、荒々しくて、見るからに寒かつた。

須走の立場で馬車を降りると丁度其處に蕎麥屋があつた。これ幸ひと立寄り、先づ酒を頼み、一本二本と飲むうちにや、身内が温くなつた。仕合せと傍への障子に日も射して來た。過ぎるナ、と思ひながら三本目の徳利をあけ、女中に頼んで買つて來て貰つた着真産を羽織り、脚軽く蕎麥屋を立ち出た。

宿場を出はづれると直ぐ、右に曲り、近道をとつて籠坂峠の登りにかかつた。おもひのほかには嶮しかつた。酒は發する、息は切れる、幾所でも休んだ。そしていつもの通り旅行に出る前には留守中の手當爲事で睡眠不足が續いてゐたので、休めば必ず眠くなつた。一二度用心したが、終に或所で、萱

か何かを折り敷いたま、うとくと眠つてしまつた。

『モシ〜、モシ〜』

呼び起されて眼を覺すと我知らずはつとせねばならなかつた程、氣味の悪い人相の男がわたしの前に立つてゐた。顔に半分以上の火傷があり眼も片方は盲目で引吊つてゐた。

『風邪をお引きになりますよ』

わたしの驚きをいかにも承知してゐたげにその男は苦笑して、言ひかけた。

わたしはや、恥しく、惶て、立ち上つて帽子をとりながら禮を言つた。

『登りでしたら御一緒に参りませう』

とその若い男は先に立つた。

酒を過して眠りこけてゐた事をわたしは語り、彼は東京の震災でこの大火傷を負うた旨を語りつ、峠に出た。

吉田で彼と別れた。彼は何か金の事で東京から來て、昨日は伊豆の親類を訪ね、今日はこれより大月の親類に廻つて助力を乞ふつもりだといふ様な事を問はず語りに話し出した。いかにも好人物らしく、彼が同意するならば一緒に今夜吉田で泊るも面白からうなどとわたしは思った。が、先を急ぐと云つて、そ、くさと電車に乗つて彼は行つてしまつた。

ほんの一寸の道づれであつたが、別れてみれば淋しかつた。それにいつか暮れかけては來たし、風も出、雨も降り出した。其儘、吉田で泊らうかと餘程考へたが、矢張り豫定通り河口湖の岸の船津まで行く事にし、両手で洋傘を持ち、前こゝみになつて、小走りに走りながら薄暗い野原の路を急いだ。午後七時、湖岸の中屋ホテルといふに草鞋をぬいだ。

十月二十九日。

宿屋の二階から見ると湖にはこまかに雨が煙つてゐるが、や、遅い朝食の濟む頃にはどうやら晴れた。同宿の郡内屋（土地産の郡内織を賣買する男ださうで女中が郡内屋さんと呼んでゐた）と共に俄かに舟を仕立て、河口湖を渡ることにした。

眞上に仰がるべき富士は見えなかつた。たゞ眞上に雲の深だけ湖の岸の紅葉が美しかつた。岸に沿うた村の柿の紅葉がことに眼立つた。こゝらの村は湖に沿うてゐながら井戸といふものがなく、飲料水には年中苦勞してゐるのださうだ。熔岩地帯であるためだといふ。

渡りあがつた所の小村で郡内屋と別れ、ルックサツクの重みを快く肩に感じながらわたしはい氣持で歩き出した。直ぐ、西湖に出た。小さいながら深く湛へてゐるこの湖の縁を歩きつくした所に根場ねはといふ小さな部落があつた。所の祭禮らしく、十軒そこゝの小村に幟が立てられ、太鼓の

音が響いてゐた。

不圖見ると村に不似合の小綺麗なよろづ屋があつた。わたしは其處に寄り、酒と罐詰とを買ひ、なほ内儀の顔色をうかゞひながらおむすびを握つて貰へまいかと所望してみた。お安いことだが、今日は生憎くお赤飯だといふ。なほ結構ですと頼んで、揃つた夫等を風呂敷に包んで提げながら、其處を辭した。今朝、雨や舟やで、宿屋で此等を用意するひまがなく、また急げば晝までには精進湖まで漕ぎつけるつもりで立つて來たのであつた。然し、次第に天氣の好くなるのを見てゐると、これから通りかゝる筈の青木が原をさう一氣に急いで通り過ぎることは出來まいと思はれたので、店のあつたを幸ひに用意したのであつた。

樹海などと呼びなされてゐる森林青木が原の中に入つたはそれから直ぐであつた。成る程好き森であつた。上州信州あたりの山奥に見る森林の鬱蒼たる所はないが、明るく、而かも寂びてゐた。木に大木なく、而かもすべて相當の樹齡を持つてゐるらしかつた。これは土地が一帶に火山岩の地面で、土氣つちけの少いためだらうと思はれた。それでゐる岩にも、樹木の幹にも、みな青やかな苔がむしてゐた。多くは針葉樹の林であるが、中に雑木も混り、とりどりに紅葉してゐた。中でも楓が一番美しかつた。楓にも種類があり、葉の大きいものになるとわたしの掌をひろげても及ばぬのがあつた。小さいのは小さいなりに深い色に染つてゐた。多くは樽らしい木の、葉も幹も眞黒く見えて茂つてゐるなかに

24 此等の紅葉は一層鮮かに見えた。

わたしは路をそれて森の中に入り、人目につかぬ様な所を選んで風呂敷包を開いた。空が次第に明るむにつれ、風が強くなつた。あたりはひどい落葉の音である。樅か梅のこまかい葉が落ち散るのである。雨の様な落葉の音の中に混つて頻りに山雀の啼くのが聞える。よほど大きな群らしく、相引いで次第に森を渡つてゆくらしい。と、ツイ鼻先の梅の木に來て椋鳥が啼き出した。これは二羽だ。例の鋭い聲でけた、ましく啼き交はしてゐる。

長い晝食を終つてわたしはまた森の中の路を歩き出した。誰一人ひとに會はない。歩きつ休みつ、一時間あまりもたつた頃、森を出外れた。そして其處に今までのいづれよりも深く湛へた静かな湖があつた。精進湖である。客も無からうにモーターボートの渡舟が岸に待つてゐた。快い速さで湖を突つ切り、山の根つこの精進村に着いた。山田屋といふに泊る。

十月三十日。

宿屋に瀕死の病人があり、こちらもろく／＼眠らずに一夜を過した。朝、早く立つ。

坂なりの宿場を通り過ぎると愈々峻しい登りとなつた。名だけは女坂峠といふ。堀割りの様になつた凹みの路には堆く落葉が落ち溜つてじとじとに濡れてゐた。

越え終つて溪間に出、溪沿ひに少し歩き溪を渡つてまた坂にかゝつた。左右口峠といふ。この坂は路幅も廣く南を受けて日ざしもよかつたが、九十九折の長い／＼坂であつた。退屈しい／＼登りついた峠で一休みしようと路の左手寄りの高みの草原に登つて行つてわたしは驚喜の聲を擧げた。不圖振返つて其處から仰いだ富士山が如何に近く、如何に高く、而してまたいかばかり美しくあつたことか。空はむらさきいろに晴れてゐた。その四方の空を占めて天心近く暢びやかに聳え立つてゐる山嶺を仰ぐにはこちらも身を頭をうち反らせねばならなかつた。今日の深い色の空の真中に立つこの山にもまた自づと深い光が宿つてゐた。半ばは純白の雪に輝き、なかばは山肌の黒紫くろむらさきが沈んだ色に輝いてゐた。而してその山肌には百千の糸巻の糸をほどいて打ち垂らした様に雪がこまかに尾を引いてしづれ落ちてゐるのであつた。

峠を下り、や、勞れた脚で笛吹川を渡らうとすると運よく乗合馬車に出會つてそれで甲府に入つた。甲府驛から汽車、小淵澤驛下車、改札口を出やうとすると、これは早や、かねて打合せてあつた事ではあるが信州松代在から來た中村柊花君が宿屋の寢衣を着て其處に立つてゐた。

『やア！』

『やア！』

25 打ち連れて彼の取つてゐた宿いと屋といふに入つた。

親しい友と久し振に、而かも斯うした旅先などで出逢つて飲む酒位るうまいものはあるまい。風呂桶の中からそれを楽しんでゐて、サテ相對して盃を取つたのである。飲まぬ先から心は酔うてゐた。一杯々々が漸く重なりかけてゐた所へ思ひがけぬ來客があつた。この宿に止宿してゐる小學校の先生二人、いま書いて下げた宿帳で我等が事を知り、御高説拜聴と出て來られたのである。

漸くこの二人をも酒の仲間に入れたが要するに座は白けた。先生たちもそれを感じてかほどくで引上げて行つた。が、我等二人となつても初めの氣持に返るには一寸間があつた。

『あなたはさぼしといふものを知つてますか』と、中村君。

『さア、聞いた事はある様だが……』

『此の地方の、先づ名物ですかネ、他地方で謂ふ達磨の事です』

『ほ、ウ』

『行つて見ませうか、なか／＼綺麗なものもりますよ』

斯くて二人は宿を出て、怪しき一軒の料理屋の二階に登つて行つた。そしてさぼしなるものを見た。が、不幸にして中村君の保證したゞけの美しいのを拜む事は出来なかつた。何かなしに唯がぶ／＼と酒をあふつた。

二人相纏れつゝ、宿に歸つたはもう十二時の頃でもあつたか。ぐつすりと眠つてゐる所をわたしは起

された。宿の息子と番頭と二人、物々しく手に／＼提灯を持つて其處に突つ立つてゐる。何事ぞと訊けば、おつれ様が見えなくなつたといふ。見れば傍の中村君の床は空である。便所ではないかと訊けば、もう充分に探したといふ。サテは先生、先刻の席が諦められず、またひそかに出直して行つたと見える。わたしはさう思つたので笑ひながらその旨を告げた。が、番頭たちは強硬であつた。あなた達の歸られた後、店の大戸には錠をおろした。その錠がそのまゝになつてゐる所を見ればどうしてもこの家の中に居らるゝものとせねばならぬ……』

『實はいま井戸の中をも探したのですが……』

『どうしても解らないとしますと駐在所の方へ届けておかねばならぬのですが……』

吹き出し度いながらにわたしも眼が覺めてしまつた。

如何なる事を彼は試みつゝあるか、一向見當がつかかねた。見廻せば手荷物も洋服も其儘である。其處へ階下からけた、ましい女の叫び聲が聞えた。

二人の若者はすはとばかりに飛んで行つた。わたしも今は帯を締めねばならなかつた。そして急いで階下へおりて行つた。

宿の内儀を初め四五人の人が其處の廊下に並んで突つ立つてゐる。宵の口の小學教師のむつかしい顔も見えた。自おのづからときめく胸を抑へてわたしは其處へ行つた。と、またこれはどうしたことぞ、其

處は大きなランプ部屋であつた。さまざまのランプの吊り下げられた下に、これはまたどうした事ぞ、わが親友は泰然として坐り込んでゐたのである。

『どうもこのランプ部屋が先刻からがたくいふ様だものですから、いま来て戸をあけて見ましたらこれなんです、ほんとに妾はもうびつくりして……』

内儀はたゞ息を切らしてゐる。怒るにも笑ふにもまだ距離があつたのだ。

わたしとしても早速には笑へなかつた。先づ居並ぶ其處の人たちに陳謝し、サテ徐ろにこの石油くさき男を引つ立てねばならなかつた。

十月三十一日。

早々に小淵澤の宿を立つ。空は重い曇であつた。

宿場を出外れて路が廣い野原にかゝるとわたしの笑ひは爆發した。腹の底から、しんからこみあけて來た。

『どうして彼處に這入る氣になつた』

『解らぬ』

『這入つて、眠つてたのか』

『解らぬ』

『何故戸を閉めてゐた』

『解らぬ』

『何故坐つてた』

『解らぬ』

『見附けられてどんな氣がした』

『解らぬ』

一里行き、二里行き、わたしは始終腹を押へどほしであつた。何事も無かつた様な、まだ身體の何處やらに石油の餘香を捧持してゐるさうな、丈高いこの友の前に立つても可笑しく、あとになつても可笑しかつた。が、笑つてばかりもゐられなかつた。二晩つゞきの睡眠不足はわたしの足を大分鈍らしてゐた。それに空模様も愈々怪しくなつて來た。三里も歩いた頃、長澤といふ古びはてた小さな宿場があつた。其處で晝をつかひながら、この宿場にあるといふ木賃宿に泊る事をわたしは言ひ出した。が、今度は中村君の勢ひが素晴しくよくなつた。どうしても豫定の通り國境を越え、信州野邊山が原の中に在る板橋の宿しゆくまで行かうといふ。

我等のいま歩いてゐる野原は念場が原といふのであつた。八ヶ嶽の南麓に當る廣大な原である。所

所に部落があり、開墾地があり、雑草地があり林があつた。大小の石ころの間断なく其處らに散らばつてゐる荒々しい野原であつた。重い曇で、富士も見えず、一切の眺望が利かなかつた。

止むなく彼の言ふ所に従つて、心残りの長澤の宿を見捨てた。また、先々の打ち合せもあるので豫定を狂はす事は不都合ではあつたのだ。路はこれからとろ／＼の登りとなつた。この路は昔（今でもであらうが）北信州と甲州とを繋ぐ唯一の道路であつたのだ。幅はや、廣く、荒る、がま、に荒れはてた悪路であつた。

とう／＼雨がやつて來た。細かい、寒い時雨である。二人とも無言、めい／＼に洋傘をかついで、前こゝみになつて急いだ。この友だとして身體の勞れてゐぬ筈はない。大分怪しい足どりを強ひて動かしてゐるげに見えた。よく休んだ。或る所では長澤から仕入れて來た四合壺を取り出し、路傍に洋傘をたてかけ、その蔭に坐つて啜り合つた。

恐れてゐた夕闇が野末に見え出した。雨はやんで、深い霧が同じく野末をこめて來た。地圖と時計とを見較べ／＼急ぐのであつたが、すべりやすい粘土質の坂路の雨あがりではなかく／＼思ふ様に歩けなかつた。そのうち、野末から動き出した濃霧はとう／＼我等の前後を包んでしまつた。

まだ二里近くも歩かねば板橋の宿には着かぬであらう、それまでには人家とても無いであらうと急いでゐる鼻先へ、意外にも一點の灯影を見出した。怪しんで霧の中を近づいて見るとまさしく一軒の

家であつた。ほの赤く灯影に染め出された古障子には飲食店と書いてあつた。何の猶豫もなくそれを引きあけて中に入つた。

入つて一杯元氣をつけてまた歩き出すつもりであつたのだが、赤々と燃えてゐる圍爐裡の火、竈の火を見てゐると、何とももう歩く元氣は無かつた。わたしは折入つて一宿の許しを請うた。圍爐裡で何やらの汁を煮てゐた亭主らしい四十男は、わけもなく我等の願ひを容れて呉れた。

我等のほかにもう一人の先客があつた。信州海の口へ行くといふ荷馬車挽きであつた。それに亭主を入れて我等と四人、圍爐裡の焚火を圍みながら飲み始めた酒がまた大變なこと、なつた。

折々誰か小便に立つとて土間の障子を引きあけると、振ち切る様な霧がむく／＼とこの一座の上を襲うて來た。

十一月一日。

酒を過した翌朝は必ず早く眼が覺めた。今朝もそれであつた。正體なく寢込んでゐる友人の顔を見ながら枕許の水を飲んでゐると、早や隣室の圍爐裡ではばち／＼と焚火のはじける音がしてゐる。早速にわたしは起き上つた。

まだランプのともつた爐端には亭主が一人、火を吹いてゐた。膝に四つか五つになる娘が抱かれて

ゐた。昨夜から眼についてゐた事であつたが、この子の鼻汁は鼻から眼を越えて瞼にまで及んでゐた。今朝もそれを見い／＼、この子の名は何といひましたかね、と念のため訊いてみた。マリヤと云ひますよとの答へである。そして、それはこの子の生れる時、何とかいふ耶蘇の學者がこの附近に耶蘇の學校を建てるとか云つて來て泊つてゐて、名づけてくれたのだといふ。

『昨晚はどうも御馳走さまになりました』

と、やがてそのマリヤの父親はにや／＼しながら言つた。

『イヤ、お騒がせしました』

とわたしは頭を搔いた。

其處へ荷馬車挽きも起きて來た。

煙草を二三本吸つてゐるうちに土間の障子がうす蒼く明るんで來た。顔を洗ひに戸外おきでに出ようとその障子を引きあけて、またわたしは驚いた。丁度真正面に、廣々しい野原の末の中空に、富士山が白麗朗と聳えてゐたのである。昨日はあれをその麓から仰いで來たに、とうろたへて中村君を呼び起したが、返事もなかつた。

膳が出たが、わが相棒は起きて來ない。止むなく三人だけで始める。今朝は炬燵を作りその上で一杯始めたのである。霧は既に晴れ、あけ放たれた戸口からは朝日がさし込んで炬燵にまで及んで居る。

そしていつの間に出て來たものか、見渡す野原も、その向う下の甲州地も一面の雲の海となつてしまつた。富士だけがそれを抜いて獨りうら、かに晴れてゐる。二三日前にツイこの向うの原で鹿が鳴いたとか、三四尺の雪に閉ぢこめられて五日も十日も他人の顔を見ずに過す事が間々あるとか、丁度此處は甲州と信州との境に當つてゐるのでこの家のことを國境といふとかいふ様な話のうちに、おとなしく朝食は終つた。

困つたのはランプ部屋居士である。砂糖湯を持つて行き、梅干茶を持つて行き、お迎へに一杯冷たいのをぐつとやつて見ろとて持つて行くが、持つて行つたものを大抵飲み干すが、なか／＼御神輿が上らない。『とても歩けさうにない、あのお荷物を頼みますよ』とわたしが言つたので荷馬車屋もよう立ちかねてゐる。六時から十時まで、さうして過した。『いつまでもこれでは困るだらう、お前さん先に行つて呉れ』

と荷馬車屋を立たせようとしてゐる所へ、蹠蹠として起きて來た。ランプ部屋ではまだ何處やら勇ましかつたが、今朝はあはれ見る影もない。

早速出立、實によく晴れて、霜柱を踏む草鞋の氣持はまさしく脳にも響く快さである。昨日はその南麓を巡つて來た八ヶ嶽の今日は北の裾野を横切つてゐるわけである。からりと晴れたこの山のいただきにもうつすらと雪が來てゐた。

『大丈夫か、腰の所を何かで結へやうか』
『大、丈、夫、です』

と、居士は荷馬車の尻の米俵の上に鎮座ましまし、こくりくと揺られてゐる。

野原と云つても多くは落葉松の林である。見る限りうす黄に染つたこの若木のうち續いてゐる様は
すさまじくもあり、また美しくも見えた。方數里に互つてこれであらう。

漸く歌を作る氣にもなつた。

日をひと日わが行く野邊のをちこちに冬枯れ

はてて森ぞ見えたる

落葉松は瘦せてかぼそく白樺は冬枯れてただ

に眞白かりけり

二里あまり歩いてこの野のはづれ、市場といふへ來た。此處にも一軒屋の茶店があつた。綺麗な娘
がゐるといふので晝食をする事にした。

其處より逆落しのような急坂を降れば海の口村、路もよくなり、もう中村君も歩いてゐた。や、歩調
も整つて存外に早く松原湖に着き、湖畔の日野屋旅館におちついた。まだ誰も來てゐなかつた。

程なく布施村より重田行歌、荻原太郎の兩君、本牧村より大澤茂樹君、遠く松本市より高橋希人君

がやつて來た。これだけ揃うとわたしも氣が大きくなつた。昨日一昨日は全く心細かつた。

夕方から凄じい木枯が吹き出した。宿屋の新築の別館の二階に我等は陣取つたのであつたが、たび
／＼その二階の揺れるのを感じた。

宵早く兩戸を締め切つて、歌の話、友の噂、生活の事、語り終ればやがて枕を並べて寝た。

遠く來つ友もはるけく出でて來て此處に相逢

ひぬ笑みて言なく

無事なりき我にも事の無かりきと相逢ひて言

ふその喜びを

酒のみの我等がいちち露霜の消やすきものを

逢はでをられぬ

湖べりの宿屋の二階寒けれや見るみづうみの

寒きごとくに

隙間洩る木枯の風寒くして酒の匂ひぞ部屋に

揺れたつ

十一月二日。

夜つびての木枯であつた。たび／＼眼が覺めて側を見ると、皆よく眠つてゐた。わたしは端で窓の下、それからずらりと五人の床が並んでゐるのである。その木枯が今朝までも吹き通してゐたのである。そして木の葉ばかりを吹きつける雨戸の音でないと思つて聽いてゐたのであつたが、果して細かな雨まで降つてゐた。

午前中をば膝せり合せて炬燵に嚙りついて過した。晝すぎ、風はいよいよひどいが、雨はあがつた。他の四君は茸とりにとて出かけ、わたしは今日どうしても松本まで歸らねばならぬといふ高橋君を送つて湖畔を歩いた。ひどい風であり、ひどい落葉である。別れてゆく友のうしろ姿など忽ち落葉の渦に包まれてしまつた。

茸は不漁であつたらしいが、何處からか彼等は青首の鴨を見附けて來た。山の芋をも提げて來た。善哉々と今宵も早く戸をしめて圓陣を作つた。宵かけてまた時雨、風もいよ／＼烈しい。が、室内には七輪にも火鉢にも火がかつかと熾つた。

どうした調子のはずみであつたか、我も知らずひとにも解らぬが、ふとした事から我等は一齊に笑ひ出した。甲笑ひ乙應じ、丙丁戊みな一緒になつて笑ひくづれたのである。それが僅かの時間でなく、絶えつ續きつ一時間以上も笑ひ續けたであらう。あまり笑ふので女中が見に來て笑ひこけ、それを吐

りに來た内儀までが廊下につつ伏して笑ひころがるといふ始末であつた。たべた茸の中に笑ひ茸でも混つてゐたのか知れない。

十一月三日。

相も變らぬ凄じい木枯である。宿の二階から見ると湖の岸の森から吹きあげた落葉は凄じい渦を作つて忽ちにこの小さな湖を掩ひ、水面をかくしてしまふのである。それに混つて折々檜鳥までが吹き飛ばされて來た。そしてたまく／＼風が止んだと見ると湖水の面にはいちめん眞新しい黄色の落葉が散らばり浮いてゐるのであつた。落葉は檜が多かつた。

今日は歌を作らうとて皆むつかしい顔をする事になつた。

木枯の過ぎぬるあとの湖をまひ渡る鳥は檜鳥

かあはれ

聲ばかり鋭き鳥の檜鳥ののろのろまひて風に

吹かるる

檜鳥の羽根の下羽の濃むらさき風に吹かれて

見えたるあはれ

はるけくも昇りたるかな木枯にうづまきのほ
 る落葉の渦は
 ひと言を誰かいふただち可笑しさのたねとな
 りゆく今宵のまどる
 木枯の吹くぞと一人たまたまに耳をたつるも
 可笑しき今宵
 笑ひこけて臍へその痛むと一人いふわれも痛むと
 泣きつつぞ言ふ
 笑ひ泣く鼻のへこみのふくらみの可笑しいか
 なやとてみな笑ひ泣く

十一月四日。

今日はわたしは皆に別れて獨り千曲川の上流へと歩み入るべき日であつたが、『わが若草の妻し愛し
 も』とばかり言ひ張つてゐる重田君の宅を布施村に訪うてそのわか草の新妻の君を見る事になつた。
 やれとろ、汁よ鯉こくよとわが若草の君をいたはり勵まし作りあげられた御馳走に面々悉く食傷し

て昨夜の勢ひなくみなおとなしく寢てしまふた。

十一月五日。

總勢岩村田に出で、其處で別れる事になつた。たゞ大澤君は細君の里なる中込驛までとてわたしと
 同車した。もうその時は夕暮近かつた。

四五日賑かに過したあとの淋しさが、五體から浸み上つて來た。中込驛で降りやうとする大澤君を
 口説き落して汽車の終點馬流驛まで同行する事になつた。

泊つた宿屋が幸か不幸か料理屋兼業であつた。乃ち内藝者の總上げをやり、相共に繰返してうたへ
 る伊那節の唄。

逢うてうれしや別れのつらさ逢うて別れがなけりやよい

十一月六日。

どうも先生一人をお立たせするのは氣が揉めていけない、もう一日お伴ませう、と大澤君が憐憫
 の情を起した。そして共に草鞋を履き、千曲川に沿うて鹿の湯温泉といふまで歩いた。

其處で鯉の味噌焼などを作らせ一杯始めてゐる所へ、裁判官警察官山林官聯合といふ一行が押し込

40 んで来た。そして我等二人は普通の部屋から追はれて、臺所の上に當る怪しき部屋へ押込まれた。下からは炊事の煙が濛々として襲うて来るのである。

『これア耐らん、まつたくの燻し出しだ』

と言ひながら我等は膳をつきやつてまた草鞋を履いた。

夕闇寒きなかを一里ほど川上に急いで、湯澤の湯といふへ着いた。

十一月七日。

朝、沸し湯のぬるいの中に入つてみると、ごう／＼といふ木枯の音である。ガラス戸に吹きつけられ、その破れをくゞつて落葉は湯槽の中まで飛んで来た。そしてとう／＼雨まで降り出した。

終日、二人とも、炬燵に潜つて動かず。

十一月八日。

誘ひつ誘はれつする心はとう／＼二人を先日わたしと中村君と晝食した市場といふ原中の一軒家まで連れて行つた。其處で愈々お別れだと土間に切られた大きな爐に草鞋を踏み込んで盃を取らうとすると不圖其處の壁に見ごとな雉子が一羽かけられてあるのを見出した。これを料理して貰へまいかと

言へば承知したといふ。其處へ先日から評判の美しい娘が出て来て、それだつたら二階へお上りなさいませといふ。兩個相苦笑して草鞋をぬぐ。

いつの間にやら夜になつてゐた。初めちよい／＼顔を見せてゐた娘は來ずなり、代つてその親爺といふのが徳利を持つて來た。そして北海道の監獄部屋がどうの、ピストルや匕首が斯うのといふ話を獨りですて降りて行つた。小半日、ぐゞ／＼して終に泊り込んだ我等をそれで天晴れ威嚇したつもりであつたのかも知れない。

二階は十六疊位も敷けるがらんだうな部屋であつた。年々馬の市が此處の原に立つので、そのためこの一軒家であるらしい。

十一月九日。

早曉、手を握つて別れる。彼は坂を降つて里の方へ、わたしは荒野の中を山の方へ、久しぶりに一人となつて踏む草鞋の下には二寸三寸高さの霜柱が音を立てつつ崩れて行つた。

また、久し振の快晴、僅か四五日のことであつたに八ヶ嶽には早やとつぷりと雪が來てゐた。野から仰ぐ遠くの空にはまだ幾つかの山々が同じく白々と聳えてゐた。踏み辿る野邊山が原の冬ざれも今日

野末なる山に雪見ゆ冬枯の荒野を越ゆと打ち
出でて來れば
大空の深きもなかに聳えたる峰の高きに雪降
りにけり
高山に白雪降りいつかしき冬の姿を今日よ
りぞ見む
わが行くや見る限りなるすすき野の霜に枯れ
伏し眞白き野邊を
はりはりとわが踏み裂くやうちわたす枯野が
なかの路の氷を
野のなかの路は氷りて行きがたし傍への芝の
霜を踏みゆく
枯れて立つ野邊のすすきに結べるは氷にまが
ふあらけき霜
わが袖の觸れつつ落つる路ばたの薄の霜は音

立てにけり

草は枯れ木に残る葉の影もなき冬野が原を行
くは寂しも

八ヶ嶽峰のとがりの八つに裂けてあらはに立
てる八ヶ嶽の山

昨日見つ今日もひねもす見つつ行かむ枯野が
はての八ヶ嶽の山

冬空の澄みぬるもとに八つに裂けて峰低くな
らぶ八ヶ嶽の山

見よ下にはるかに見えて流れたる千曲の川ぞ
音も聞えぬ

入り行かむ千曲の川のみなかみの峰仰ぎ見れ
ばはるけかりけり

外によかつた。

おもて來た千曲川上流の溪谷はさほどでなかつたが、それを中に置いて見る四方寒山の眺望は意

ゆきゆけどいまだ迫らぬこの谷の峽間の紅葉
時過ぎにけり

この谷の峽間を廣み見えてをる四方の峰々冬
寂びにけり

岩山のいただきかけてあらはなる冬のすがた
ぞ親しかりける

泥草鞋踏み入れて其處に酒をわかすこの國の
圍爐裡なつかしきかな

とろとろと榻火燃えつつわが寒き草鞋の泥の
乾き來るなり

居酒屋の榻火のけむり出でてゆく軒端に冬の
山晴れて見ゆ

とある居酒屋で梓山村に歸りがけの爺さんと一緒になり、共にこの溪谷のつめの部落梓山村に入つた。そして明日はこの爺さんに案内を頼んで十文字峠を越ゆることになつた。

此處の宿屋でまた例の役人連中と落合ふことになつた。ひとの食事をとつてゐる炬燵にまで這入つて来て足を投げ出す傍若無人の振舞に耐へかねて、膳の出たばかりであつたが、わたしはその宿を出た。そして先刻知り合ひになつた爺さんのうちにも泊めて貰はうとその家を訪ねた。爺さんはまだ夕闇の庭で働いてゐた。見るからに荒れすたれた家で、とても一泊を頼むわけに行きさうにもなかつた。當惑しながら、ほかにもう宿屋は無からうかと訊くと、木賃宿ならあるといふ。結構、何處ですといふと爺さんが案内して呉れた。木賃宿とは云つても古びた堂々たる造りで、三部屋ばかり續いた一番奥の間に通された。

煤びた、廣い部屋であつた。先づ炬燵が出來、ランプが點り、膳が出、徳利が出た。が、何かなしに寒さが背すぢを傳うて離れなかつた。二間ほど向うの臺所の圍爐裡端でもそろそろ夕飯が始まるらしく、家族が揃つて、大賑かである。わたしはとうとう自分のお膳を持つてその焚火に明るい圍爐裡にばたまで出かけて仲間に入つた。

最初來た時から氣のついてゐた事であつたが、此處では普通の廬でなく、馬を屋内の土間に飼つてゐるのであつた。津輕でもさうした事を見た、餘程この村も寒さが強いのであらうと二疋並んでこちらを向いてゐる愛らしい馬の眼を眺めながら、案外に楽しい夕餉を終つた。家の造り具合、馬の二疋ゐる所、村でも舊家で工面のいゝ家らしく、家人たちも子供までみな卑しくなかつた。

十一月十日。

満天の星である。切れる様な水で顔を洗ひ、圍爐裡にどんどと焚いて、お茶代りの般若湯を嘗めてゐると、やがて味噌汁が出来、飯が出来た。味噌汁には驚いた。内儀は初め馬の秣桶で、大根の葉の切つたのか何かを掻きまぜてゐるが、やがてその手を圍爐裡にかゝつた大鍋の漸くぬるみかけた水に突つ込んでばしゃ／＼と洗つた。その鍋へ直ちに味噌を入れ、大根を入れ、斯くて味噌汁が出来上つたのである。

馬たちはまだ寝てゐた。大きい身體をや、圓めに曲げて眠つてゐる姿は、實に可愛い、ものであつた。毛のつやもよかつた。これならお前たちと一つ鍋のものをたべても左程きたなくはないぞよと心の中で言ひかけつゝ、味噌汁をおいしくいたゞいた。

寒しとて圍爐裡の前に厩作り馬と飲み食ひす

この里人は

まるまると馬が寝てをり朝立あさだちの酒わかし急ぐ

圍爐裡の前に

まろく寝て眠れる馬を初めて見さかはゆきも

のよ眠れる馬は

のびのびと大き獸のいねこるは美しきかも人

の寝しより

其處へ提灯をつけて案内の爺さんが來た。相共に上天氣を喜びながら宿を出た。

十文字峠は信州武州上州に跨がる山で、此處より越えて武藏荒川の上流に出るまで上下七里の道のりだといふ。その間、村はもとより、一軒の人家すら無いといふ。暫らく溪に沿うて歩いた。もう此處等になると千曲川も小さな溪となつて流れてゐるのである。やがて、溪ばたを離れて路はや、嶮しく、前後左右の見通しのきかない様な針葉樹林の中に入つてしまつた。木は多く樅と見た。今日はいちち斯うした森の中を歩くのだと爺さんは言つた。

三國に跨がるこの大きな森林は官有林であり、其處にひそく盗伐が行はれてゐた。中でもや、組織的に前後七年間にわたつて行はれてゐた盗伐事件が今度漸く摘發せられたのださうだ。何しろ關係する區割が廣く、長野縣群馬縣東京府の役人たちがそのために今度出張つて來たのだといふ。わたしは苦笑した、その役人共のためにわたしは二度宿屋から追放されたのだと。

いかにも深い森であつた。そして曲のない森でもあつた。素人眼には唯だ一二種類と見ゆる樹木が限界もなく押し續いてゐるのみであるのだ。不思議と、鳥も啼かなかつた。一二度、駒鳥らしいもの

を聞いたが、季節が違つてゐた。たゞ、散り積つてゐるこまかな落葉をさつくり／＼と踏んでゆく氣持は悪くはなかつた。それが五六里の間續くのである。

幸ひに登りつくすと路は峰の尾根に出た。そして殆んど全部尾根つたひにのみ歩くのであつた。ために遠望が利いた。ことに峠を越え、武州地に入つてからの方がよかつた。我等の歩いてゐる尾根の右側の遠い麓には荒川が流れてゐる、同じく左側の峽間の底には末は荒川に落つる中津川が流れてゐた。いや、ゐる筈であつた。山々の勾配がすべて峻しく、且つ尾根と尾根との交はりが非常に複雑で、なか／＼其處の川の姿を見る事は出来なかつた。

やがて夕日の頃となると次第にこの山上の眺めが生きて來た。尾根の左右に幾つともなく切れ落ちてる山袈、澤、溪間の間にほのかに霧が湧いて來た。何處からとなく湧いて來たこの霧は不思議と四邊の山々を、山々に立ちこんでゐる老樹の森を生かした。

また、夕日は遠望をも生かした。遠い山の峰から峰へ積つてゐる雪を輝かした。淺間山の煙だらうとおもはるゝものをもかすかに空に浮かし出した。其他、甲州地、秩父地、上州地、信州地は無論のこと、杳かに越後境だらうと眺めらるゝもろ／＼の峰から峰へ、寒い、かすかな光を投げて、云ふ様なき莊嚴味を醸し出して呉れたのである。

『ホラ、彼處あそこにちよつぴり青いものが見ゆるづら、』

『』

老案内者は突然語り出した。指された遙かの溪間には、溪間だけに雜木もあると見え、色濃く紅葉してゐた。その紅葉の寒げに續いてゐる溪間のひと所に、成程、ちよつぴり青いものが見えてゐた。

『あれは中津川村の大根畑だ』

と老爺はうなづいて、其處の傳説を語つた。斯うした深い溪間だけに、初め其處に人の住んでゐる事を世間は知らなかつた。ところが折々この溪奥から椀のかけらや、箭の折れたのが流れ出して來る。サテは豊臣の殘黨でも隠れひそんでゐるのであらうと、丁度江戸幕府の初めの頃で、所の代官が討手に向うた。そして其處の何十人かの男女を何とかいふ蔓かづらで、何とかいふ木にくゝつてしまつた。そして段々調べてみると同じ殘黨でも鎌倉の落武者の後である事が解つて、蔓を解いた。其處の土民はそれ以來その蔓とその木とを恨み、一切この溪間より根を斷つべしと念じた。そして今では一本としてその木とその蔓とを其處に見出せないのださうである。

日暮れて、ぞく／＼と寒さの募る夕闇に漸く峠の麓村栃本といふへ降り着いた。此處は秩父の谷の一番つめの部落であるさうだ。其處では秩父四百竈の草分と呼ばれてゐる舊家に頼んで一宿さして貰うた。

49 栃本の眞下をば荒川の上流が流れてゐた。殆んど直角に切れ落ちた斷崖の下を流れてゐるのである。向う岸もまた同じい斷崖で聳えたつた山となつて居る。その向う岸の山畑に大根が作られてゐた。栃

本の者が断崖を降り、溪を越えまた向う地の断崖を這ひ登つてその大根畑まで行きつくには半日か、
 るのださうだ。歸りにもまた半日かゝる。ために此處の人たちは畑に小屋を作つて置き、一晚泊つて、
 漸く前後まる一日の爲事をして歸つて來るのだといふ。栃本の何十軒かの家そのものすら既に断崖の
 中途に引つ懸つてゐる様な村であつた。

十一月十一日。

爺さんはまた七里の森なかの峠を越えて梓山村へ歸つてゆくのである。わたしは一人、三峰山に登
 つた。そして其處を降つて、昨日尾根から見損つた中津川が、荒川に落ち合ふ所を見度く、二里ばか
 り溪沿ひに溯つて、名も落合村といふまで行つて泊つた。

翌日は東京に出、ルックサツクや着莫座を多くの友達に笑はれながら一泊、十七日目だかに沼津の
 家に歸つた。

身延七面山紀行

午前七時沼津驛發、富士驛乗換、大宮驛下車、淺間神社に詣でた。富士山を背景にして世間に聞え
 た神社としてはやゝ奥行の浅い觀があつた。いかにも野原に露出してゐるといふ感じのお宮であつた。
 次の汽車の時間を待ちながらお池の鯉と暫く遊ぶ。鯉には見ごとなのがゐた。ことに重々しい曇日
 の空の光と青葉の蔭と池の水の薄濁りとがこの魚の群の色や形を一層面白く美しく見せた。眞鯉緋鯉
 のほかに青白い色をした大きいのが幾疋か混つてゐるが、これが徐ろに、濁りの底から浮き上つて來
 る時はいかにも貴とげにまた美しく見えた。石の反橋の蔭に靜かに浮んで動かないのにはその鱗や尾
 鰭の色に冷やかな陰影が織り込まれてゐてなほ常ならず眺められた。

大宮驛を離れると間もなく汽車は富士川に沿つた。實は私はこの線路は初めてなので、この大きな
 河瀬を見下しながら登つてゆく車窓の眺めを楽しんで來たのであつたが、やがて失望を覺えた。見ゆ
 るものはたゞ廣々と白酒しよれた河原のみで、河の瀬は僅かにその河原の何處かに寄生した形で細々と流
 れてゐるにすぎないのである。さみだれを集めてはやし最上川、といふ様な青葉若葉のころの大河の

眺めとしてはひどく乾び果てたものであつた。でも、ところ／＼そのたゞ、廣い中に楊の木の原があり、風に靡いてほの白い葉裏を見せてゐるのなど、やはり夏の初めの河原であつた。ことに對岸の青葉の中にこの汽車と並行して見えがくれに一本の路の續いてゐるのが私の心を靜かにした。汽車のなかつた以前、岩淵から登つて來るにはその路によつたのださうである。

車内はこんでゐた。中に神港年參講と白く抜いた赤地の旗を押し立てた六七十人ばかり、七分通りは女人で他に老爺や若者の混つた一團は神戸から來たのださうで、昨夜ちつとも眠れなかつたところほしながらもこれ見よがしに騒ぎ合つてゐた。

正午近く終點身延驛に着いた。同行の大悟法君と二人、驛前にひしめき合つてゐる俵屋馬車屋の間をさつさと抜けて田舎には不似合な大きな橋身延橋といふを渡つた。車内の人いきれに蒸されてゐた身に吹きあつる河風が氣持よかつた。折柄その風を豊かに孕んで溯つて來る二三の白帆も珍しかつた。久し振に履きしむる草鞋のあたりごこちが誠によく、自づと急ぎ足になつて溪に沿うた路を登つてゆく。對岸の茂みには栗の花がほの白く咲き亂れ、道下の瀬の中からは河鹿の聲が斷えず聞えて來た。

途中で思ひがけぬものを見た。溪の瀬が一つの小さな淀を作つてゐる。其處に泳いで居る二人の女があつた。季節がまだ早いし、それに一人は十七八、一人は三十越した年増、二人とも揃つて派出な海水着を着けてゐる。驚いて立ち留つた我等の視線から逃る、ふりに若い方の女は二つ三つの大きな岩

の間を身をくねらせて這つてゐるが、豊かに肉づいた手足の伸び、着物の色艶、何だか美しい獸を見る様であつた。

『近所の坊さんの娘や細君でもあるでせうね』

『いかにも日蓮宗らしいや』

笑ひ捨て、急げば程なく總門に着いた。開會關と大書された額が掲げてある。當山三十六代日潮上人の揮毫だといふ。門を過ぐれば爪先上りの身延の町となり、小さな商家がとり／＼に店を飾つて客を待つて居る。小さく明るく細々とした町である。町の行きあたりに三門があり、門を入れれば直ぐに菩提梯と稱へられ二百八十七段からあるといふ急峻な石段となる。それを登りつめた所が即ち久遠寺である。

我等の登つた六月廿六日は折よくも宗祖入山六百五十一年目の當日だといふ事で、開闢大法會といふが行はれてゐた。集る僧侶おほよそ五六十人、おほく經典を持ち、又は樂器を携へ、飾り立てられた廣やかな本堂の内に圓く大きく輪を作つて徐ろに練り歩き、所謂行堂とかいふ會式が始められてゐた。中に三四人、天童に型どつたといふ稚兒も混つてゐた。樂器の響讀經の聲、立ち籠る香煙と共に堂内に満ち満ちて見るからに眼覺ましいものであつた。一拜の後我等はまた草鞋を履いて石段を降り、三門より右に折れ、七面山の方へ登りかけた。

路は直ぐに溪に沿うた。その溪はたに深敬院病院と記された木札のか、つた一堂があつた。深敬院と口のうちに泣きながら私は不圖思ひ出した事があつた。今より十五六年前、私は一度身延山に詣でた事がある。着いたは夜で、三門近くの宿屋に泊り、翌朝まだ暗いうちに久遠寺に詣でた。眼下の溪間には山から町にかけてひつたりと霧がたちこめてゐるが、その深い霧の中の或る一個所から實に烈しい團扇太鼓の音と題目の聲とが聞えてゐる。何處もまだ眠つてゐるなかにどうした事かと、たづねるともなくその聲の方へ霧をわけてゆくと、ある一つのお堂の内に耿々と蠟燭を立てつらね、その前に押し並んだ廿人たらずの人が一齊に祈願を凝らしてゐるのであつた。太鼓の打ちかたお經の唱へかた、それこそいづれも物凄じばかりの一心不亂さで、何心なく見てゐるうちに私自身何か知ら一種の悪寒を覺えたのである。そしてそれと同じい感じをその前に熊本の清正公神社で癩病血統の人たちの捧げてゐる祈りを見て身に覺えた事をすら思ひ出したのであつた。聞けばそれらはみな精神病の人たちであつたのである。深敬院の文字を見ながら舊い記憶を思ひ出してあたりを見廻すと正しく場所も昔の其處である。たゞ看板のみが新しい。

『深敬院はひどいね』

苦笑しながら通り過ぎた。今日は堂内に蟲一つ鳴かぬ静かさであつた。

溪が漸く深山の溪らしく岩の間に眞白な飛沫をあぐる様になつてゐた。道も細まり、上を掩ふ若葉

の茂みも深くなつた。草鞋の歩調も次第に定まらうとしかけた時、

『ほつたんかけたか、ほつたんかけたか』

と不意に頭上近く啼き過ぐる鳥を聞いた。楽しんで來た一つの杜鵑の聲である。毎年の事だが、これらの鳥の聲を聞かないうちにはこの季節が身に沁まず、また聞かすにはおかれぬ焦燥をすら覺ゆるのが私の癖である。

『よし〜、啼いてゐるな』

さういふ氣持で洋傘の柄に両手を置き、暫く立ち停つて耳を傾けた。

御草庵舊跡といふ前を通つた。此處が即ち六百數十年前初めて日蓮の庵を結んだ跡だとかで、相迫つた溪間のほんの僅かの窪地である。此處に籠つて獨り靜かに燃え立つ心を抑へながら水を汲み枯枝を拾つた姿の一人の僧侶を思ひ浮ぶる事は他のいづれの金ぴかも、日蓮宗の看板を見るより遙かになつかしい事であつた。私たちは久しい間、落葉の上に腰をおろして、眼下の細い流の石に碎くるさまやあたりの草木の風にそよぐ姿に見入り親しんだ。

路は漸く峻しくなつた。そして折々立ち停つて見下すたびに次第に高い所に登つてゐるのが感ぜられた。我等の登つてゐるのと溪一つを距てた向う側の峻しい傾斜の山腹は一帶に廣やかな樅梅などの針葉樹林となつてゐるが、その青黒い斜面の何處からとなく霧が湧いては擴がり、やがてまた消えて

行つた。霧に浮く老樹の椏の梢から梢に萌え渡つた新芽の美しさは、度々私の脚を引き留めた。舊い葉は殆んど漆黒とも言ひたい固い黒さで、その上に僅かに吹き出た今年芽の眞みどりはまた例へやうのない清純な、柔かな色であるのだ。夙うに知るべくして知らなかつたこの大きく間の抜けた樹の若芽の美しさを今年初めて知る事の出来たのも可笑しかつた。

椏梅や雑木の多い山路に一ところ見ごとな杉の立木の立ちこんだ林があつた。杉の数は三百本か五百本か、さまでに大きくはなく丁度根もとが我等の一抱へほどで、而かもその大きさを持つたま、眞直ぐに高々と生ひ伸びて胸すくばかりの高さにまで生ひ伸びて茂つて居るのである。根もとも梢も大きさに變りはなげに、それこそ鶉の毛一つの曲りも見せず、聳えも聳えたり眼の疲る、高さにまで立ち聳えてゐるのである。路はその林の中を通つてゐた。何氣なく歩み入つて不圖振り仰ぐと共に我知らず讚嘆の聲を放つて暫らく見惚れてゐたが、耐へかねて私はその林のまん中どころと思はる、あたりに行き落葉の上に仰臥してしまつた。見れば見るほど美しき杉の木よ、杉の林よ。ことに美しいのは所謂老杉古松の悪固いところを此處の杉は持つてゐなかつた。いかにも若い。しかもびるつこい若さでない。ほどよく伸び、ほどよく固まり、ほどほどの色を光をその葉に幹に持つて、天空開潤、何のさやりもなく生ひ伸びてゐるのである。お、いまその林が揺れる。折からの風に、林全帯が耳に聞えぬ一つの調子を作つて、かすかにかすかに揺れ始めたのである。私は冷たい大地に双手を一文

字に投げひろげたまま、飽く事なくこの明るく大きくさわやかな杉の林を讚美した。

身延から七面山の頂上まで、ほど二十町おき位にお寺とも茶店ともつかぬ建物が一軒つつ路端に續いてゐた。奥は簡單な祖師堂となり店先には駄菓子などが並べてある。これもその一つであつたらうと想像せらる、十萬部寺といふのが焼けてゐた。焼跡に立てられた木札によると僅かにこの十日ほど前の事である。建物を圍んでゐた老木の杉木立の焼残りの焦げ色も眞新しい。隣家といふものを持たぬ深山の中の斯うした一軒家が焼ける時の光景、その家人たちの氣持はどんなものであつたらうとそゞろに思ひやられた。然し、工面のい、家と見えて早速もう新しい木材にそれぞれ手が入れられて積み重ねてあつた。

其處等は路は既に溪間から山腹を出て尾根つたひの様な處を通つてゐた。折も折、朝からの重い曇りが晴れかけて、雲はまだありながら空の何處かに明るみが宿つてゐた。漸く馴れて來た歩調に歩みは次第に速くなりながら、それと共に疲れも出て、多く足もとをのみ見詰めて歩いてゐた鼻先に、七面山遙拜所といふ札をか、げた小さな茶店のあるのが眼についた。店は閉ぢてあつた。遙拜所の文字に氣附いて面を舉ぐると、成程丁度路の曲り角に當つた其處のや、右手の方に形けはしい高山の聳えてゐるのが仰がれた。山の上あたり僅かに雲が切れて鋭い頂上一帯に夕日が青やかに落ちてゐた。

『や、素敵だ、あれが七面山かナ』

さう私がいふと、大悟法君もそちらを振仰ぎながら晴やかな聲に、
『さうでせうね、あれだと幾らか山らしい氣がしますね』
と言つた。

茶店の裏手に廻つて小用を足してゐると、その山よりずっと左手に當つて同じく峻しい形の山のあ
るのを見た。前のはそれぞれ錐を並べた形に尖つた峰を並べてをり、其處で見附けた山は屏風を立て
た様な扁平な容で、いづれも相當の高みを持ち、峻しい角度を持つて相聳えてゐるのである。私は大
悟法君を呼んだ。

『サテ困つた、どつちが一體七面山だらう』

『サア、どつちにしても明日は相當面白いでせうよ』

初め身延を餘程の高山に想像して来てや、失望氣味であつたこの元氣のい、年若な友人は、どちら
にせよあれなら多少登り甲斐があると云つた風に明るい微笑を浮べて腕を組んだま、双方の山を仰ぎ
較べてゐた。

其處から路は急な下り坂となつてゐた。随分ときびしい坂である。ともすれば走り出しさうな足も
とを踏みしめながら用心して降りてゐると思ひがけぬその眼下の麓に一かたまり人家の寄つてゐると
ころが見えて來た。二人とも急に言ひ合せた様に足に力を入れて立ち停つた。

『あれですね、赤澤村は』

『さうだ、確かにあれだ、とすると……』

私は答へながら、友人を振返つて笑ひ出した。

『あれなら面白い、こいつは思ひがけぬ拾ひ物をした、あそこなら君確かに面白いよ』

友人も點頭いて笑つた。

病みあがりの私には到底今日中に七面山まで登りつける勇氣はなく、身延山と七面山との中間に在
るといふ赤澤村に泊る事にきめてゐたのであつた。そしてその赤澤村といふのを、その名前やまたは
今日半日辿つて來た身延山の山の淺さなどから想像して極く平べつたい平凡な澤の中に在る事とのみ
思ひきめてゐた。ところがいまこの急坂の途中で發見した赤澤村は——附近に村らしいもの、無い事
を地圖によつて知つてゐたのでそれはどうでも赤澤村であらねばならぬ——平凡なところか、その急
峻な垣の一部に位置して、更にその下に急坂あり、其處にかなりの溪を置いて真向うに先程から仰い
で來た傾斜きびしい高山の一つと相對してゐるのである。村自身の位置も面白く、真向うの山を仰ぐ
に丁度恰好な場所に當つてゐる。ほんとに掘り出しものをした氣持で、戸數十戸ばかりのその村をさ
して元氣よく坂を降りて行つた。

村は全部宿屋ばかりで出來てゐるらしかつた。我等は坂を降りながら、對岸の山を仰ぐに最も位置

のい、宿屋を選ぼうと路々評議して来て、とにかく一番取つ着きのゑびす屋といふにあがる事にした。二階に通るや早速その溪を見、山を仰ぐに適當らしい一室を自ら選定して先づ障子を引きあげた。

善哉々々、山は軒に迫つて真向うに、溪はや、身體を乗り出して見下す位置の下方に在つた。ことにまた今更らしく仰がれたはおほどかに前面一帯に立ちはだかつて聳えた山の半分以上の高さに夕日が明らかに射し渡してゐることであつた。近く来て見れば見るほどこの山には木が深かつた。そしてその七八分通りが濁葉樹で、山が高いだけに少し季が遅れて今が若葉の眞盛りらしく、山全體が夕日に透いても見ゆるまでに緑の色が鮮かであつた。

主婦の挨拶を聞き流して私は問うた。

『七面山はどれです』

け、んな顔をして彼女は頸を低めて軒端を仰ぎながら、

『それですよ』

『矢つ張りこれか、い、山ですなエ』

と我等は顔を見合せて笑つた。

『すると、もう一つあちらの高い山は』

『あれは筑が嶽』

多分寒からうと推察して持つて来た冬シャツを取出して着込みながら私はなほ部屋には入らず、廣い冷たい縁側に疲れた足を投げ出しながらこの若葉の山の峰に射してゐる夕日を眺めてゐた。幾日待つても晴れさうもないので肝癪半分いつそ雨の中を濡れ通さうと覺悟して出て来た私たちにこの鮮かな夕日はまつたく難有かつた。空半分、かつきりと青み渡つてゐる。幾らか頭に置いて出て来た樂しみの一つの今夜は確かに月がある筈だ。宵月でなく、や、更けて出る筈、私はその方角などをも考へながら山から空を見廻した。

夕日は、然し、永くは射してゐなかつた。頂上から消え去つたと思ふと、見る／＼山の若葉は黝ずんで来た。そして、俄かに溪の瀬の音が耳に立つて来た。うすら寒い夕闇を感じながらもなほ其儘欄干に凭れてをると、何やらばち／＼と物の燃ゆる音が聞え出した。見れば、宿の前からとろ／＼と登つて行つた坂路の眞中に百姓の女房たちが二三人せつせと麥の粃殻を燃やしてゐるのであつた。なるほどツイ先刻私たちはその路なかに敷いてうす黄いろな刈麥の擴げられた席の上を草鞋のまゝに踏んで通つて来たのであつた。その火を見附けたか、四五人の子供たちが何やら叫びながら宿の前を通つて駈け登つて行つた。

『お山には佛法僧は啼きませんか』

釣洋燈を持つて入つて来た背の馬鹿高い宿屋の隠居に私は訊いた。

『啼くさうですよ、月のい、晩なんかによく啼くといひますがね、私等にはツイ氣がつきませんよ』
『郭公は』

『ア、あれなら啼きます。毎晩啼きます』

私はにやりと笑ひながら傍の友人を顧みた。

『大悟法君、これア今夜は眠るわけに行かんぞ』

この友人には今日身延の御草庵舊跡のあたりで聞いて、それから路々聞き續けて来た杜鵑すら殆んど初めての鳥であつたらしい。佛法僧、郭公、筒鳥、すべてが彼にとつては生れて初めてのめづらしい深山の鳥であるのだ。

それでも私は夕飯の時の酒のためか疲れのためかよく眠つた。毎晩の癖の酔醒の水を飲まうとして枕許の時計を見ると二時である。サテ、と思ひながら頭を舉げて見ると、これはまた素晴らしい、障子半分がくつきりと白く明るく染つてゐる。突嗟の勢ひで私の頭は冴えてしまつた。そして起き上つて縁へ出た。

成程い、月夜だ。宿の下から坂なりに並び下つてゐる屋並びの屋根も、それを圍む野菜畑も、ツイ右手下の寺の杉の森も、すべてひつたりと月の光に濡れ輝いてゐる。いよ／＼瀬の音の冴えて聞ゆる遙かの下の溪川の川原も瀬もさながら刻みあげたもの、様に白々と見えて居る。月は丁度七面山の峰

つづきを横さまに照らし出して、や、中空低く懸つてゐた。此處から仰ぐ山の絶壁面は殆んどすべて大きな濃密な陰影となつて、その廣やかな中に起伏してゐる山壁の高みと、頂上の峰の走りとだけが浮き出た様に白い光を宿して居る。

枕許から煙草を持つて来て私は久しい間冷たい縁側に坐つてゐた。そして見れば見るだけ明るい静かな眼前の景色に眺め入つた。が、たゞ溪川の音と其處に鳴くであらう河鹿の聲とが冴えてゐるだけで、何の鳥も啼かなかつた。イヤ、何鳥か折々聞き馴れぬ聲に啼くのはあつたが、心あての鳥ではなかつた。寒さに我慢が出来兼ねてこの靜かな景色に別れようとしてゐると、友人がこつそりと出て来た。

『啼きませんね』

『啼かん、啼かなきアならぬ夜だけどね』

私は部屋に入つた。代りに友人が縁に坐つた。

またぐつすりと眠つてやがて頭も軽く眼が覺めた。笥の水で髪を洗ひ顔を洗ひ、氣持のい、肌寒を覺えながら部屋に歸つて來ると、あれからずつと起きてゐたらしい友人が待ち受けてゐて問ひかけた。
『あれは何でせう、いま啼いてるのは』

いかにも何鳥か啼いてゐる。丁度いま日の射して來たところ、夕日とはまた格別な若葉の山の朝日

のなかで、切々として何の鳥か啼いてゐる。寂びて、而かも水々しい。

『サテ、聞いた事のある鳥だが……』

暫く考へても思ひ出せなかつた。一羽でなく、二羽か三羽か煙る様な若葉の山の山合で啼き交してゐる。

『丁度あそこをお登りになるのです』

眞赤な炭火を持つて來た宿の亭主は腰をかゞめながら指さした。

『丁度あの、ずうつと上まで續いてゐる杉並木の中をお登りになるのです』

頻りにいまその珍しい鳥が啼き交して、瑞々しい若葉の渦を巻いてゐる山腹に、一列黒く杉並木らしいものが見ゆる。

『すると、随分険しい登りですね』

『ナニ、此處から見た程の事はありません』

草鞋を履くと直ぐまた急な下り坂となつた。二町ほど部落の間を下るなかに、我等の泊つたのより遙かに大きく古めかしい宿屋の一二軒が眼についた。昔から開けたる身延七面山街道の合の宿と云つた感じがなつかしく胸に湧いた。程なく昨日から夕日に眺め月影に見下してゐた溪川の春木川といふ川縁へ降りついた。此處もまた山奥の溪らしくなく川原がちの溪ではあつたが、流石に水は澄んで

ゐた。そして川原も洗ひあげた眞白さの川原であつた。

朝じめりの路を心地よく歩いてゐると、早や向うから例の團扇太鼓の音が近づいて來る。行きぢがひに見れば網代笠を冠つて白地木綿の着物には所嫌はず南無妙法蓮華經を書き散らした男であつた。そして歩きながらに太鼓を叩きお題目を唱へて居る。昨日とてもその通り、行き逢ふすべてが斷間もなく南無妙法蓮華經を呼び續けてゐる人たちはばかりであつた。

『ヤ、御苦勞さま、南無妙法蓮華經、南無……』

と、これがきまつた挨拶であつた。

身延地から七面山へ越ゆるところに羽衣橋といふが高々とかがつてゐた。昨日渡つた身延橋も田舎に珍しい大仕掛なものではあつたが、それは要するに鐵道會社のかけた營業用の大仕掛であつた。が、いま見るこの羽衣橋はそれとは打つて變つた神々しい、清楚な、堅牢なものである。先づ第一に日蓮宗に似合はぬその清々しさが目についた。東京の人某大阪の人某、二人の共同喜捨から成り、某工學博士といふ人の設計に據つたものださうである。私はいまこの紀行を書きながらこの設計者の名前を忘れた事を残念に思ふ。斯うした山奥の且つまた身延から七面山へ越す橋として、それ／＼の條件によくびつたりと適合する様に實に氣持よく出來てゐるのである。合せてまた私はその構成せられた材料や用式に就いて語る事の出來ぬのを残念に思ふ。

橋にかゝらうとする左手に一つの瀧がかゝつてゐた。白糸の瀧といふ。高さ約十丈、正保年間徳川家康の側女お萬の方養珠院、三七日間この瀧に浴して後七面山に登つたのを縁起として今でもこの瀧に身を淨めてお山にかゝる人が多いといふ。

この好ましい橋を一二度行き戻りしてみなみや川下の眺望を楽しんだ。ことに川下かけて僅かに開けてゐる峡谷の空に思ひがけない遙かに大きな山脈を望み見た。山脈の嶺から嶺にかけてほのかに雪が輝いてゐた。方角といひ山容といひどうしても信濃の赤石山脈であらねばならぬ。

橋から直ぐまた登りとなつた。宿屋から望み見た通りに坂路の兩側に杉の並木があり、それを圍んで種々雑多な雑木の若葉があつた。掩ひかぶさる様な若葉である。その深い森の中で文字にも言葉にも移す事の出来ない微妙な音いろを持つた例の鳥が狂ほしげに啼き交してゐる。ツイ身近に来て啼いたかと思ふと、ずつと離れて啼く。

『さかんに啼きますね』

『……………』

幾度か我等は足をとめて耳を澄ませた。蒸す様な若葉の色や匂の焦點をなすかのごとくによく徹つた聲で啼いてゐる。立ち寄つた路傍のとあるお堂で私は訊いた。

『あれは何の鳥です』

『あれですか、あれは水戀鳥みづこひどりですよ』

『ア、さうでしたか、水戀鳥でしたか』

聞いた様な鳥と思つた筈だ、昨年の初夏、三河の鳳來寺山で私は初めてこの鳥を聞いたのであつた。大きき鶉に似、全身眞紅、火の色をした鳥だといふ。

『あつ、あれが水戀鳥ですか』

友人も安心した様に言つた。前に私から噂をも聞きまたその鳥を詠んだ私の歌をも彼は知つてゐたのである。

『見たいものだなア』

また一つの欲望が殖えた。

羽衣橋あたりまで晴れてゐた空はいつの間にか曇つて來た。路から見下す溪間にはいち早く霧が生れて、ともすると我等の側まで靡いて來る。自づと足も速められて行くのであつたが、或る時、私はフイと立ち停つた。そして不思議な顔して同じく立ち停つた友人に惶て、或る方角を指さしながら私は早口に言つた。

『君、ソレ、啼いてる、筒鳥が』

『エ、……………』

彼も惶て、耳を立てたが、馴れぬ耳には俄かにそれと聞きわけ難かつた。距離もまた遠かつた。

『ア、啼いてる／＼、確かに筒鳥だ、ソレ君、ボツ／＼、ボツ／＼、ボツ／＼／＼と續けてるのがあるだらう、あれがそれだ。難有いな、これで楽しんで来た幾つかを果したわけだ。この上は郭公と佛法僧だぞ』

嬉しくなつて私がいふと、

『あ、成程、聞えます、あれが筒鳥ですか』

この友人には初めのうちは彼の想像して来たほど閑寂な鳥として受取れなかつた様であつた。木魚か太鼓の遠音の聞き違ひではないかなどとも言つた。が、二度三度と馴れるに従つて次第に眞實の聲の味ひを聞きわけて来た。そして後には、『ア、啼いてる』と獨りして呟きながら立ち停つて耳を澄ます様になつた。

麓から續いた杉並木は登るにつれて途斷えがちになつた。そして路の兩側からさしかはした若葉の茂みの下をくゞつて歩くことが多くなつた。山毛櫨や椴や楓や、我等の知つてる名前の樹木はその中のほんの一部にすぎなかつたが、何にせよすべてが柔かで清らかで、美しかつた。ぢいつと仰いで見ると重暗い空の曇の中に寧ろ一枚々々のこの木の葉の方が明るい光をかき含んで輝いてゐる様にすら見ゆるのであつた。頂上に近づくに従ひそれらの中に落葉松が加はり、白樺、樺櫻なども混る様にな

つた。さうした明るい若葉の下草に山紫陽花の青むらさきの花がそよ風に吹かれてゐたり、名も知らぬ高山植物性の花などの咲いてゐるのも寂しかつた。

霧がいよ／＼烈しくなつた。さアつと吹き靡いた霧が身體のめぐりを取り圍むと汗ばんだ肌に急にうすら冷たさを覺えたりした。其處から富士がよく見ゆるといふお堂茶店の前の溪あたりも一面に深い霧の海であつた。今一軒其處からも富士の見ゆるといふお堂には六十近い比丘尼が一人ゐた。茶を汲んで出しながら、丁度其處の路はたの梅の木の下に隠れて見える筈だがこの天氣ではといふ話から、その梅の木とも花がろくに咲くでなく實としてはならず、伐つてのけたら坐りながらに富士も見えさつぱりもするもの、私が此處に來た年に植ゑたものでこれ十六年の間私と共に此處にゐたと思ふとなか／＼伐る氣にもならないなどといふ愚痴も出た。お詣りのある間はい、が、雪でも積む様になると淋しいでせうね、といふと、それは軒につく様な大雪にも幾度か出會つた、さうなればもう人さまの顔は見られず、たゞこの焚火ばかりが命だ、と圍爐裡の薪を動かして我等の茶をとりかへた。

程なく隨身門といふに着いた。門の前の廣場に、日天子月天子遙拜所といふ木札が建て、あつた。僅かに北に森を負うたのみで東西南が開けてゐる。成程い、遙拜所だと考へながら見渡す四方が濛々たる霧の海である。隨身門からとろ／＼と降つた盆地に七面山の本社があつた。七面天女を祀るといふ。お宮は久遠寺より寂びてゐて好ましかつた。が、残念にも七面天女のどうした神様だが佛様だか

を私は知らなかつた。お宮の中からは例により太鼓とお題目の聲とが聞えてゐた。

お庭先の茶店に寄つて晝飯を頼み、疲れ休めの酒を含んでゐると、店先を一人の僧侶が何やら木の小枝を持つて通りすぎた。

『いゝのがありましたね』

とそれを見て茶店の亭主が聲かけた。

『何です、あれは』

私は亭主に問うた。

『此處では平檜ひらびと云つてますが本統の名はあらざといふのださうです。これから奥の院に行く路下の森の中にあれの古木があり、このお山の神木になつてゐます』
といふ。

此儘この本社の御坊に泊らうか、それとも奥の院まで行つて頼まうかと迷つたが、どうもこの盆地では眺望はきかず、お坊も多少こんでゐる様だし、ともかく奥の院まで行つて見ようと其處を立つた。社殿の裏に薄濁りの小さな池があつた。昔はこれが七つ並んでゐたのださうだ。永仁二年、日朗尊者がこの山にわけ登りこの池を發見して池畔に小祠を建て七面天女を祀つたのがこのお山の始まりだといふ。

僅か八町にして奥の院に着いた。頂上ではなかつたが、頂上近い尾根の一角に位置し、霧さへ晴るれば少くとも三方の見晴らしのきく場所に在つた。喜んで先づお宮を一拜し、僧侶に請うて其處に草鞋を脱いだ。

通された御坊の二階は十五疊敷の二室を抜いて一室としてあつた。締め込んであつた雨戸を開くと、霧が颯々として來た。籠から本社まで五十町あるといふ。坂が峻しいためかその割合には私は疲れてゐた。それよりも先づ眠かつた。お茶など運んで來た老婆に頼んで布團を出して貰つた。

その布團が珍しいものであつた。一枚の長さ十二三尺幅約七尺といふ尠大なものである。敷布團も着布團もなくみな同様のものである。呆氣にとられて笑ひながら私はその一枚づつを四つに折つて敷きもし着もした。大悟法君も初め私にならつたが、彼は眠るが主でなく寒さしのぎに床に入つて何か書かうといふのであつた。それには四つに折つた敷布團では疊から高過ぎて書きにくい。乃ち彼は上下とも長いなりに二つ折にした。ふつと見ると彼はその十二三尺の一端に頭だけ出して何か書いてゐる。私はまた吹きだした。何の事はない、鰻か鯰のおばけが其處に一疋のたうつてるとしか見えないからである。大勢の講中などが泊つた時、恐らくこの一枚の布團には十人からの人が押し込まれるのであるのだらう。

直ぐ眠つたが、直ぐ覺めた。すさまじい豪雨の響が忽然として家を包んだからである。立つて障子

をあけると、ツイ二階の窓とさし向ひになつて立つてゐる樅の老樹もはつきりとは見えぬまでに四方たゞ眞白になつて降つてゐた。

二三十分もするとその雨は晴れた。そしてどうやら遠空の底にうすら青さすら見えて來た。下界の方は霧だか、雲だか、ねつとりと重く立ち罩めてゐる。

先刻茶店で聞いた御神木あらざぎの木を見にゆく事になつた。路から折れて入り込んだ森は意外にも深かつた。樅の古木が眼の及ぶ限りぎつしりと立ちこんで、大抵の樹の枯れかけた様な枝先には猿をがせが長々と垂れ下つてゐる。一寸見ればただ黄いろい様で、よく見れば淡い緑が含まれたこの猿をがせはいかにも清らかで美しい。また、その森の下草には見たこともない不思議な草が、草とも見えぬ草が、幾種類が生えてゐた。三四丁も下つたが、あらざぎの木はまだ見えぬ。そのうちに大悟法君は猿をがせの採集を始めた。登れさうもない樹へ登つて行つて、少しでも長いのを選んで採つてゐる。其處へ雨が來た。初めは霧雨の様なしめやかさで降つてゐたが、やがて粒が大きくなつた。近くの樹遠くの樹が一齊に荒々しい響を立て始めた。とりあへず附近で最も大きい樅の木の蔭に逃げ込んだが、聞くともなく聞いてゐる雨の響、森を包んでちいつと降り入つてゐる雨の響は、初め珍しく、やがて何やら恐しくなつて來た。はらりはらりと枝から雫の落ち始めたのをきつかけに我等は跳ねあがる様な勢ひでその森の中を走り始めた。奥の院行の路まで出ると大勢の參詣者が同じくぐしよ濡に

なつて走つてゐるのと一緒になつた。

うす暗く暮れてまで三人五人と奥の院まで參詣者がやつて來た。南無妙法蓮華經、々々々々々々と途徹もなく大きな聲を張りあげながらやつて來てばらくと賽錢を投げお札などを買ひ、また南無妙法蓮華經と歸つてゆく。この御坊に泊る者は一人もゐなかつた。本社の御坊には恐らく百人から百五十人の泊りがあつたであらう。

『よかつたねエ、……』

窓に腰かけて歌か何か考へてゐる友人に私は呼びかけた。

『向うもこの布團だらうが、この中にあの連中とごたく押し込まれたのぢやアたまらないからなア』

『だつて女はどうするでせう』

『多分一緒くたでせうよ、萬事そんな調子ぢやないか』

釣洋燈をば眞つくらになつてから持つて來た。

『お婆アさん、佛法僧は啼きますか』

『啼くでせうよ』

『郭公は』

『啼くでせうよ、私等はへえ何が何だかちつとも知りませんよ』

二人は顔見合せて苦笑した。

『然し、どうもこの様子では月が出さうだ、出るとすると今夜もまた寝ずの番かなア』

さう言ひながら最後の日和見に立ち上つたが、霧は矢つ張り窓を掩うて立ちこめてゐるのであつた。恐るゝお膳に徳利を一本つけて貰つたところ、思ひの外にその酒はうまかつた。そして、ツイ二本三本と重ねた、この分では此處の坊主も相當好きだと見えるわいと思ひながら。

意外の上酒に酔ひすごして豫定よりずつと遅れて眼がさめた。友人はもうちやアんと起きて窓に凭つて居る。

『晴れてる、……、啼きますか』

私も立つて行つた。

『啼きませんよ、降つてはるないんですけど』

月の光とも明方の光とも解らぬものが、四方の霧の中に宿つてゐた。

『この位なら啼きさうなものですかねエ、それともつと晴れねば駄目か知ら。』

昨年佛法僧鳥を聴きに鳳來寺山へ登つてゐて、初め七日は雨に降られて駄目、八日目の晩僅かに晴れて漸く聴く事を得た記憶を語りながら、私も窓に腰かけた。

とにかく深い霧であつた。おつとりと凝り澱んで、動くらしいけはひも見えない。その中から一つ

の不思議な音いろが聞えて來た。びい——、びい——、びい——といふ風に一つの單音を長アく引いて三つを重ね、やがて、ひよう——、といふ風にとめる。また、びい——の終りにかすかに「ン」の鼻音が附いてゐる様にも聞きなされた。斯う文字で表はせば寧ろ可笑しいものに聞えるが實際は何とも言へない寂しさを含んだ聲であつた。びい——と初めやや強く高く、次第に、い——とかすかに引いて一寸間をおき、また次の、びい——に移る。いかにも狭い深い所へ誘はれてゆく様な聲である。

『何です、あれは』

『さア、何でせう、あれならもうずつと前から啼いてるのですが』

氣をつけてゐると、この鳥もまた佛法僧や郭公と同じく、啼きながら絶えず場所を換へてゐるのである。びい——、びい——、びい——、ひよう——と一くさりの聲が聞えたと思ふと、今度はまた他の違つた場所から聞えて來る。二羽三羽居て啼きかはす調子でなく、確かに一羽のみが獨りで隨所に啼く聲である。それが何一つ見えわかぬ霧の中のあちこちをまひ移りつゝ、啼いてゐるので一層物寂しいものに聞えるのであつた。そのうち、あちこちに他の小鳥たちの啼聲が起つて來た。すると、びつたりとこの不思議な鳥の音はやまつてしまつた。無論、御坊の老婆も、老僧もこの鳥の名も何も知らなかつた。

霧は次第に晴れた。ゆつくりと奥の院を立ち、途中幾組かの連中を追ひ抜いて籠に下つた。そして

春木川を渡つて身延山にかゝり、二十町も登つたと思はるゝ頃に、一昨日汽車で一緒であつた例の神港年参講の連中と出會つた。彼等は身延に二泊したと見える。女の若いのはすべて長襦袢一枚のあらはな姿、老婆老爺は肌ぬぎ、中に歩きかねた連中は六七挺の山駕籠を連ねて中にはぐんなり眠りこけてゐるのもあり、元氣な婆さんたちは金剛杖を股間に引つ挟んでハイ／＼ドウ／＼と竹馬の眞似をしながらやつて來た。

追分茶屋といふから昨日來た時と路を違へて身延山の奥の院へ登つて行つた。路はずつと尾根つたひになつてゐた。尾根の片側、我等の右手に當る方は昨日登つて來た身延一帯の大きな峡谷で、おもに黒木の森林帯となつてゐる。其處には濛々たる霧が渦巻いてゐた。それこそ盛んな勢ひで、くるくるくる／＼巻き上り巻き下りしてゐるのである。そして折々その渦巻のはづれが我等の尾根へ靡いて來て前後を取り圍んだ。が、それと反對の片側はからりと晴れて、遠くの下に見えて居る富士川の川原には日光でも落ちてゐるさうな明るさだ。

頂上の奥の院に程近い頃であつた。あまりの霧の見ごとさに私は暫らく立ち停つて眼下からすぐ峻しく落ち込んで行つてゐる大きな峡谷を見下してゐた。渦巻き動く霧の海には樅や杉の黒木の梢が物々しく現はれては消え、消えてはまた現はれてゐた。昨日私の感心して寝ころんだ杉の林などもこの海の底のいづこかに在る筈なのである。そんな事を思つてゐた時であつた。端なく私は一つの鳥の烈

しい啼聲を聞きつけた。

『カツ、コウ、……カツ、コウ、……』

惶て、私は先に行く友人を呼びとめた。そして自分でもちいつと耳を傾けながら、無言に眞下の白濛々たる霧の海を指さした。

『カツ、コウ、……、カツ、コウ、……、カツコウ、カツコウ……』

まさしくその何處からか聞えて來る澄みに澄んだ郭公の聲である。

『ア、啼いてますね、何です、あれは』

友人も惶てた様に二三歩あと戻つて私の側へ寄つて來た。そして首を延ばす心持で遠くの霧の中に窺き入つた。

やれ／＼と私は思つた。佛法僧は何とも言へないが、せめて郭公だけは聞いて歸り度いと思つてゐたそれをいま果したのである。しかもこの見ごとな霧の中で聞いたのである。友人も喜んだ。

『この聲が僕には一番親しい』

77
とも言つた。郭公は、實は、晴れた日に聞くがいゝ。日光の煙つてゐる様な林か野原で聞くのが一番寂びて聞える。郭公らしい聲である。今日のは郭公にしては少し鋭どすぎた。鋭どいといふが悪ければ、少し調子が迫りすぎた。鳥にもよるであらうが、たしかにこの深い霧のためもあるだらうと私

は思つた。郭公だとは信じながらも、ともすれば佛法僧の聲音こゝねが思ひ出された。それだけに、聲はよく澄んでゐた。

奥の院で休んでゐる時、荒い雨が來た。それから五十町、久遠寺の庭におりつくまで、ばらばらと響く杉の雫を洋傘に聞きながら急いだのであつた。

『ソレ、彼處に咲いてる、あれだよ』

私は下から降りあぐる様な雨に傘を傾けながら友人にさし示した。途中で朴の木の葉を初めて見た彼はわざ／＼その幾枚かを摘み取つて持つてゐるので、どうかしてその大きな花をも見せてやりたいと思ひながらだつて來た尾根路の片側の溪間に漸く一本のその木の花を見附けたのであつた。吹き降りの烈しい雨の中に廣やかな葉を離しながら、一本だけ雜木を抜いてその木は聳えてゐた。そして純白な大きな花はその梢にはつきりと見えてゐたのだ。

老木ぞろひの其處の杉並木の梢には杜鵑が來て遊んでゐた。

『今度こそ見えるぞ』

さう言つて、ほつたんかけたかの啼聲の移つて行つた方角の杉の木の下に傘傾けてこつそりと近づいても一向にその姿は見えなかつた。荒い筋となつて流れてゐる霧が見えるばかりだ。

『ほつたんかけたか、ほつたんかけたか、たか、たか、けきよけきよ』

『なアんだ、もうあんな所に行つてやがる』

笑ひながら並木をはづれて立ちこんだ杉の森に入り、やがて久遠寺、身延町と過ぎて身延驛に辿り着くまでしやア／＼と雨は降り續けてゐた。

大悟法君はこの三日の山歩きに五足の草鞋を踏み破つた。

こんどの旅

今度の旅は三月十六日に長崎で中村三郎君の三周忌を行ひ、終つて郷里日向で父の十三周忌を營むといふのが重なる目的であつた。と共にその往復沿路の同志たちに逢ひ度いといふのも願ひであつた。逢ひ度いといふ願ひと共に直ぐまた氣づかはれたのは、酒攻めに逢ひはせぬかといふ事であつた。今年になつて妙なきつかげから飲む機會ばかりが続いて、正月から二月にかけて、身體は殆んど酒漬になつてゐた觀があり、今までには心づかなかつた心臓の方にまで多少の故障の出來てゐるのが感ぜられてゐたので、餘程これは注意せねばならぬと思はれたからであつた。

三月八日午前六時、沼津驛を立つた。長男旅人を伴うての旅立であつた。祖父の墓に參らせ、久し振の祖母に逢はせ、まだ見ぬ父の故郷を見せておき度いからの思ひたちであつた。そして彼に勧めさせて彼の祖母をこの沼津まで伴ひたい謀もその中に含まれてゐた。彼の祖母は四十歳にもなる彼の父を一向に信用せず、彼の父から幾度手をかへ品をかへて勧誘してやつても未だ曾てその一人息子なる彼の父の側に來て暮らすといふ事を肯んじなかつた。彼の父がいまなほ昔の如く朝夕の米鹽にも苦し

んでゐるが如くに思ひ込んでゐるらしかつた。そして八十に近い齡で、手馴れた産婆を業としながら日向の山奥の村に寂しい苦しい暮しを續けてゐるのであつた。

午後一時、熱田驛に降りた。まだずつと先まで行ける解であつたけれど旅馴れぬ子供に六七時間以上の汽車に耐へさせたくなく、且つ彼をして四方の風物を眺め樂しますために一夜行を廢したいと思ひきめて立つたのでまだ日の高いのに途中下車をしたのであつた。そして熱田神宮前の鷺野飛燕君を訪うた。多くの友人に逢ふ事を旨としたならば當然も一つ先の名古屋驛に降りるべきであつたが、何しろ『サケ』が恐かつた。そして特に素下戸の鷺野君方を狙つたのであつた。所が、同君はまた自身一滴も飲み得ない事を悲しみ特に小生の相手として附近で最強の飲手である中林晴太郎、前田源の兩君を招いて既に酒陣を張つて待ち受けてゐる所であつた。そして型の如く同家のを飲み乾した擧句、まだ何處かで起きてゐる家があるだらうと夜中に三人して出懸けて二三軒も飲み廻るといふ結果になつてしまつた。その間に旅人は飛燕君次男春次君に連れられて名古屋見物から活動見物をしてゐたのであつた。

午前九時熱田驛發の豫定の汽車に乗遅れ、轉じて名古屋驛からその次に乗る事になり、前記三君及び鷺野中林兩君の愛嬢たちに見送られて乗車した。前田君は一の宮まで見送らうとて一緒に乗り込んだが、車中にて妥協成立、到頭大阪まで行つてしまふ事になつた。

大阪驛で降りると既に顔を眞赤にしてゐる大島武雄、三池篤於、平田春一及び泉かをる女の四君の叫喚の中に取圍まれた。一汽車遅れた間を同君達は決して無にする事をせなかつたのである。そして微雨の中を二臺のタクシーで鞆南通の大島君方に運ばれた。大阪らしい古堀に臨んだ同君宅の二階には早や阿母さんや妹さんたちの心づくしの御馳走が所狭く並べられてあつた。其後の事を詳細に書くのはわれながら弊に耐へないが、兎に角午後の八九時から午前一二時に至る數時間は道頓堀附近のそこちちに於て費されたのであつた。大いに歌を書くべくして用意されたノートも名刺も、その夜誰やらに買つて貰つた高價な西洋煙草もその數時間の中の何處やらに置き忘れられてしまつた。

三月十日。午前九時發の豫定が十時半となり午後の一時と變更されてゐるうちにいつやら豫定外の神戸まで運ばるゝ事になり、まだ銀行會社に執務中の野元純彦、谷口孤梢の兩君を呼び出して神戸驛近くの三つ輪で大いに牛肉を喰ふ事になつた。昨夜酔壞した平田君を除く外、昨日のまゝの同勢である。矢張り一軒では足りず、更に一二軒を歴遊してもう電車の無くなるといふ頃、漸く大島前田の兩君、泉女史は汽車で大阪へ、あとの五人は自動車で西須磨の野元君方に赴き、其處でも更にまた結婚後間もない和歌子夫人の肝をつぶす事になつた。就床午前二時。

午前九時ながし神戸發の汽車に間に合はせる事は異常な苦勞であつたが、野元夫妻の努力で辛うじて成効した。更に驚いた事は我等があたふたと同君宅を出懸け様とするともう其處に大阪から大島

君が來てゐて呉れた事だつた。

僅々一兩日の間であつたが、サテ汽車が走り出して見ると、げに久し振に親子のみの旅になつたといふ氣持でお互ひの顔が見合はされた。天よく晴れ、風よく吹き、車窓から見ゆる瀬戸内海の眞帆や片帆や島々の眺めは悉くわが少年を喜ばせ、合せてその父の醉眼をも澄ませて呉れた。

正午十二時岡山驛を過ぎた。實は此處で下車すべき約束で、四五の友人も待ち受けてゐて呉れた筈なのである。唯だ、『サケ』が恐かつた。待ち受けてゐる四五人といふはそれこそ選りに選つたその道の剛の者であるのである。ひそかに頓首して岡山驛を通過した。

薄暮、宮島驛着、下車、直ちに嚴島に渡り龜福本店に投宿した。子供は直ぐにも神社に參拜したい風であつたが、何しろ父は勞れてゐた。出立前三四日殆んど徹夜して留守中手當の用務を執り、サテ出立して見れば上記の始末である。階子段をも手離しでは上下出來ぬ有様で、僅かに風呂に赴きしのみ。夕食の膳に子供にはサイダーをとりよせ、その側で麥酒一本銚子二本を嘗めて直ちに床に潜つた。

三月十二日。朝食前に參拜と見物とを濟ませた。この嚴島神社參拜は小生にとりては約十七八年目のことである。當時學生であつたが、海岸沿の宿屋に泊つてゐて夜半ふと眼を覺ますと杜鵑が頻りに啼いてゐる。兩戸をあけて見るとさやかな月夜だ。ひそかに階下に降り大戸をあけて戸外に出た。鳥の聲を尋ねてお宮の森の方まで行かうとする折柄の干潟に例の大鳥居がくつきりと立つてゐるのが

見えた。乃ち道から降りてその下まで辿りつき、やがて上げ汐の寄するまでも其處に佇んで啼き交はす一二羽の杜鵑の聲に聴きとれたのであつた。

食後、土地名物の杓子に署名して各地の知人数名に贈り、午前十一時何分か汽車で宮島驛を立つた。岩國驛には柳井津在の村上可卿君が出迎へてゐてくれた。柳井津まで同車、頻りにその村までの同行を勧められたけれど時日なきたため固辭して別れた。其頃から雨が降り出してゐた。小郡驛乗換、午後四時過山口着、大降りとなつた中に平賀春郊君が末の娘の春ちゃんを連れて出てゐてくれた。幌深い俤で同君の寓居に赴く。竹林に圍まれて静かな家であつた。但し不日松江高等學校教授として同地に轉任する由で家内は多少取込んでゐた。思ひながらも、夜はまた遅くまで食卓を圍んだ。

僅かの事で汽車に乘遅れ、止むなく自動車を飛ばして小郡驛に急いだ。どうしても十一時同驛發の汽車に間に合はせぬと多分戸畑から下の關まで出迎へてゐて呉れるであらう未知の諸君をまごつかす事になるからであつた。

案の如く下の關の長いプラットホームの片隅に雑誌『創作』を手にした四五人の若者たちが立つてゐた。握手目禮、直ちに連絡船に急ぎ、北風の吹き荒ぶその甲板の上で漸く言葉を交はした。創作社戸畑支社の三苫守西、久原喜衛門、佐藤白霧、坂根彌吉の四君に今一人は遙々肥後の八代から出て來た由解實君であつた。門司驛の雜沓裡に佇んで暫く汽車を待つ間、早や旅人は佐藤君に連れられて

其處等見物に出懸け、大きなバナ、の一莖を買つて貰ひ嬉々として引提げて來た。

やがて戸畑驛着、其處のフォームには更にまた十數人の若人達が待つてゐて呉れた。挨拶もあつた。ききブリツヂを渡らうとすると其處の物蔭に婦人ばかりの五六人が一かたまりになつて立つてゐた。三苫夫人京子、坂根夫人洋子、久原夫人涼子、伊岐須夫人雪子、神夫人露子の人々に唯一人銀杏返しの娘さんは毛利雨一樓君愛嬢豊子さんであつた。橋を渡つて改札口を出やうとする所でひつしと兩手を擱んだ矮軀肥大の中老人があつた。名乗らるゝ迄もなくそれは豊子さんの阿父さんである事が解つた。

相連つてその毛利君方に赴いた。商賣物の米を並べた板の間續きに六疊か八疊の部屋があり廿人からの人がその一室に押並んで坐らうとして終にはその板の間にまで居流れねばならぬ事になつた。全部の人が小生には初對面であつた。そして目下わが創作社に幾つか出來てゐる各地の支社のうち最も熱心に作歌に従ひ、その成績拔群なのがこの戸畑支社の即ち眼前に押並んでゐる人達である。お互ひの間の緊張が暫時は部屋を静まらせてしまつた。そしてお互ひの顔には汗の浸みさうな光輝があつた。

各夫人連の手によつて茶菓が配られてから漸く談話の緒が解けて來た。彼一言此一句、次第に高笑ひの聲も混る様になつた。見廻す所三十歳を越えたるは殆んど幾人もなく、多くは廿四五歳前後の血氣盛んな人達である。ことに此處で眼についたは女流歌人の多い事で、露子雪子さんは毛利夫人を助

けてお勝手に働き、涼子洋子京子さん達は主として茶菓係として座敷に在り、折々障子の腰ガラスを透いてはまだ肩揚げのある豊子さんが折々やつて来るお客様にそれ〴〵米を量つて渡してゐるのが見えた。

程なく夕飯の時が来た。我等父子と毛利君とはその大勢のゐる八疊の間と狭い土間を距てた四疊半の別室に退いて膳を圍む事になつた。暫く杯を重ねた末、不圖思ひついて杯を手にとりながら毛利君を顧みて『これは、あちらにも出てますか』と訊いた。『い、え、あちらは若い者ばかりですから酒は出しません、先生にも餘り澤山は差上げない積りです』と笑ひながら彼は答へた。これは旅立つ前豫じめ小生からどうか酒攻めにせずに呉れ、とわざ〴〵頼んでおいた、めの返事であつたのだ。サテさうなると寂しくなつた。こちらは飲んでてあちらが飲まぬといふのは何としても寂しい事であつた。暫く考へた末『どうか三升だけ私に買はして下さい』と哀願した。毛利君も笑ひながら快諾して呉れた。三升の冷酒は忽ち二十あまりの茶飲茶碗に酌ぎ渡され、其處には湧く様な歡呼が起つた。そして瞬く間にその液體は盡き果てた。いつより速く酔の廻つてゐた小生は早速豊子さんを小蔭に呼んで『もう三升！』再度の哀願を極めて勢よく提出した。

三月十四日。朝、割合に早く眼が覺めて見ると枕許の古びたガラス戸を通してちら〴〵と雪の降つてゐるのが見えた。更に思ひがけなかつたのは、我等のやすんだ四疊半の部屋を出て、土間向うの部

屋を見ると、寝たりや寝たり、宛ら焼芋屋の大釜の蓋を取つた形に、身體と身體とを結び合せた如くにして大勢の人が横たはつてゐるのである。昨夜、ほど〴〵にして我等父子はこちらの部屋に引上げて床についたのであつたが、その後も向うの賑はひはなほ止みさうになかつた。然し、いづれはそれ〴〵に歸り去つたものと思つたに、なんのこゝと、これでは全部が全部泊つてゐるかに見えた。『婦人連にほか二三人が歸つたゞけでせう、十五六人も寝てますか』主人公は笑つて答へた。

程なくその婦人連を先に、家に歸つたといふ三四人の人たちもまた集つて来た。そして婦人たちは早速晝のお辨當拵へにかゝつた。今日は一同名護屋岬に近い中原の濱といふに行き、其處で歌の會を催さうといふのである。辨當の出来るを待ちながら、また雪の止むのを待ちながら、ひし〴〵と押並んだ我等の間にはいつか知ら盛んな歌の話が持出されてゐた。聞けば昨夜も小生等の休んだ後、なほ二三時間も、最もひどいのは今曉六時の打つまでも、烈しい歌論が戦はされてゐたのださうだ。

風が出て、日が薄らかにさし始めた。まだちらほらと白いものの落ちてゐるなかを打揃うて電車停留場へ向つた。氣を利かせたつもりで夏外套を着込んで来た小生の姿は此處で思ひもかけぬ滑稽なものとなつたのである。

濱の松林から廣く玄海を見渡す景色はなかなか大きな眺めであつた。が、如何にも風が強かつた。ために一時眞白な砂の上で開かうと云はれてゐた歌會をば、松林の中にある茶店の二階を借りて催す

ことになった。雪全く止み、日うららかに射して四方たゞ松風と浪の響とに圍まれたよき會場であつた。乃ち眼前小景即題二首といふ定めでめい／＼考へ込むことになつたのだが、此處でもまた歌を作るよりもそれに就いての感想を語り合ふのが先になつた。此處の支社では作歌と共にその考察論議の上にもまた甚だ熱心であるのを見た。初め三室ほどの襖を抜いた部屋の形なりに長方形に並んだのがいつか圓陣を作りなす程にめい／＼が膝を乗り出して來ての談話振りである。やがて辨當が開かれ、酒も濫ためられたが、僅かに小生が杯を取つた位で他の人は殆んど無關心であつた。

夕方までさうしてゐて、其處からぶら／＼と高原めいた野中の夕日の路を歩いて戸畑町字幸町二丁目三苦守西君の宅に赴いた。招かれて一同夕飯を御馳走になる事になつたのである。見るともう三十近い膳部が並べてあつた。京子さんを初め涼子さん洋子さん若い夫人たちが顔を眞赤にしての接待振である。盃を啣まずして先づ酔ふの感があつた。

果して賑やかな華やかな宴會となりゆいた。杯の織りなす間に語る者笑ふ者唄ふ者、はては感極つて慟哭する人なども出て來た。席漸く亂れむとする頃、羽織袴の老紳士が入つて來られた。守西君の舅御さんで京子さんがわざ／＼その實家から招いて小生に引合はして下されたのであつた。若者たちの斯うした醉態を苦々しく思はれはせぬかと小生には氣遣はれたが一向にその風なく、最後まで快げに付き合つて下された。いつ果つべしとも見えぬ一座の感興を見残して小生は子供と共に別室に退い

て眠る事にした。幾度か引起され様としたが、深い疲勞からか隣室の騒ぎを外に熟睡してしまつた。

夜中に厠に行かうとして、また呟驚した。障子をあくれば隣室は全然足の踏處もない人の寢姿なのである。オヤ／＼今夜もまたこれかと呆れながら種々な頭や足の間を四つ這に這ひ渡らうとしてフト異様な頭を見出した。イガ栗か分けたのかの別はあつても若者の頭ばかりの散らばつてゐる中にこれはまた珍しい禿頭が一つ混つてゐた。オヤ／＼お父さまもたうとう若者の意氣に呑まれてこの中にやすまれたかと可笑しいとも可懐しいともつかぬ氣持で暫くそれを眺めて辛くも廊下まで這ひ出すと、その片隅には京子さんが幼い人を抱いて横になつてゐた。眠れもしなかつたと見えて、直ぐ半身を起しながら挨拶した。『大變ですなエ』と我知らず言葉かけると彼女は低聲に笑ひながら『可笑しな事があるのですよ、皆がもう眠られてから暫くして妙な唄聲が聞えますの、誰だらうと障子の破れから窺いて見ますとそれが父ですのよ、一人だけ起きて坐りながら煙管で調子をとつて何か小唄らしいものを唄つてゐるのです、私この齡になつて初めて父の唄ふのを聞きましたわ』といふ。さう言ひながら彼女は顔をそむけたが恐らくそれは笑聲を殺すといふよりも、もつと他の表情を隠すためであつたらうと思はれた。彼女の父と彼女の夫との間には普通の婿舅の様な情誼が無かつたらしく、それを嘆いた歌を彼女はこれまで幾首となく詠んで來てゐた。單に父が夫を解さない、文學をやる我等夫婦を解して呉れない、といふより更に深げな双方の家庭に關しての種々な嘆きの詠まれた歌を小生も久し

い間彼女の作に見て來てゐるのである。さればこそ今夜わざわざ彼女は遠方から父を呼び迎へて我等のこの席に列ならしめたのではなかつたか、などと考へると小生もすっかり眼が冴えて久しい間睡りつくことが出来なかつた。

臺所を受持つた夫人たちは殆んど一睡もしなかつた位であらう、まだ明け切らぬうちに立出する我等の膳に種々温かい物を揃へて下された。そして殆んど最初に逢つたまゝ、に少しも顔れぬ同勢の人達に見送られて戸畑驛を出立した。八幡驛まで同車した人数人、特に毛利君と露子さんの夫君神君とは遠く二日市驛まで見送らうとて乗車、その他遠方から參集して共に二日を過し今日一緒にそれらの驛まで歸る人たちに柴田六郎、藤江省三、由解實君等があり、車内大いに賑はつた。幸に好晴で海も山も野もすべて廣々と見渡す事が出来た。ことにこの邊種々と名所古蹟の多い土地柄とて、子供は毛利さん其他の小父さんたちからそれら説明を聴くのに大忙しであつた。

久し振りの福岡驛をも黙つて通り過ぎた。降りたかつたのだが、もう時間がなかつた。二日市驛で見送の兩君に別れた。其處からは太宰府が近いとやらで切に降車を勧められたが、拜辭して別れた。そして鳥栖驛では最後に一人残つてゐた由解君とも別れた。別る、といふのは幾度經驗しても實にイヤなものである。

また久し振に（確かにさうした氣持がしたのだ）父子だけになつた。子供には豊富に飲食物を買ひ

與へておいて親爺はぐつくりと寝込んでしまつた。車中では眠る事の出来ぬ癖の小生も流石に疲れたものと見える。『海が見える、海が見える』とて起されたのはそれから程経てであつた。成程、綺麗な海が見えてゐる。面白い形の島も見える。地圖によるまでもなく其處は小生にとつても初めての大村灣であらねばならぬ。いゝ氣持に眼が覺めて共々窓にしがみついて久しい間晴やかな海の景色に眺め入つた。戸畑邊と違ひ、急に暖氣をも覺えた。蜜柑畑などのあるのを見てもこの邊一帶北九州の方では暖い土地と察せられた。

午後五時十一分、終に長崎驛に着いた。遠くも來にけるものかなの感が自づと身に湧いて、胸をときめかせながら降り立つと、其處に未知舊知一團の人達が立つてゐた。舊知は二人、一人は大橋松平君であり一人は越前翠村君である。越前君は小生に先立つ僅か數時間餘り前に此處に着いたのださうだ。彼は久しく岡山市に在つて繪をかいてゐるが、今度共に故人の展墓のため、また自分の畫會を開かむためにやつて來たのであつた。大橋君とは二三年越に逢ふのであらう、上京の途次一度沼津の寓居を訪うて呉れた事があつた。未知の人とは高島儀太郎、上野初太郎、澁谷秋雄、其他の諸君で、名のみはもう七八年の永きに互つて知つてゐた人たちである。彼一語此一語、我等の一組だけずつと遅れて改札口を出、直ぐ市内要町なる高島君の宅に赴いた。

二階の廣間にはやがて舉上の人たちのほかに菊枝興藏、高田二郎、澤本直明其他の社友諸君が顔を

揃へた。現在長崎創作支社には十二人の社友が居るのであるが、それは漸く近年になつての事で、初めは大橋、高島、上野、澁谷の四君及び故人の中村三郎君等僅々四五人の同志でそれこそ七八年の永い間終始變らぬ固い團結を作つて創作社の歌風を維持して來たのであつた。元來この長崎といふ土地はもとから歌の盛んな所で、従つて種々の流派の人達がそれ〴〵に割據してめい〴〵覇を唱へてゐたのださうである。その間に在つて我が創作社の連中はどちらかと云へばその性格からか獨り孤壘を守るといつた形で、南風甚だ競はぬものがあつたらしい。さうした感慨の漏らされた手紙をばよく此等の人たちから受取つてゐたのであつた。今、初めてその長崎の地にやつて來て、此等新舊の同志たちの前に坐つて見ると、いつか知ら小生までが一種の感慨に打たれねばならぬのを覺ゆるのであつた。來た者、迎へた者、その間言ふに言はれぬ氣持が交錯するのであつた。口吃して俄かに言ひ難い觀すらもあるのであつた。

食通といふか凝り屋といふか、好みを同じうするらしい高島、大橋、上野君たちが數日に互つて用意しておいて呉れたとり〴〵の御馳走がやがて大きな卓子二脚を並べた上に持出された。見るからに唾の走る色どりであり香味である。多く支那風の料理で（卓子其他の器物まで）あつたが何しろうまかつた。酒またまづからう筈なし、一々口に持つてゆくのが面倒なといふ心持であつた。就床午前二時、我等別室、隣室にはまた五六の床が並べられた。

三月十六日。故人の追悼會の催さるゝ日である。支社々友一同、高島君宅に揃うて、それから墓參に赴かうといふ事になつてゐた。三人五人と集つてゐるうちに思ひがけぬ參加者が來り加つた。筑後大川町なる大川支社の宮部貴一、酒見幹風の二君が夜行汽車でやつて來たのだ。

墓は市街と港とを下瞰する急勾配の山の中腹に在つた。僅かにそれと知らずる目標が置いてあるだけで、まだ墓らしい墓は建て、なかつた。聞けば故人の老母と兄とが佐賀とかに移り住んでゐるが、故人在世中と同じく貧窮で、そのためか知らしてやつても今日の會合に出て來ぬとの事であつた。然し、その寂しい墓のあたりが掃き清められ、新しい花などの挿されてある所を見れば、或は昨日あたり誰か來てこつそりこれだけの事をして行つたのだらうとの事であつた。墓のうしろにかなりの楓の木があり、うす紅の芽を吹きかけてゐた。なほ、見ごとな樟の老樹がこの坂なりの墓場の其處此處に鬱然と立ち茂つてゐる。この樟は三郎君自慢の一つで、よく歌にも詠んでゐた。櫻や菜の花や、故人の好きだつたとり〴〵の花が多勢の手によつて供へられた。そして薫の高い香が墓のめぐりに豊かに焚かれた。そして、一人々々が在りともわかぬ彼の墓の前にぬかづいた。僅かにさし置いたその石標によく〴〵みれば、うつすらと青苔が萌えそめてゐるのである。私は、出立以來初めて鉛筆をとり出して一首の歌をノートに書きつけた。

三郎よ汝がふるさとに來てみれば汝が墓には

午後一時から、其處より程近い光源寺で追悼會並びに追悼歌會が催された。斯うした公開の會合をやつた經驗のないといふ發企人たちによつて準備せられたにも係らず、五十人からの來會者が集つて來た。やがて故人の自畫像を掲げて、しめやかに追悼會が始められた。故人が生前いろくくと世話になつたといふこの寺の老任職の讀經を靜かに聽いてゐると、小生の臉にはいつ知らず涙が浸んで來た。讀經の聲の中に故人の心を、面影を、次第々々に感じ出して來たのである。ことにまたこれほどの人が寄つてその靈魂を弔ひ慰めてゐるに係らず、その血族の唯一人すらが居合はせないのだと思つた時、在りし世の故人の寂しい生活が、いまだにまだ續いてゐる様に思はれて、一層胸は苦しくなつた。

法要が終ると直ぐその同じ寺で歌會が開かれた。よそで行ふそれらとは異つた方法で、先づ來會者からそれ／＼持ち寄りの歌を集めそれを一首づゝ、文字太に黑板に書いて一同して合評するのである。小生など、次ぎ／＼に昂奮しがちな出來事に會つて來てゐたので初めは唯それらの批評論戰を眺めてゐたが、いつか知ら誘はれて口を入れる様になつた。何しろ前にも言つた通りこの地には各流派が入り亂れてをり、ことに今日はそれ／＼その派の重立つた人たちも來合はせてゐるとやらで、追悼歌會の名に似げない烈しい歌會となりゆいた。とにかくこの長崎でも今日の様に盛んな歌會は少なかつたと世話人たちの大喜びの裡にめでたく閉會した。黑板の文字の見えにくく、なつた頃であつた。

次いで市内出島東亞館といふ支那料理店で小生並びに越前君の歡迎會が開かる、ことになつた。社友全部の主催でそれに光源寺の和尚様二人、今日の歌會の重立つた人達が参加せられ、かれこれ三十人ちかい人數であつた。一品二品の料理ならば横濱あたりの支那人の店などで喰べた事はあるが、正式の宴會に出たのは今日が初めての事で珍しくもあり恐しくもあつた。ことに上野君といひ高島君といひ何れも支那貿易に従事してゐる人たちのことであちらの人と接觸する事繁く、従つてその道の通人と云つたわけで、今日の御馳走は特に念入りのものが誂へられてあつたのださうだ。

『勝手が解らなくて困るナ』

といふと上野君が

『では私がお側に居りませう』

といふことになつた。何しろ西瓜の核すら満足に喰べ得ない身にとつては、これが海燕の巢、これが海鼠の干物、これが鱈の鱈、これは家鴨の丸煮で斯うして食ふもの、これは豚の子の丸焼(?)、これは何とか魚(何とまた大きなさかなであつたか)の丸煮か丸焼、といふ風に何でも十幾種類かの、而かも彪大な品物が、次々に眼の前に出て來るので噛み味はふは後のこと先づ以て肝心の肝をつぶしてしまつた。

従つて今日は固體を主とし液體を客とするといふげに小生にとつては珍しき宴會になつて來た。と

云つて液體が粗略されたではない、これもまた次から次と運ばれて、いつか満座とも酔つてしまった。一同して其處を出たはもう十二時にも近かつたか、空にはさやかな月が懸つてゐた。誰からとなく海岸通りの方へ歩いて、其處で歸る人は歸り去つた。何しろ腹が荷物であつた。顎を引き胸を張り臍のあたりをずんと前に突き出して歩いてゐるのだが、それでも苦しい。此儘歸つて寝込まうなら當然夢魔のためにとり殺さるゝにきまつて居る。思ひは同じの同勢十人ばかり、ぶらりぶらりと歩いていつか大浦海岸の浪打際に出、更に引返して丸山あたりの明るい街を歩き廻つた。歸つて床に就いたは二時か三時か。ずつと随伴してゐたわが旅人君にはちと少々、或は大いに氣の毒であつた。

十七日。見物日にあてられた日である。四五人の人に案内せられ先づ土地名物の南京寺（赤寺とも呼ぶさうな）を見て廻る。昨日ちよい／＼と眼に觸れたそれらの姿がいかにも面白かつたからである。崇福寺、興福寺、福濟寺等を見た。いづれも特別保護建築物ださうで、昔支那から渡來してゐた人たちがこれらを立て、冥福を祈ると共に海上往來の無事を願つたものらしい。

轉じて大浦の端れに天主教々會堂を見た。物寂びた堂の中に入るとほのかに空の光の射した四壁には幾枚かの宗教繪が掲げられ、中央には椅子が冷たく並んでゐた。繪のうち、例の踏繪の折の虐殺の大幅の前に立つた時には流石に身内の引き緊るのを覺えた。

其處から今度はまた電車に乗つて遠く浦上村の天主教々會堂を訪うた。この驚くべき大建築、工費

恐らくは百萬圓を超えたであらう大會堂がほんのこの小さな村の村民たちだけの手によつて作り上げられたと聞いてはその信仰心の力に今更ながらに驚かざるを得なかつた。乞うて中に入れば今しも信者たちの祈禱が行はれてゐた。水を打つた様な廣大な堂内には其處に此處に寂然としてひた伏して居る信者の姿が見えるのみで、咳一つ聞えない。ことにその服裝が普通の百姓着のまゝの人の多いのに眼が惹かれた。たゞ、婦人たちの一團は頭から深々と清淨な白布のかぶり物をかぶつてゐた。

歸途、聞くところによればこの浦上村は殆んど村民全部天主教の嚴しい信者であるに係らず、附近で一番私生兒が多く、嬰兒壓殺、窃盜等の犯罪また少くないといふ。

更に諏訪公園に登つた。此處の話も故人によつて随分よく語られたものであつたが、いま實際其處に登つてその話の節々を思ひ出して來ると懷舊の情がまた新たである。

『故人の記念碑でも建つるなら此處にするのだね』

『え、さう私達も考へてます』

其處を降りると薄暮、二三の人は別れて歸り、中の一人に頼んで旅人をその希望の活動寫眞見物に案内して貰つた。そして残つたゞけで故人の一時住んでゐた家、臨終の家、等を見て廻つた。臨終の家といふ二階建の長屋の端の二階にはいまだどんな人が住んでゐるか安物のメリヤスシャツが乾されてあつた。ついでにといふではないが大橋君がまだ床屋の親方であつた頃の舊居の前にも連れて行つて

貰つた。見るからに小さな理髪屋にはその後の何代目氏か、蒼い顔の小男が自ら鬚を抜いてゐた。この溝に沿うた小理髪店こそ故人在世當時には實に花々しい詩歌論議の壇場であつたのだ。大橋君にしてもその頃は家族との間の悶着から幾度か危ふい決心を執らうとしてゐたのである。

『これも好個の記念物だね』

と顧みると、現在長崎縣廳のお役人でありよき夫であり父親である松平朝臣さらでだに狭からぬ顔面を一度に解きほぐして、

『まったくさうですよ、ハハア』

と笑つた。

よくも歩けたものだと思ふ脚を引きずつてカルルス温泉とかいふ旗亭に這ひ上つた時は越前、大橋、高島、小生の四人となつてゐた。電話で呼んだ上野、澁谷の二君我等の入浴中に來り加はり、圓座を作つて骨抜き杯を擧ぐる事になつた。

十八日。別れの日である。驛まで大勢の見送を受け、更に四五の人は大村驛まで行かうといふ。大村驛着、車窓で手を握つて別る。事と思ひのほか一寸降りよといふ。驛前などにて一杯の事ならむと従へばこれはまた遠くも町を横切つて大村藩舊城趾の上なるお茶屋まで誘はれた。物々しき石垣も昔のまゝに、あたりを老樹立ち覆ひ、いかにも古めかしく城あとらしい城あとであつた。ことにいゝの

はその小さな茶店の部屋から立ち並んだ木の間を通して遙かに灣曲した入江の干潟の眺めらるゝ事であつた。

二汽車ほど遅れて、今度こそはいよく固い握手を交し、大村驛から西と東に別れた。汽車も丁度其處で擦れ違ひとなつてゐた。あとはまた久し振の父と子とだけとなり、型の如く父親は眠りこけてしまつた。

元來午後四時それがしに着く様に豫報しておいた大牟田驛に恐々ながら降り立つたのは八時半であつた。それでも従兄はそれほど怒つた様もなく其處に出て待つてゐて呉れた。十二年目の對面である。見れば禿げかけてゐた頭髪はいよく禿げて、額の皺も深く、氣のせるか腰まで少し曲つてゐる様に眺められた。十歳近い違ひであつたからもうこの人も世にいふ五十の坂に手のかゝつた年配となつてゐたのだ。

家では義姉が膳部を整へて待つてゐた。そして此處では小生より旅人の方が遙かに歓迎せられた。可笑しかつたは初對面の伯母の心づくしの手料理のどの皿にも彼は一向に手をつけ様とせず、いろいろに説き勧められたはてに突然、

『梅干は無い？』

と驚かしておいて、梅干でお茶漬を掻き込んだ事である。大人並の待遇を受け通して各地の馳走を

荒し歩くこと此處に十幾日、終に流石の大織冠鎌足公も故郷戀しき梅干の所望に及んだのであつた。彼の眠つた後我等はなほ久しく語り更かした。従兄にも男の兄弟なく小生もまた同様であつた所から従兄弟とはいへ殆んど實の兄弟同様の氣持で大きくなつて來たのであつたのだ。

十九日。今日は社をば休むからといふ振れ出しで従兄は朝からゆつくりと構へて酒をつけた。彼の父も、また小生の父も、等しく酒に溺れた組であつた。我等またお互ひにその點だけでは不肖兒の名から超越する光榮を有する次第である。縁側寄りの座敷の隅に食卓を持ち出して相對して見るとどうしても亡き父亡き叔父の事を思ひ浮べざるを得なくなつて來る。父と叔父とが相逢へば常に必ずこれであつた。そしてどうかすると二日三日とそれが續いた。村の人たちは『若山の兄弟を逢はすれば病人はあがつたりだ』と言つてそれを恐れた。兩人とも醫者で、相隣つた村に開業してゐたのであつた。従兄は土地で出てゐる新聞の記者をしてゐるのであるが商賣柄に似ぬ黙り屋で、酒を飲むにしても幾らか俯向き加減の姿勢で、唯だこつ／＼と盃を口に運ぶのである。この點は彼寧ろ小生の父に似、酔つてともすれば口軽くなるところ小生却つて彼の父に似てゐるのを思つた。

其處へそゝくさとして小生を訪ねて來た人がある。八女郡上妻村の高山三千樹君であつた。昨春秋沼津以來の再會である。手を執つて健康を祝し、先づ／＼と共にその食卓に並んだ。坐るや否や彼は直ちに『先生、これから直ぐ私の宅に行きませう』と言ひ出した。初め先づ彼を訪うて大牟田に來る

筈であつたのだが、何分にも身體が勞れたので其處を素通りして彼にこちらへ來て貰ふことにしたのであつた。が、彼なかく／＼にその素通りを承知しない。まア／＼と従兄と二人して盃を強ひながらいつか晝になつた。『サ、行きませう、父ども、待つて居りますから』と彼は立ち上つた。さうなると小生も心が動くのだが、これから行つて初對面のその家族たちと交離すべく矢張り小生は勞れすぎてるた。兎角の押問答の後、一つの妥協案が成立した。これから彼の居村近くの船小屋温泉といふに行き今夜一泊、ゆつくり話して明日其處でお別れするといふ事に。『では兄さん、あなたも行きませう』と小生は従兄を誘つた。

『そろ／＼選舉だからなア、さうもして居られん』

『では姉さん、あなた行きませう、い、機會ですよ、是非行きませう』

三千樹君も言葉を添へて勧めたが、結局従兄が行く事になつて、旅人と四人、蹠蹠として停車場に向つた。

船小屋温泉は、湯は沸し湯であつたが、我等の寄つた樋口屋といふの、二階からツイ下に矢部川の流を見、川向うに鬱蒼として打ち續いた樟の並木を眺めた心持は悪くなかつた。樟の數何百本とか見積價格何百萬圓とかいふ見ごと並木である。三千樹君も此處に來てすつかり落ち着いたらしく、久しぶりに彼天性の快活さを見る事が出た。従兄にとつて詩歌の話など、更に二三十年來の久闊さであ

つたらうが、それでも喜んで談話の中に入った。彼初めは家業を繼ぐべく醫學生として出立したのであつたが不圖踏み入れた文學のぬかるみから足を抜く事が出来なくなり、さればと云つて彼の父の頑固から醫學の方の足を洗ふ事もならず、とつおいつの裡にどつちつかずの田舎記者などに落ちついてしまつたのであつた。而して、小生は實に初めて彼によつてこの詩歌の甘露味を教へられたのであつた。それやこれや、いつもに似ずこの黙り屋さんまでが饒舌の仲間入をする事になつたのである。五十歳と四十歳の従兄弟の詩歌論を廿四歳の高山君がどんな氣持で聽いてゐたか、惜しい哉その感想を聞き落した。

三月二十日。朝の一杯が幾らか永引かうとしてゐる時であつた。思ひもかけない宮部貴一君がひよつこりと立ち現はれた。これも高山君にしたと同じく、宮部君たちの大川町に長崎から直ぐ立寄る筈であつたのを素通りして來てゐた。それを承知せず、宮部君が大川支社を代表して追跡して來たのである。またうまく斯うした意外な場所で捉まつたものだと思つた。

一議なく彼に従はねばならなくなつた。と云つて自分一人は心細かつた。結局、高山君も従兄も一議ない仲間になつて、一緒に大川町に向つた。

羽犬塚驛まで自動車、其處で一度電車に乗つてまた自動車に換へ、お晝過ぎに大川町に入った。風浪宮といふ附近で有名な神社の前で自動車を降りて參詣し、社前の宿屋に上つて休んでゐるところへ、

宮部君かとの報知で支社の石橋満、佐藤増太郎の兩君がやつて來た。そして、ひどく疲れたといふ従兄と旅人とをその宿屋に残しておいて、我等は先づ附近の見物、といふうちにも筑後川の川口を見ようといふので立ち出でた。途中で石橋君の宅を訪うた。米屋さんであつた。折も折、明後日は同君のお嫁さんを迎ふる日に當つてゐるのださうだ。轉じて佐藤君方に寄つた。同君方はこの地方一般に土地名物となつてゐる家具類の指物屋さんで、同君自身の爲事場をも見せて貰つた。同君は在郷軍人で土地青年會の副會長、石橋君は同會計主任であるのださうだ。町つづきの若津町に入ると、家と家との間などに思ひがけぬ帆柱が立つてゐたりして、いかにも港町らしく見えて來た。事實少し以前までは若津港として賑つたものであつたのださうだ。今は筑後川の川口が淺くなつて、殆んど昔日の俤はないといふ。廣々としたその川口は丁度引汐の干潟になつてゐた。いかにも見渡す限り一面の泥の洲で、川は僅かにその中の一部に同じく黄泥の色をして流るゝとなく流れてゐるのであつた。近くに居る帆前船も、遠くに見える汽船も、全て船腹をあらはに泥の上に露出して、傾きながら立つてゐた。珍しいせるか、このとりとめのない廣々とした干潟の景色が私には親しかつた。

引返して、同じく支社々友の一人で宮部君の従兄弟に當る志岐春岐路君の宅に寄つた。同君の父君は俳句に熱心で、座敷も廣いといふ處から、支社の歌會は常にこの志岐君方で開かれてゐるのださうだ。夕方になると支社の全部が揃うた。酒見幹夫、古賀林一、北島徳一の諸君に前記の志岐、佐藤、

石橋、宮部君等である。宿屋に残つてゐた二人も迎へられてやつて來た。それに志岐君の父君晴雲氏も加はり、志岐君の宅と向ひ合せになつてゐる料理屋魚林で歌談會を兼ねた懇親會が開かれた。閉會午前二時。全部志岐君方に引上げて枕を並べた。

二十一日。朝、雨が降つてゐた。暫く話してやがて、袂を分つ。宮部君と志岐君とは羽犬塚驛まで送つて來て呉れた。實は其處で、皆と別れて、我等三人だけ大牟田に歸るべきであつたのだが、どうせ斯うなればあとの一日位はどうでもよいではないかと高山君に叱られながら、終に同君宅まで出向く事になつてしまつた。斯うなることなら最初の船小屋温泉が甚だ意味朦朧となるわけである。宮部君たちをも誘うたが、勤めの都合で駄目とのことで、兩君は其處から久留米に向うた。

驛前から動搖烈しい電車に乗つた。福島町で下車、其處の停留場前で暫く休んだ間の麥酒の肴に出された香の物のたかな漬（大芥漬か）は小生にとつて實に十何年振の珍味で、思はず聲に出して賞美した。からし菜に似た風味を持ち、香氣もからみもそれに優つてゐる。自分の郷里にはこれが多かつたが、關東では一度も出會はなかつた。流石に此處は九州だなアと言つて笑つた。

やがて上妻村に入つた。同村は矢部川に沿ひ、殆んど一村が紙漉を業としてゐる様な村ださうだ。高山君の家もまたさうであつた。で、いよゝゝ此處に來るときまつた時も、君と細君とが兩人で紙を漉いて見せて呉れたら行く、といふと必ず漉くからとの約束のもとにやつて來たのであつた。門を入

ると、母屋つづきの小屋から、ちやばく、ちやばくといふ自分等も子供の時に聞いた事のあるその紙漉の音が聞えて事だ。そしてそれは戲談に言つて來た同君の年若い細君の手によつて起されてゐた音であつた。

古めかしい奥座敷に通されて坐つて見ると矢張り來てよかつたといふ故のない安心が胸に湧いた。うす暗い座敷も、光つてゐる佛壇も、縁側から庭、庭から畑、畑の向うに茂つてゐる大きな竹藪も、すべて夙うから見馴れてゐるこの年若い友人の歌に對すると同じい可憐しさを持つて眼に映つて來た。一時晴れてゐた雨が夕方かけてまた細々と降つて來た。洋傘を持つて庭先から竹藪の方へ歩いて行くと其處はすぐ矢部川の土堤になつてゐた。そしてその途中、畑中の一軒家からは例のちやばくの音に混つて、若い男の暢びやかな唄聲が聞えてゐた。

夜は丁度その小字のお大師講とかが同君方に催さるゝ混雑中に、高山家の人たち、三千樹君の實家三宅家の人たちに勧められて遅くまで馳走になつた。風邪で床に就いてゐたといふ三宅家の十七八になる妹さんをまで呼び寄せ、丁度その時座にその妹さんと細君との二人しかゐなかつたのを見るや多少酔つて來た三千樹君は昂奮した瞳をあげて二人を見詰めながら、現在の私の心からの友人といふと本統にこの二人きりなのです、二人だけが私をよく識つてゐて呉れます、とさも難有さうに言つたりした。長崎の大橋君もさうであつたが、この高山君も養子の身の上で、何彼と家庭のごたごたが断え

ぬらしいのをば随分前からその歌を通しても知つてゐたのであつた。

二十二日。幸にたいして降らず、九時ころこの静かな村を出た。羽犬塚まで送らうとて高山君も一緒であつた。羽犬塚に着くと私は一軒の料理屋に上り、藝者をも二三人呼んで賑かに別宴を張つた。昨年の秋逢つた時よりどうもこの年若い友人に元気が無く、何となく氣になつてゐたからであつた。肝心の主賓より陪賓の従兄の方が先に酔つてしまつた。そして、よし、今度は大牟田でわしが御馳走する、高山君、行きまつしう、と捉へて放たず、またく四人して大牟田まで来てしまつた。驛からすぐ自動車で公會堂の中に在る何とかいふ料理屋に入り、また改めて賑やかな盃を舉げた。飲みながら不圖私は考へついて同じ市中の中村酒店といふに電話をかけて見た。案の如く中村政雄君は歸つて來てゐた。昨日歸つたのださうだ。東京の學校が休みになり次第歸るとの話を大阪の三池君から聞いてゐたのを思ひ出して、同君方に問合せ見たのであつた。間もなく同君もその席へ表はれた。

二十三日。今日は一日ゆつくり休まうと考へてゐたところへ、中村君方から迎ひが來、連れられて赴く。老母、令兄夫妻、ツイ最近迎へた同君の新夫人たちにお目にか、つてゐるうちに、お酒が出た。同家は大きな酒店でこれならば幾らでもあるからといふ條件付きなのだ。が、流石にもう幾らもよう飲まず、たわいもなく酔つた所へ、三池町から遠藤典太君ほか二三人の社友が訪ねて見えた。そして各自の歌の批評を求められ、何やら大いに語つたが、何を言つたか怪しいものであつた。その間に旅

人は政雄君の甥御たちと仲好しになり、たうとう獨りで、其處に泊る事になつた。その時まで一緒にゐた高山君も、夜の汽車で上妻村に歸つて行つた。

二十四日。昨日中村君方で約束が出來、けふは萬田炭坑を見物する事になつた。單に外部だけならば兎に角、坑内を見する事をば近來一切禁じてあるのださうだが、中村君の義兄が其處に勤めて居られその盡力で坑内にも入る事を許されたのである。私はこの前矢張り従兄を訪ねた時、一緒に坑内まで降りて見たのであつた。そしてその異常な光景に悉く驚いたのであつた。その驚きを旅人にも經驗させた、中村君を通じて無理を願つたのであつた。

附近には他にも幾つかの炭坑があるのであるが、中でもこの萬田が最も大きく、且つ諸種の設備も此處が一番整つてゐるのだ相だ。事務所に着いたは正午すぎで、直ぐ着物を脱ぎ、筒袖じみた合羽を着、防水布製陣笠様の帽子を冠り、長靴を履き、カンテラを携へ、杖をついた姿は天晴凜々しいものであつた。更に幸な事に中村君の義兄のお友達（二人とも働き盛りの工學士であつた）で坑内の某課主任をしてゐる人に親しく案内して貰ふ事が出た。眞直ぐに九百五十呎の深さを持つた坑道を、エレヴェターの疎末な様な機械に乗つて、ほんの一呼吸の間に落下してゆくのである。そして、降りついた其處の坑内は二里四方（所によつては今少し廣く）にわたれる廣さで掘り廣げられてあり、その大部分に電車が通ひ、その先にはトロが走り、その先には馬が歩むといふ風に地下千尺のそこ

ろを蜘蛛の網の様に石炭運びの設備が整ひ、さうして先々の、お互ひに二三里を距てた圓周の端々には素裸體の男女がゐて、せつせと石炭の壁を掘りくづしてゐるのである。其他坑内の通風機關、排水機關等の壯大にして微妙を盡くした機械の力を見るごとに我等の様なものはただもう驚くばかりで、折角丁寧に説明して貰ふ話も殆んど耳には入らなかつたのである。坑内を巡る事二時間あまりで、上に出た。そして今度は陸上に在る工場を見せて貰ひ、やがて事務所の大いなる風呂に入れて貰つて、漸く夢から覺めた様に自分に返る事が出来た。感心に旅人も途中で屁古垂れず、この永い危険な見物を終始息を呑んだ儘に成就し得たのであつた。(この、萬田炭坑見物記をば別に書く積りで、多少のノートを取つておいたのであつたが惜しい事にそれを紛失してしまつた。)風呂から出ると丁度黄昏であつた。直ぐに辭し去らうとすると、中村君の義兄さんの宅で夕飯を用意してあるからとて勧められ、遠慮なくいただく事になつた。そしてや、更けそめたころ、馬車に送られて大牟田に歸つた。

廿五日。午前八時、意外の永滞在となつてゐた大牟田を立つ。従兄、頭あがらず、姉が代つて中村君と共に見送つて呉れた。

あとは、兼ねて立寄る事になつてゐた熊本にも鹿兒島にもよう寄らず、僅かに八代在の林温泉にひつそりと浸つて酒の膏を抜いた上十二年振の故郷日向に入つた。

滞郷記は別に他の雜誌に書くことになつてゐる。

信濃の春

——半折行脚記——

四月十八日朝沼津發、晝近く東京驛着。この日午前二時の汽車にて揮毫用品買込のため東京まで先發してゐた大悟法利雄、及び驛前丸ビル内の會社に出勤中の長谷川銀作の兩君が驛に出てゐて呉れた。直ちに三人して上野驛に向ひ、驛前にて晝食す。午后二時、長谷川君に別れ、兩人して同驛發。

青一色の平野を走る。四方ともうらくとうち煙つた春の日和である。熊谷土堤は櫻の満開といふところだつたが、沼津あたりと同じく此處の櫻も今年はめつきり色がわるさうだ。高崎驛にて夕食を買込み、冷酒の酔漸く醜に及ぶ頃、親しく妙義を窓前に仰いだ。立ち並んだ険しい峯から峯の間に星が大きく輝いてゐた。

うち續いた隧道を抜けて輕井澤の高原に出た時はもう闇であつた。闇ながらに四透の冬さながらの枯野原がよく想像せられて、や、旅めいた氣持になつた。寒さ凌ぎにと大悟法君は驛構内の蕎麥を喰ひに出て行く。九時近く、御代田驛着、重田行歌君が自動車を用意して待つてゐてくれた。

佐久高原の蕭條たる桑畑や赤松林が自動車の頭光に照らし出されて、この久瀧の地に次第に親しみ

が湧いて来る。程なく岩村田町着、この前の時泊つた佐久ホテルに車を着ける。其處には本牧村から大澤茂樹君が来て待つてゐた。乃ち久し振りの炬燵を中に、四人相對して不取敢の盃を挙げ、いつか深更に及んだ。

同十九日。快晴であつた。曉起廊下に出てツイ眼の前に聳えて居る淺間山のおほどかな姿を仰ぎながら、また久瀧のおもひをした。庭の梅樹、まだ蕾らしきものをも見せてゐない。我等は既にこの正月元日に伊豆の古奈温泉でこの花を見て来た事など語つて打ち笑つた。食後附近の名所鼻顔觀音はなづに詣でた。なにがし川の岸、崖の中腹にきらびやかな御堂が設けられてあつた。我等はその崖の上の落葉松の林に入り、枯葉枯草を敷いて休んだ。丁度淺間を前に墓科八ヶ岳を背後に望むといふ位置にあつた。諸山悉く雪を纏ひ、あたりの落葉松も一向まだ芽ぶかう様子をも見せてゐなかつた。この木を初めて見るといふ大悟法君は我等と一緒に坐つてゐる事をもせず、獨り離れて林の奥深く逍遙してゐた。實は此邊の半折會をばこの月末に開くことになつてゐるのだが、それだとそろ／＼農繁期にも入る事なり、ずつと早めた方がよいとの重田君の意見で、急に斯うして出て来たのであつたが、重田君の方にもまだ充分の用意は出来てゐなかつた。相談の上、午後俄かに自動車を驅つて本牧村の大澤君方に赴く事になつた。

その間約四里、佐久高原の丘陵を縫うて通じて居る舊中仙道を走るのである。寒くはあつたが、快かつた。途中、布施村通過の際重田君は下車して家に歸り、代つて其處に待ち受けてゐた萩原太郎君が同乗した。同じく赤松林の丘に挟まれた様な古驛、茂田井の宿に大澤君の邸はあつた。

同二十日。朝萩原君はその勤むる田口小學校に歸り、我等はその午前午後を半折その他の揮毫に費した。そして當地方第一回頒布會を明日同君方で開く事になり、茂樹君の令弟及びその従弟大澤光雄の兩君は共に自轉車により附近三四里四方の有志間に參觀勧誘を試みて呉れた。何しろ村から村の間が近くないので、一方ならぬ骨折であるのだ。

夜はまた一同打揃うて大きな炬燵を圍み、心ゆくまで盃を挙げ、名物の蕎麥、山芋汁など馳走になつた。茂樹君嚴父茂十郎翁、甚だ酒を愛し、而かも壯者をしのいで元氣横溢、昨夜も今夜も最後は翁と小生との對酌對談となり終るのであつた。乃ち茂樹君末弟の私語なるものを聞く、曰く、『先生（小生の事）は兄さんのお客さままで無うて阿父さんのお客だ』と。

同二十一日。早曉、朝飯を携へて茂樹、光雄、利雄の三君及び小生、附近の山、中のたひら上のたひらといふに遊ぶ。共に墓科山の山裾の延びてそれ／＼の尾根をなせるものである。山は全部冬景色で、とり／＼の色をして立ち並んだ枯木立の間に白樺の純白も立ち混り、一昨日の落葉松と同じく大悟法君を喜ばせた。上の平の尾根を歩いてゐた時であつた。何やら耳につく鳥の啼聲が聞えて来た。立ち佇つて聽けばたえて久しい呼子鳥の聲であつた。

呼子鳥啼く聲聞ゆ檜櫟枯葉を残す春の山邊
に

正午歸宅、直ちに會場を作りにかゝり、二時頃出來。ぼつ／＼と人見え、歸るもあり留るもあり、夕方まで残つた人たち十五六人の間にさゝやかな宴會が開かれた。隣村協和村より社友依田國武、田中紅兒の兩君來會、他は多く大澤家としての知人らしく、極く内輪なものであつた。宴半ばの頃、重田君來る。茂十郎翁と小生との殿軍に一枚また勇者が加はつた譯である。

同二十二日。たいへん厄介になつた大澤家に別れを告げ、重田君の勤め先、南佐久郡岸野村なる小學校に向ふ。茂樹君同行。また自動車である。

學校の隣りの某家にて少憩、晝食。鯉は信州の自慢、信州では佐久、佐久でも岸野の鯉といふ程の本場である。大澤君方より持つて來た分の不足を若干揮毫して、會場に定められた小學校二階の裁縫室に陳列し、午後三時より先づ其處にて講演會を開く。聽衆は其處を始めとし附近の小學校の先生たちで凡そ七十名、僅時日の間によく手の廻つたものであつた。講演果て、より會場をそのまゝに二十名程の有志により簡素な懇親會開催、學校の小使氏の手になつたといふ^{かじか}餼料理がたいへんおいしかつた。會果つる頃、小諸より宮坂古梁君來り加はる。

その夜再び岩村田町佐久ホテルに到る。

同二十三日。朝食前一杯を傾けてゐる所へ、同地社友關口勝邦氏來訪、同氏はわが創作社中第一の高齡者であるのだ相だ。初對面の挨拶終るや、氏は端然膝を正して小生に禁酒勸告をせられた。一座無言、僅かに宮坂君によつて多少のとりなしが行はれた。而かも氏は思ふ所を述べ終るや自ら立つて勝手に赴き新たな肴をも添へ、大塚の酒二本を齎らして我等に勧められた。

荻原君の來るを待ち、宮坂關口兩君に別れて自動車により松原湖に向ふ。途中白田町にて大澤君は別れた。初産のため里歸り中の細君を訪ねむためである。

自動車からおり、坂道にかゝらうとする所で先程からばらついてゐた雨が急に本降りになつた。幸ひ附近に重田君の中學時代の級友小池美喜司君宅あり、使して傘四本を借り、難儀をしながらぬかるみの急坂を登る。湖の雨景はよかつたが、水がずつと減つてゐた。湖畔に何とか電氣會社の發電所が設けられつゝあるためだといふ。この前泊つた日野屋別館に上る。成程、二階から見れば鮮人工夫らしいのが附近に澤山見えてゐる。折々石を割るらしい爆發の音も聞える。

夜、小池君、その友鷹野君といふを伴ひ來訪。山芋好きの話が出てわざ／＼鷹野君は自宅よりそれを取寄せ早速宿屋に料理せしめて振舞はれた。この宿では二三年前の秋、中村柊花君を初め、今日同行の重田荻原兩君等も共に投宿、どうしたはずみからか笑ひ始めて連中等しく一晚中を笑ひ明かして、二三日も腹の皮を痛めた事があつた。偶々、部屋もまたその時の部屋であつた。今度は笑ふまじいぞ

と相警めて、おとなしくとろゝを啜る。切りに留めたが、小池君達は大雨の中を十時も過ぎて下山して行つた。舊作、松原湖日野屋樓上笑の歌を録す。

ひと言を誰かいふただち可笑さの種となりゆく今宵のまどる

木枯が吹くぞと一人たまたまに耳をたつるも可笑しき今宵

笑ひこけて臍の痛むと一人いふわれも痛むと泣きつつぞ言ふ

笑ひ入りていつか泣きたる友が眼の瞼毛の涙かがやけるかな

ひとりには部屋の隅なる床の間に這ひゆきて笑ふ涙垂れつつ

笑ひ泣く鼻のへこみのふくらみの可笑しいかなやとてまた笑ひ泣く

四つの枕を並べたうちに小生のは一番はづれの窓際であつた。雨戸に當る吹き降りの烈しい音を幾

度か耳にしながらも、却つて靜かな氣持でよく眠つた。

同二十四日。どうせ降らるゝ事と諦めてゐたのが、朝起きてみればどうやら晴れるらしい。重い曇の何處やらにも確かな明るみが宿つてゐる。湖から四方の枯木の森にかけ、ふとしてはまた寒いのを我慢してあけ拂つた障子の内までも折々振り切れさうな濃い霧が襲つて來たりした。

さうしたところを眺めてゐるうちにいつか小生はいはゆる「牧水半折會」から逃れていつもの一個の旅人としての身にかへり度い欲望、いつそ本能ともいふべきものに附き纏はれかけてゐた。ことに此處より一二里奥、野邊山が原の森林中にある稻子の湯のあたりに今頃啼きしきつてゐるであらうといふ駒鳥の音色などを思ひ出すと、きり／＼と膽の痛む様な身もだえをすら覺ゆるのであつた。

が、實際はさうはゆかなかつた。今日は午後二時から白田町に於て例の半折會が開かれる事になつてゐるのである。幾度か追加した熱爛に元氣をつけて紙を展べ、諸君に助けられつゝ、立ち上つて毫を揮ふ。

そんな風で書きそこなひ徒らに多く、十二時近くなつて漸く豫定の數を書き終へた。晝飯を食ふ時間もなく、愴惶として湖畔を立ち裾を端折つて小海驛に向ふ。昨夜の雨が山では雪であつたか、八ヶ岳など殆んど全山純白となつて我等が背後に輝いてゐた。

急いだ甲斐なく、數分時の事にて小海驛發の汽車に乗遅れた。豫定の開會時間に合ふべくもな

い。萩原君氣轉を利かして白田町に電話をかけ、其處より自動車をよくして貰ふ事にし、それを待ちながら附近の蕎麥屋に上つて晝食をとる。

今日の自動車の速さは全く眼も眩むばかりで、曾て船車に酔うた事のない小生も終には異な心地になつて來た。第一道路が危い。一つ過れば何處からでも自由に千曲川に飛び込み得る斷崖の中腹を始終疾走してゐるのだ。だが、その代り前に豫定した汽車に乗つたと殆んど同時に白田町に着く事が出來た。この邊の自動車の發展は實におもひの外で、どんな小さな宿場にでもまたどんなに危い道でも大方これによつて往來出来る様になつてゐる。そして都會地と比べて賃銀も廉である。

會場は岸旅館といふの、二階で、直ちに千曲川の廣い川原に臨んでゐた。川岸に立ち並んだ數株の柳の枝には流石にもうありとなき緑が靡いて昨夜の松原湖あたりとは大分趣きが違つて居る。會者は多くまた附近の小學校の先生たちで、中には前から知つてゐた人などもゐた。會果て、更に有志諸君と土地一の料理店三龜といふに赴く。同旅館一泊。

同二十五日。早朝の汽車で、同行四人、小諸に向ふ。此處には櫻が咲きかけてゐた。小諸城趾懷古園のほとりなる宮坂古梁君宅を訪ふ。この附近櫻最も多く、早や花見の人数が多かつた。我等もこれにならふべきかとして、淺酌す。其處にて宮坂君と重田君とに別れ、正午の汽車にて三人同乗、松代に向ふ。

松代驛には中村終花君がその友なる大平君と共に待ち受けてゐた。相携へて先づ驛に近き舊城趾に満開の櫻を見る。同じ北信州の中でも昨日一昨日歩いてゐた地方ではまだまるで冬のまゝであるに、此處まで來るともうすっかり春である。かねて打合せてあつたとかで其處に川中島町の社友北澤八郎君が忙しい中を訪ねて來て呉れた。

轉じて象山に登る。この山登りは昨今の小生にとつてはかなり苦勞であつた。が、登りついで眺めはよかつた。打ちわたす善光寺平は悉く一眸の裡にあり、しかもその廣茫たる平野の中にあつてそれと指示せらる、清野村豊坂村西條村東條村寺尾村を初めとして山麓なる松代町にかけ打ちも揃うての花ざかりなのである。而かもその花が、普通いふ花の櫻ばかりでなく、「梅櫻桃李一時に開く」の文句どほりに梅から李、杏の類に至るまでみな一時に咲き揃うてゐるのである。ことにこの松代地方は杏を以て特産としてゐるのださうだ。

梅櫻眞さかりなれや千曲川雪解ゆたかに濁る

岸邊に

山を下つて佐久間象山の邸の趾といふを見た。池の形など、まだ残つてゐた。此處に斯う向いて座敷があり、此處で彼は火藥の製造を試みたのだ、と大平君は斯うした事に詳しかつた。なほ、土地名物の一つである松井須磨子の生れた家も山の上から指示されたのであつた。その家の黄味を帯びた土

塀には折柄夕日がさしてゐた。

町に入つて或る料理屋に上つた。程なく北澤操、太田秋二、宮林忠二君等參會。知つてゐる人は知つてゐるであらう、すべて一頃創作社中の人たちであつた。顔の揃つた所で、この次此處で開かるべき半折會の下相談をなす。

流石に數日の飲み疲れか、此夜小生泥酔、其處を引揚げ萬屋といふ宿屋に行つてまで脚定まらず、時計など滅茶々に踏み碎いた。憐れむべし、悲しむべし。

同二十六日。眼がさめると雨が降つてゐた。この宿屋はよほど舊い家と見え、我等の部屋から見ゆる表二階の屋根は古びはてた藁葺であつた。その藁葺を背景に狭い中庭に茂つてゐる檜の木の新う萌えそめた若芽がすばらしくよかつた。今度造る家、といふうちにも、自分の書齋の窓をばこの樹にて圍みたしなど宿酔の重い頭でうつつ、なく考へてゐる枕許では荻原君と大悟法君とがこともこまかに踏み碎かれた時計のガラスを克明に拾つてゐる。

酒を飲めば癖として小生飯を食はず、さればこそ斯くは弱りけめと特にとろ、汁を注文して今朝大いに食はむとし、而してまたつひに飲み終んぬ。

北澤操君、次いで森島千冴子女史來訪。雨を眺めながらの相談の結果、さう半折會々々々で頭を痛めてゐてもよくなからうから今日はこれより少々息抜きの意味に於て何處か靜かな温泉へでも出懸く

べきかとの中村柊花大人の説に従ひ、北澤君を除く五人は相合傘にて停車場に至り、乗車、一時間の後終點中野驛下車、自動車にて三十分、安代温泉に到り萬屋旅館に投宿した。宿の庭には櫻がほの紅らんでゐるが、軒端に見ゆる手近の山から山にかけてはまだ白々と雪が残つてゐるのである。この邊殆んど半道と距たる事なくして、湯田中、安代、澁、上林と温泉場が並んで居る。數年前、小生は上州の草津から澁峠七里の雪を踏んで此處へ越えて來、半死半生のおもひを経て澁温泉に泊つた事があつた。端なく此處にやつて來て多少の感なきを得なかつた。

夕かけて雨晴れ、冴え返る夜空甚だ美し。乃ち湯田中温泉にまだろくに咲いてゐるない夜櫻見物に出かけ、藤間靜枝女史の振附に成つたといふ須坂音頭なるものを見て歸つた。

同二十七日。安代滞在、別に記事なし。土地名物の色々な深山木にて造りし剝木細工を買ふ、椽の木の大盆、槐の木の小盆、桑の木の椀また盃など。桑の椀は中氣中風を防ぐとか。

同二十八日。安代發、千冴子さん獨り中野を経て松代に歸り、我等四人は豊野まで自動車、其處より汽車、長野市下車、湯勞れの物憂き五體にて市内を散歩し、時間なればとて土地に名高き蕎麥屋「藪そば」に入つて晝食す。その間に中村君の友人にて小生にも舊知なる池田彩雲君に電話をかけその在否を問へば、幸に在り、突然なるに驚きながら直ちに馳けつけて來て呉れた。其處にてまた半折會の相談をなす。彼喜んで萬事を引受けて呉れた。

話の末、社友なる西條梅子女史の噂出で、聞けば池田君もよく知つてゐるとの事で、早速其處に電話をかけ、大勢にて押しかくる事の如何を考へながらも終に皆して訪ね行く事となつた。梅子さんは久しい前に主人に遅れいま單獨にて藥種商を營んで居るのであつた。池田君以上にその突然に驚かれながら一行は二階に招ぜられた。そして唯だ挨拶だけしてお暇しようとしてゐると、いつかお膳が出、お銚子が出た。恐縮しながらこちらもいつかい、氣になつて頂戴する事になつてしまつた。そればかりかてんでに即興の歌など作り、聲高々と歌ひあげたりした。この古風の商家にとり蓋し前代未聞の事であつたらう。

訪ね來て君が二階ゆ眺めやるむかひの峯の松
の色濃さ

友どちと打ち連れ來りとよもして君が二階に
遊ぶ樂しさ

知らぬ間に夜となつてゐた。流石に惶て、立ち上れば、善光寺さまへ案内せむとて彼女も共に連れ立つた。善光寺さまは晝間とは打つて變つての静けさ寂しさであつた。其處より更に城山の夜櫻を見むとて赴く。櫻は今が眞盛り夥しい人出で賑つてゐた。東京風の「お花見」が年々盛んになつてゆくのださうだ。

轉じて池田君の家を訪ふ。途中より別れて梅子さんは歸り、代りに池田君の友人百瀬波村君と一緒に立つた。更けたればと宿屋を求めむとするに池田君捉へて放たず、小生と中村君とは同君方に厄介になる事になり、大悟法萩原の兩君は附近の宿屋に行つた。

同二十九日。朝來微雨。萩原太郎君は早朝別れて南佐久の方へ歸つて行つた。我等の朝飯の膳はいつか晝に續いた。その間にまた即興の歌を作る。

昨日の街上所見二首。

咲き盛る石楠花の花の鉢の蔭に少女梳るうつ

むきながら

少女子の頬を眺めつつ清らけきこの世の命讚

へけるかも

今朝即興一首。

善光寺だひらの花のさかりに行きあひぬ折柄

の雨もただならなくに

池田君の勤むる信濃日日新聞社、小生選歌を受持てる信濃毎日新聞社を訪うて挨拶をなし、停車場に赴く。其處にて五日振の中村柊花君と別れた。

何日振かで二人きりとなつて大悟法君と車中に寂しく對坐す。姨捨の山にかゝるころ、この數日の惶しさに眼にも留らなかつた落葉松の木の色あざやかに芽を吹いてゐるのを見に。佐久高原のこの木ももう少しは春めいてゐるであらう。

麻績、西條と昔戀しき驛を通りすぎていつか松本、其處を過ぎて鹽尻、其處で大悟法君とも別れた。彼は其儘木曾を経て沼津に歸るのである。小生は下車して、其處の在なる長畝村に親戚を訪ふ事になつてゐたのだ。

土砂降りの雨の中を古びた俵に揺られて永い間名に聞いてゐた「長畝の家」に着いた。吉江豊氏宅である。妻喜志子の長姉美保江子の嫁ける所で、義兄にも義姉にも逢つてはるたが家を訪うのは今度が初めてであつた。

正確に時日を知らしておかなかつたので、非常に驚かれた。そして一家に喜び迎へられて温い炬燵に落着いた。やれ〜といふ氣持で胸一杯である。

義兄がまた甚しく酒を嗜んだ。乃ちその炬燵に落ちつくところから始つた酒は其處を出て暇をするまで約三日の間打ち續いたものと見ていゝのであつた。

丁度櫻の花の咲きそめた所であつた。廣い庭に見ごとなその老樹があり、今までに見て來たのとはまるで違つた眞實の櫻らしい色で咲き枝垂れてゐた。酒間折々立つてこの花を仰ぎながらまた二三首

の卽製を試みる。

枝垂櫻老樹の枝のしづやかに垂れて咲きたる

枝垂櫻の花

うち仰ぎよしと眺めし眞盛りの櫻折り來て挿
してまたよし

鉢伏の山に朝日さしまろやかに降りつみし雪

はよべ降りしとふ

とろとろと榎火燃えつつ煙たちわが酒は煮ゆ

煙の蔭に

夕日させる雲のあはひに表れて雪ゆたかなる

駒が嶽の山

中一日滞在、四月一日午后、隣村廣丘村に義母の病を見舞うて一泊、四月二日信州を辭し美濃大井町田中綠夜君方一泊、翌三日名古屋市三田澤人君方に一泊して、四月四日夜深更十七日目で沼津に歸つたのであつたが、あまり長くなるので筆を擱く。

半折行脚日記

—美濃、信濃、尾張紀行—

六月三日。

午前二時起床、昨日のやりかけの『中國民報』の選歌を終り、電燈の下にて朝食。やがて子供達に門前に送られながら夫婦して俵に乗る。富士人だけはまだ眼がさめてゐなかつた。

かつきり六時、大悟法利雄、金澤修二の兩君に見送られながら沼津驛發。夜來の曇次第に薄らぎ、鈴川あたりを通るころは富士がほがらかに密雲の上に晴れてゐた。

静岡邊より席に胡坐し、バスケットを机に『名古屋新聞』の選歌にかゝる。いつもながら濱名湖は佳し。ことに小生は湖の方より遠淺らしき海岸に長々と寄せてをる白浪を愛する。到る所さうではあつたが、尾張だひらにかゝつての麥の秋は美しかつた。麥の熟れたるは稻よりはるかに柔かく明るくて小生は好きである。

麥の色親しきかもよ穂も莖もひとしなみなる

熟麥の色

土赤く禿げたる丘の裾のたひらに小學校あり
て子等ぞ群れたる

名古屋驛にて中央線に乗換ふ。其處に三田滯人君が出てゐて呉れた。三十分の間の立話にて、この旅行の歸りに名古屋に於て同君及び鷺野飛燕、中林晴太郎、入谷溪石君たちの世話にて、開かるべき半折會の用談をなす。

高藏寺驛あたりより汽車は玉川に沿うて走る。大きくはないが清く明るくて、この溪流も小生の好きな一つである。ことに今は青葉の季節、溪を掩うて茂つてゐる向う岸の森林——どうしてこの邊だけあゝ森が深いのであらう——の最も美しい時である。時々青嵐がその森の其處此處を過ぎて行く。亂れ立つ葉裏葉表の光のかゞやかしさは、眼の痛くなるまで見入つても飽きなかつた。

冷たき壘を膝にしながら即詠數首を得た。

吹きたちて走る風みゆ青葉若葉うづまき茂る

向ひの山に

立ちまじるとりどりの木に風ぞ見ゆ松は静け

き青葉の山に

析の木とおもふ若葉ぞうらがへる美しきかな

や向つ山の風に

おしなびけ風こそ渡れ栃若葉くぬぎ若葉の見
わかぬまでに

午後三時五十分、大井驛着。綿引蒼梧、田中綠夜の兩君に迎へられて市川旅館といふに落ち着く。阿木川に臨み、古風な廣やかない宿であつた。此處ならばこれまづい字など書き散らすのをやめて靜かに歌でも作り度い氣がするとて相笑ふ。夜、妻はその姉なる蒼梧夫人の許へ、小生は綠夜君方を訪うた。この前の旅行の歸りに其處に一泊し、信州にての餘勇を振つて大いに飲み荒らしたお詫びを同夫人に申しあげむためであつた。そしてまた馳走になつて歸る。

六月四日。

つとめて起きむとしたが、汽車の疲れかなかく、能はなかつた。僅かにこの行脚記の稿を起せしのみ。

中津町より來て呉れた社友三井正雄君に墨を磨つて貰ひ、綠夜君と妻とに、手傳はれつ、午前午後を揮毫に送る。ツイ眼下の川に起つて居る河鹿の聲が苦しい勞働の間に折々聞えて來た。

夕方、中津より田中冷灰子君、少し遅れて清水芹畝君、安井竹美君を伴ひ來訪。安井君とは誠に暫らくであつた。晚餐を共にし、十時の汽車にてみな歸つて行つた。

六月五日。

眠より覺め耳を澄ませど、聞ゆべき笛の河鹿の聲更に聞えず、起き出でて見ればこまかな雨が降つてゐたのだ。昨日よりや、早し、四時半。

食前、『東京日々』の選歌。やがて隣町岩村町より小早椎之介君來訪。

午前午後を揮毫に専念す。ことに午後は凄じい勢ひで、明日に割當て、あつた分まで一氣に書き完了。

終日、雨。池の鯉が頻りにはねてゐた。椎之介君同宿一泊。

六月六日。

『創作』の選にかゝらむとすれど、昨日の疲勞か、一向に氣進まず。綠夜、椎之介兩君に誘はれて午前近郊を散歩す。小笠置は晴れ、惠那山は曇り、重く明るき梅雨晴の日和である。

晝食後、雑談を交へつ、即興歌を作る。

屋根の上をさし掩ひたる老松の小枝にあそぶ
いしたたき鳥

この老松に松かさおほし小さくて黒み帯びた
る松かさの數

梅雨晴の日ざしさとほる池の隅に静かなる

かも鯉ぞ群れたる

午後、その後追加の分をまた揮毫す。この地、意外の好成績となつた。夕方、雷鳴。夜雨。夜、土地の有志七八人來訪。

六月七日。

曉起、『創作』の選に着手す。

朝食後、肥料商阿部季四郎君の宅に赴き土地名物かすみ網の罟の小鳥を見せて貰ふ。同君方は先々代よりこれが道樂の由にて獵期となれば貨車一臺に此等の罟を積み遠く越前の山へまで出かけてシベリヤから渡海して來る小鳥を捕獲するのださうだ。時に日に四五千羽の數に上る事があつたといふ。罟のために一つの倉が設けられてあつた。種類はツグミ最も多く、シナヒ、マミシロ、ウソ、アトリ、ヒハ其他、可愛い、姿をして並んでゐた。

午前十時過ぎより町はづれの二葉幼稚園にて歌會並びに揮毫展覽會開催。會場、小ぢんまりと明るくて誠に氣持よかつた。ことに低い小机の前に敷き並べられた座布團がすべて一尺五寸四方位、紅や緑の布で作られてあるのなど愛らしく、我等の尻を置くには少々苦笑の態であつた。めい／＼竹中勇、山本すゝ子などと名前が書きつけられてあつた。而かも今日の會衆に年長者多く、町長收入役、

三人の醫師、五十年輩の石工理一さんといふのなども居た。

幼稚園は桑畑の中にあつた。

桑の葉は柔らかきかも伸べば直ちに刈りとり

れゆく桑の葉の色

夜、女氣ぬきの懇親會。氣の毒に中津組はずつと更けてから歸つた。

六月八日。

かねて楽しみにしてゐた惠那峽行きの日である。朝十時の汽車で中津に向ふ。同行は蒼梧綠夜椎之介の三君に小生等夫婦である。

中津では先づ冷灰子君の店を訪ひ次いで芹畝君方を訪うた。お茶代りの酒出づ。なほ珍しかつたは正銘薩摩産の薯蕷酎を出された事であつた。久し振に獨特のその香を嗅いで夏らしい氣になつた。

芹畝君が取締役を勤むる北惠那鐵道により惠那峽入口まで行き、直ちに舟に乗つた。中津よりの同行は同君夫妻を初め冷灰子、竹美の四君に、なほ接待役として同鐵道の係員兩君が加はつた。惠那峽は元來山城の保津川下りと同じく急流激湍に棹さして峽間を驅せ下るが名物となつてゐたのださうだが、現在では有名な大同ダムのためにその急瀨を堰きとめられ肝心のところ二三里が間、悉く淵となり終つたのださうだ。大同ダムとは小生よく知らないが大同電氣會社とかいふ風のものあり大膽にも

木曾川を堰き留めて其處に水深百七十尺に及ぶ淵を作り、その水を落して電氣を起してゐるものさうだ。木曾川を堰いて三里が淵にするなど、痛快は痛快である。

なるほど、一面の淵である。密林と何やらの傳説とを以て聞えた設樂の森にもその水は及んでゐる。水に浸されたこの木深い森はいま朴の花の眞さかりであつた。森と相對した側には苗木城の舊城址だといふ尖塔形の小さな山が水に臨んで聳えてゐた。山に木なし、たゞ中腹に傾斜をなした竹藪がおほらかに風に靡いてゐた。

程なく森は盡き、兩岸相對峙した岩壁となつた。岩壁には松を初め種々の雜木が形おもしろく生ひ古り、杜鵑花はや、褪せながらも隨所に咲き垂れてゐた。この邊、もとの河瀬の時分には岩から岩のながめがいまより遙かに高く仰がれてゐたのださうだ。今とて、然し、悪くはない。寧ろ靜けくていかも知れぬ。やがて舟は急に右折して付地川といふ一つの支流へ入つた。本流より幅は狭いが、岩といひ樹木といひ、一層の寂びを帯びて見えた。舟の行く所まで行き、引返す。その間、芹畝夫人は二人の助手を使ひながらにお燭番やらお酌やら、なか／＼岩壁の樹木の枝振りを見るひまとてもなかつたのだ。其處へ、非常な速度で近づいて來た一人乗のボートがあつた。見れば好漢三井正雄君が店の半纏着の儘で我等のあとを追うて來たのであつた。若い人の元氣なのを見るのは老樹の寂びを見るが如くに嬉しいことだ。

氣遣つた雨にも降られず、充分の「惠那峽行」を果たして、所謂大同ダムに着き、舟から上つた。上つて其處の工事を見物し——なるほど素晴らしいものだと思つた——同會社私設鐵道の便をかりて大井町に着き、其處で五人の中津組と別れた。惠那峽はまつたく水と岩と樹木の世界であつた。

我等はそれより蒼梧君宅に赴き、同君松本中學教諭時代の教子武井某君がわざ／＼その居村落合村より齎したといふ山芋を汁に作つて貪り食うた。

六月九日。

たいへん永く滞在した様な氣のする大井町を、その間常に一緒にゐた諸君に見送られて晝近く出立した。所謂半折會風の惶しい氣持を味ふ事なくしてこの數日を過させて貰へたのは甚だ難有かつた。大井中津の諸君に厚く感謝する。中津町通過の時には昨日の諸君がみな驛に出でてゐて呉れた。

木曾川に沿うて汽車は萌えたつ青葉の中を走つた。惠那峽の奇も面白いが、木曾の溪谷の悠々迫らざるも面白い。木曾川で寢覺の床を讚めるのはいかにも苦笑である。

奈良井川に沿ふ様になつてからの兩側の青葉の中には實に夥しく藤の花が咲き混つてゐた。白々と葉裏をかへす青嵐の木がくれにさゆらいでゐるこの花のむらさきはいかにも清らかに眺められた。桔梗が原のひろやかな松原の小草には鬼つゝ、じの眞紅が一面に散りこぼれてゐた。

夕方、長野驛着。池田彩雲君、西條梅子さんに迎へられ、眞直ぐに廣やかな大門通りを話しながら

に歩いて梅子さん方に赴いた。

六月九日。

この前どほり、と云つても今度はおとなしく、夕飯のもてなしを頂きながら梅子さん池田君我等の四人して半折會の報告を聞き且つこれよりの打合せをなす。其處へ見ごとな櫻桃と苺との籠が届けられた。土地の社友長原よき江さんからの贈物であつた。自身お手づくりのものであるといふ。程なく矢張り土地の社友三戸部英一君が訪ねて來た。

勞れたらうとて早く床を敷いて頂けた。

六月十日。

早朝、俵を走らして我等だけ驛に向つた。汽車に乗り込んでゐる所へあたふたと池田君が社の寫眞師を連れて駈けつけて來たが撮影の時間がなかつた。

戸倉驛下車、がたくと長い橋を渡つて戸倉温泉笹屋ホテルに落ち着く。この温泉には久し振であつた。大分開けて來た様で、宿屋の数も増してをり、この前の時とは見當が違つてゐた。

早速にも墨を磨るわけだつたが、流石に勞れて午前は休息、早晝にして貰つて暫く午睡。午後『創作』と『金の星』の幼年詩との選をやる。

六月十一日。

早朝より長野及び松代分の揮毫にかゝる。揮毫の間に、大井町の市川旅館では河鹿が鳴いてゐたが此處では近くの千曲川の川原から頻りに行々子の聲が聞えて來た。四邊に人無く、靜かで、すらすらと書いて行けた。

晝食後午睡、午后また揮毫に専念す。

一くぎり書き終へて、夕方川原から橋を越えて停車場の方まで散歩した。廣い川原には青々と月見草が茂つてゐる。これが咲いたらば見ごとであらう。その伸び出た莖にとまつて夏雲雀が啼いてゐる。川では二三の人が瀬の中に立つて頻りに何か釣つてゐた。よく釣れる。鮎らしい。思ひついて附近の小店から鮎、鮎の焼いたものを買つて歸る。歸りついたところへ松代より中村柊花、川中島より北澤八郎の兩君がやつて來た。偶然途中で落ち合つて一緒になつたのだといふ。

會の相談の後、親戚に病人ありとて更けてから北澤君は歸り、中村君は泊つた。

六月十二日。

こまかな雨が降りつ晴れつしてゐる。中村君にも手傳つて貰つて、また揮毫。あはれにも馴れて來たか、悪筆を走らすに大分速くなつた。

正午、長野より池田彩雲君來る。三人して飲み始め、夕方に至る。そして、忙し、とて二人は歸つて行つた。夜、夫婦して散歩に出、とある菓子屋で名物の煎餅を買ひ、小包にして留守居の子供に送つ

た。而して我等は眞新しい櫻桃を買つて歸り、それをさかなに小生はウキスキイをなめ、寢に就く。櫻桃はこの附近でとれるのださうで、新しいせるか味がいゝ。二三日前から手許離さず食つてゐるのである。

六月十三日。

早朝戸倉を發し、長野に歸る。小生は講演會用意のため獨り梅子さん方に到り、妻は展覽會準備のため池田君方に行つた。晝食後、癖の午睡をとらして貰つてゐるところへ迎ひが來て、展覽會講演會々場である縣會議事堂に赴く。速いもので、昨日一昨日戸倉で書いたものが全部、三四の室に分けて懸け並べてあつた。すべて池田君を主としてその社内の人々及び縣廳の伊藤惠君たちの世話によつたのである。觀者も意外に多く、流石に面のほてるを覺えた。

午後三時より講演會、聽者また甚だ多く、椅子が足りずに立つたまゝの人が随分あつた。小生の説くところは殆んど一本調子で、今日も『歌と朝夕』といふ風の題目で、歌と人の朝夕、延いてその一生に就いての感想を一時間あまりに互つて述べた。席に北澤君や梅子さんたちの顔が見えてゐるので、謂はばその人たちに話しかくる氣持で喋舌つたのであつた。

それが濟み、會場を閉づるまでの時間を小生は一人席を外づして議事堂裏のコートで行はれてゐるテニスの仕合を見てゐた。名古屋鐵道(管理局か)と何處とかの仕合ださうでかなり立人じみてゐた。

午後五時、其處を出で、世話人中の重立つた五六人と市中を散歩し、とある料理屋にてお互ひの慰勞會を開く。其處で聞く處によると、講演を明日もう一度やつて貰ひたいといふのである。今日は土曜で官廳會社等は多く全日勤めであつたため、ことにテニスや野球(明治大學の呼んだのださうだ)の仕合のあつたため、是非明日もう一度やる様にとの事である。困りながらに引受ける。

夜遅く、池田君方に引上げて、厄介になる。

六月十四日。

朝の一杯が晝になり、一睡して昨日のところに出かける。なるほど、今日は昨日より更に聽衆が多い。困つた事には昨日來てゐた顔も大分見えて居る。全然昨日と同じことを言ふわけにゆかぬ。苦勞して俄かづくりの色をつけ、辛くも無事終了、涼しからぬ事業である。思ひがけなく東京より柴山武矩君がやつて來た。どんな挨拶か氣になる故、來て見たとの事、長野は同君に縁深い土地であるのだ。へとへとに勞れて池田君方に引揚げ、自然に集つた五六人とまた杯を擧げた。何處ぞへ出かけむと勧めらるゝを斷つて、割に早く就床。困つた事に明日は精々ゆつくり休むつもりでゐた所、今度は梅子さんから、高等女學校で何か話して呉れ、同窓會員として校長から頼まれてツイ引受けてしまつた、とのことである。諦めて快諾す。

六月十五日。

静かな雨の日である。早く起きて『創作』の選にかゝる。氣勞れか、一向に進まず、中止して代りに『東京日日』のを見る。

午後一時より、丘の上なる長野高等女學校に赴く。『女子と歌』といふ風のことを、割に氣安く話せた。

其處より池田君と打合せてあつたので、料理屋富貴樓の主人に招かる、まゝ、同家に到り御馳走になる。庭に樹木深し。季節になれば此處が數百羽の椋鳥の囀となるのださうだ。

六月十六日。

朝、人の起きぬ間に『創作』を見る。朝飯の時、型の如く一杯始つたところへ長野新聞の百瀬波村君等來り加はり、朝より終に午後に及ぶ。昨日今日より「黄泉を辿る」の流行語起る。宿醉の謂なり。「どうだい百瀬君、君は今朝はよみぢを辿らなかつたかい？」の類。豪の者池田彩雲、今朝はその途に上れるに似たり。

午後三時、此處もまた永いこと厄介になつた長野市を立つ。池田君の一家など、この二三日間全然我等のために何物をも放棄して居られたのであつた。自動車を呼び、我等夫婦に荷物だけ乗つて松代に向ふことになつてゐたのであつたが、イザ發車といふ際に「どうだい僕たちも行かうぢやないか」と池田君先づ飛び乗り、百瀬、柴山兩君これにならふ。池田君の細君大いに惶て、愛娘まアちゃんを

呼び「お前も乗つておいで、そして阿父さんたちをこの自動車で直ぐ連れて歸つて來るのだよ。い、かい、屹度だよ！」

西條梅子さんところに寄り、別れを述べ、市を貫いて平野に出た。川中島の平である。途中甲越兩軍の最激戦地たりしとふ八幡原を過ぎた。折からの夕日はこの果てしない平野の麥の秋を美しく照らし出してゐるのであつた。

一時間の後、松代町萬屋旅館に着いた。何はともあれとて自動車を待たせおき、この前時計踏割の古戰場たる二階に登つて麥酒を抜いた。「今に中村君が來るから」として引留めたが、小さき檢非違使に引牽されて不精々々に大男三人また自動車に押込められ、長野市さして走り去つた。

引違へに中村柊花君、森島千冨子女史、少し遅れて北澤八郎君が來た。長野市の様子、此處の明日の手續などを話し合ひ、夜更けて中村、森島兩君は歸り、北澤君は泊つた。

六月十七日。

北澤君早く歸り、我等は戸倉温泉で書いて來た後の申込分を揮毫した。

午後、實科女學校の二階で例の展覽會兼講演會開催、土地柄とて養蠶多忙期のため聽衆少く、その代り氣輕に全てが行はれた。

會果て、大平遊民君を初め重立つた七八人は或る料理屋に移つて賑かに會食(?)す。みな藝人に

て、就中宮林忠次、同櫻花君等の木曾節伊那節の唄も踵も全く手に入つたものである。程々にて我等は引上げ宿に歸つたが、あとの諸君はこの短夜の白むまで唄ひ且つ踊つたさうだ。

六月十八日。

この萬屋といふのは全く時代離れのした宿屋で、屋根は藁葺、蚊帳には十ヶ所近いつぎはぎがあててあると云つた有様だが、非常に深切にして呉れる。ことに庭に樹木多く、柿と柘榴とはいま花ざかりである。柿の花は二階の縁にも便所の中にも一面にまひ落ちてゐる。

ばけさうな蚊帳つる宿や柿の花

それらの木に見馴れぬ鳥が来て遊んでゐるのを見附けた。聞けば尾長鳥といふのである。昨日の料理屋の庭にもゐた。鳥好きの心は躍つた。

椋鳥よ尾長鳥よ花の柘榴の木に群れあそぶす

がた美しきかも

青葉若葉花はくれなるの柘榴の木に尾長鳥あ

そぶ長き尾垂れて

千冴子さんが先に、續いて中村君来る。彼は今朝まさに黄泉行旅の客であることをその目顔に示してゐる。氣附に一杯やり給へとて始める。尾長鳥の話出づ。この地方はこの前の行脚記にも書いた様

に到るところ杏の木である。この花の盛り、山にはまだ雪が白いのに、その眞盛りの花の間に最も多くこの鳥の群れ遊んでゐるといふ話など、いかにも美しい。

山に雪降り里はあんずの花ざかり尾長鳥あま

た群れてあそべる

斯る未成品をわざ／＼書きしるすでもないことだが、旅興といふより酒間の一興として残しておくのである。もつとも、同じ尾長鳥といふ名で呼ばれてゐるもので三つの違つたものを私は見て來てゐる。一つは山城の比叡山で見たものでこれは甚だ小さく僅かに親指大で三寸ほどの尾を引いてゐた。

一は同じ信州蓼科の山麓で、

尾長鳥その尾は長く羽根ちさく眞白く晝をと

べるなりけり

尾長鳥石磨るごとき音には啼き山風強みとび

あへぬかも

と詠んだもの、これは鴨を今少し瘦せさせたほどのものであつた。此處でいふ尾長はそれよりもやや大きく、椋鳥に似てゐる。色はまことに綺麗で、南畫風の花鳥の圖によくかかれてあるのがこれではないかと想はれた。尾は前二者に較ぶれば左程に長くない。

迎ひ酒の廻りよく、程々に杯を納めて自動車を呼んだ。何とも忙しいといふので中村君とは店頭で別れ、千冴子さんが屋代まで送つて呉れることになつた。篠之井より汽車、屋代で千冴子さんに別れ、久し振に夫婦だけとなつて千曲川に沿うて溯る。妻は信州生れだが、小生の方が信州に明るく、案内役となつてあれこれと説明せねばならなかつた。

正午小諸驛着、宮坂古梁君に迎へられて同君宅に到り、晝飯を頂きながら、この廿一日この地で行ふ半折會の打合せをなす。二時何分かの汽車で、小諸發、三つ目の驛沓掛にて下車、直ちに星野温泉に赴いた。

落葉松の茂つて居るこの澤の中の一軒屋である星野温泉は數日來人間に食傷して居る妻の心を悉く喜ばせた。幾らか雨氣づいてゐる空のもとに落葉松の若葉はいよ／＼青く、庭さきを流れてゐる溪を挾んだ霞の茂みには行々子がひつきりなしに啼いてゐる。小生すらもや、ほつかりした心地になつた。湯上りの一杯を試みてゐると、ツイ溪向うの松山に杜鵑がせはしく啼き出した。

六月十九日。

昨夜早かつたので、今曉甚だ早く眼が覺めた。妻の枕許で『創作』中學世界の選を行ふ。夜の明くるに従ひ、濃密な霧は次第に薄らいで、こまかな雨が降り出した。二三時間の爲事に倦んでぼんやり縁側に出てゐると端なくもなつかしい聲を聞いた。郭公である。かなり遠いが、はつきり聞える。

急いで妻を起して共に縁側に坐つた。

食後直ちに揮毫にとりかゝる筈であつたが妻の請ふまゝに少し附近を散歩する事になつた。傘を借りて背戸の丘に登る。立ち込んだ落葉松の木はそのこまかな枝や葉のさきにいづれもかすかな雫を宿して、みどりの色が一層美しい。ことにその林の下草にいろ／＼と珍しい野草がとり／＼に花をつけてゐる。残念なるかな、名を知らない、僅にわすれな草なるこ百合などが解る位のものである。

丘の小さな木立を抜けると打開けた野原に出、眞向うに近々と淺間が仰がれる。雨は降りながら山には雲なく、かすかな煙が頂上につつすらとまつはりついでゐる。野原を圍むは遠近にか、はらず全て落葉松の林である。其處へ、それこそどうしたものか急に郭公が啼き出した。しかも四羽位、それぞれ所を異にして啼き出した。我等は顔を見合したまゝ、傘をしつかと握つて、佇んだまゝ、耳を傾けた。雨は靜かにそゞぎ、見る限り人の影とてもなく、四邊はまだ冬のまゝの枯草があらはに見えて居るのである。

一しきりその合奏風の烈しい啼聲がしづまると、今度は一羽或は二羽が間遠に靜かに啼き出した。歩くともなく歩いて、いつか千ヶ瀧遊園地の奥のつめまで行つてしまつた。其處には落葉松の林にまじつて綺麗な白樺が幾本となく立つてゐる。斯ういふ景色に初めて出會つた妻の喜びは見てゐて可笑しい様で、雨に濡るゝも構はず、草を摘み林に入り、更に何處までも歩まうとする氣勢を示してゐる。

が、さうもならず、引返す。郭公は實に静かに、あちらで啼き、こちらの森で啼いてゐる。

枯草のあらはに残る荒野原かすかなるかも郭公の聲は

からかさなを傾けて聞くや雨さむき枯野のすゑの郭公の聲を

淺間山にそれともわかぬ煙見えてかすかなるかも郭公の聲は

長々しくうすみどりの房をたらしたる胡桃の花を初めてわが見つ

宿に歸つて揮毫にかゝる。離室の二階は全く静かで、順序よく爲事ははかどつて行つた。やかましい位の杜鵑の聲行々子の聲である。小生は行々子の姿を初めてしみじみと見た。彼は葭の原からまひ出して来て、我等のゐる二階のツイ前の落葉松の枝にとまつて、いとほしいまゝにこの鳥獨特の滑稽なる饒舌を放送するのである。我等は幾度か顔を見合せて笑ひだした。でも、薄茶色の羽根の清らかさはさすがに水邊の鳥らしい。

清らけきうす色の羽根よ葭の原ゆ啼きつと

べる行々子見れば

葭の原ゆまひたちきたり落葉松のさみどりの

枝に啼けるよしきり

杜鵑は、折々宿の屋根をとびこえて啼いた。

山の湯のそのわかし湯のえんとつのはまひ

こえて啼くほととぎす

午後、揮毫續行。夕方、また散歩。

ほんとに静かな、よき一日であつた。

六月二十日。

早曉、『創作』の選。また、静かな微雨の日である。午前中、揮毫専念。

お晝ころ、長野市から池田彩雲君の夫人が見えた。食後、妻は夫人を案内して千ヶ瀬の方に行く。

留守中、小生獨りにて揮毫。

夕方、重田行歌、大澤茂樹兩君來訪、久瀧を述べてゐる所へ、宮坂古梁君夫妻來る。大勢して一風

呂浴び、一杯始めてゐるところへ遠く白田町より荻原太郎君がやつて來た。由來この温泉宿は我等一味のよく飲んだ由緒つきの宿である。しかも、部屋までいつも同じところだ。乃ち杜鵑行々子郭公の

諸公を閑却して賑かに飲む。池の鯉、跳ぬる事しきりなり。

六月二十一日。

雨晴る。一行八人、早朝自動車に詰めこまれて驛に赴く。杳掛驛發、小諸着。早速準備にか、つて、午後二時、圖書館樓上にて例の展覽會兼講演會を開く。今日は割に老人たちの出席が多かつた。長野市より池田君來會。

夜、土屋殘屋、岩崎樞郎、井部李花三君の追悼歌會を井部君の生家勢喜屋に開く。三君とも、舊い創作社の社友であつた。

宮坂君方に池田君と我等と二夫婦厄介になる。重田君等の一行は宿屋であつた。

六月二十二日。

朝、例の如く起きてはみたが、爲事出來さうになく、妻を起して懷古園を散歩す。いつもながら此處の樹木と、淺間裾野の遠望とはい、。

十時、宮坂重田君等に別れて小諸を立つ。更に篠之井で池田君夫妻に別れ、午後四時松本驛下車、淺間温泉翁之湯に赴いた。この宿には數日前から『藝術解放』同人の山崎斌君宮下茂君が來てゐるのであつた。

早急なことよ、その夜その宿で直ぐ歌會が開かれた。これは松本市深志短歌會の水内公夫、吉江白

雨君等の主催にかゝるものであつた。

この歌會で小生は實に思ひがけぬ、また久し振の人たちに出會つた。先づ禿頭緒顔の六十翁山口彌市氏であつた。この人は、これも創作社創設當時からの社友で一時山口破魔子と云ひ後山口瀨雄の實名を以て獨特の才氣ある歌を發表してゐたが何か思ふ所あつて暫く歌を離れ北海道に渡つて警部補だかになつてゐてツイ三四年前に病没した人の實父であつた。手紙では往復してゐたが、逢ふのは初めてであつた。相對して言ひ難いなつかしさを覺えざるを得なかつた。山口翁もまたさうであるらしかつた。土地の新聞で小生の來る事を知り、急遽その居村豊科から出て來られたのださうだ。その次はこれも舊社友で、數年來逢ふことのなかつた日野義人君であつた。その次は、これは歌會が始つてよほど經つてからのつそり席に入つて來たのであつたが、たえて久しい小河原素山君であつた。この人はまだ社友ではありながら、歌をなまけてゐるので忘れてゐる人が社中にもかなりあるだらう。その他、急な催しにもかゝらず山田蕤雨、山口冬村君等の社友も各自遠い所から駈けつけて來て呉れた。山口君は親戚に葬式があり、その歸りに汽車中で讀んだ新聞によつて飛んで來たとかで、紋附袴の禮裝であつた。

十二時過ぎて、閉會。

六月二十三日。

昨夜約束したとやらで、朝早く日野君の泊つてゐる小柳の湯から迎ひが来た、とろ、汁を御馳走するといふのである。やがて、日本アルプスを見晴らし得るその三階の部屋では朝からたいへんな宴會が始つた。主人公日野君を初め、同君の宿に泊つたといふ小河原山口の兩君、小生方の翁の湯から出向いた山口翁、山崎宮下兩君に小生等夫妻、程なく美人連も出現するといふ騒ぎで、たわいなく晝すぎまで飲み抜いてしまつた。しかもそれにとゞまらず、今度はまた河岸を代ふべしとて我等の翁の湯に移つて深更まで、完全に終日を飲み暮らしてしまつた。

サテ、小生は此處でこの行脚記の筆を擱くことにする。淺間温泉には二十二日から二十八日まで七日間滞在した。その間二日間に亙つて名古屋での半折會の揮毫をやつたほか、選歌を少しづつ、試みたのみで、先づ埒もなく遊んでゐるにすぎぬからである。これ一は二十二日に小生等より先に其處宛に届いて居るべきであつた或る所からの金が出立前まで届かなかつたといふ苦しき理由もあつたのであるが、要するにこの際に於ける大事な時間をチト濫費した傾向がある。

廿八日淺間を立ち、名古屋市、三田澤人君方に一泊、同君と中林晴太郎君と共に半折會の打合せをなし、大いに御馳走になり、廿九日夕方廿七日目に沼津の子供たちの側に歸つたのであつた。

九州めぐりの追憶

今度の旅はわたしにしては珍しく「豫定どほり」に歩いた旅であつた。出立前にたてた豫定を少しも狂はさないで、五十日間歩き廻つた。

即ち、沼津發が十月廿八日、同夜大阪一泊、同廿九日岡山着、同地四泊、十一月四日周防國伊保庄村着、二泊、同四日八幡着、五泊、同九日福岡着、四泊、同十三日長崎着、四泊、同十七日大牟田着、といふ風であつた。大牟田では從兄の家に一泊して、翌日は其處より二つ三つの停車場を後戻りして羽犬塚驛といふから二里ほど引込んだ船小屋といふ鑛泉に行つた。從兄の家に居ては來客が多かりさうに想へたので其を避けて揮毫を急ぐ爲であつた。所がその鑛泉宿があまり面白くなかつたので、僅になか一日揮毫しただけで、廿一日に大牟田に引返し、廿四日まで滞在した。廿五日には熊本に行き、翌日阿蘇山の麓に在る枋の木温泉に赴いた。揮毫する爲でもあつたが、休みたい氣持もあつた。そして廿七日阿蘇山に登つた。之は豫定外の附録であつた。廿八日熊本に歸り、十二月一日同地發、大隅國霧島山中の榮之尾温泉といふに行つた。實をいふとその日眞直ぐに鹿兒島市まで行く譯であつたが、

同地の揮毫會の雜用を引受けて呉れてゐる前之園君夫妻が留守になつた、めその歸りを待ちかたぐ、それまでに申込のあつた分をその温泉で書きもし、勞れた身體を少しでも休めようといふ思ひつきからであつた。鹿兒島入は四日、流石に此處がもう今度の旅のおしまひだとおもふと氣もゆるんで、思はず二日ばかり長滞在して、十日同地を辭し、郷里日向の都農町といふに嫁いでゐる長姉の家に寄つて二泊、十二日には別府温泉に出た。其處三泊、十四日の午後と夜を汽船で明かして十五日京都着、二泊、そして十二月十七日午後四時何分か、まさしく五十一日目に沼津驛に降り立つたのであつた。

大阪では梅田驛からすぐ野元純彦君上海行の送別歌會に出席し、同夜遅く大島武雄君の宅に行つて厄介になつた。岡山ではずつと伊勢崎海花君方にゐた。奥さんが一月振とかで昨日漸く病院から歸られたといふところに押込んでお騒がせしたのであつた。幸に障りなく、始終まめまめしくもてなして下された。なほ岡山から程近い宇野港の汽船宿の娘さんである社友瀬崎兼子さんがずつと詰め切りで奥さんの手つだひをして下された。この兼子さんのうちには數年前伊勢崎君と兩人して泊つたことがあつたのださうだ。無論お互ひが知り合はない前のことである。小著『樹木とその葉』のなかに收めた小さな紀行文にたしかその宿のことが書いてあつたとおもふ。兼子さんのほかに社友岡本純君もまた遠い田舎から出て來て泊りこみで世話をして呉れた。

岡山では思ひがけなく藤間靜枝さんに出會つた。中國民報社主催の歌會のあつた日で、街でその舞

踊開演のビラを見て驚きながらもその宿を探す餘裕なく、歌會が果て、から先づ劇場に行つた。そしてその前の料理屋に腰を据ゑ、樂屋に使を出した。とてもそとに出てゐられないからこちらに來てくれとのことその樂屋に出かけて行つて、逢つた。樂屋といふものを見たのは生れて初めてであつた。そしてお酒など御馳走になりながら舞臺をも見せて貰つた。満員の、たいした入りであつた。可笑しいのはその次の日、朝酒がすぎて一汽車乗り遅れ、次の汽車に乗つてゐると發車間際に我等の隣の室にどや／＼と乗り込んで來た美しい人たちがまた同女史の一行であつた。柳井津まで同車した。

柳井津で村上可卿君に迎へられ、伊保庄村なる同君宅まで行く自動車の中で、端なく海から昇る月の出を見た。満月であつた。非常に寒かつた。そして同君宅に泊り、夜なかに便所に行かうとして見た月夜がほんとによかつた。無數に並んだ岩と松との庭である。その岩は白く、上に落ちた松の影は目ざむるばかりに深かつた。

翌日、同君宅の裏の眞白な濱から小舟を漕ぎ出して、ツイ前に浮んでゐる鴉島といふに渡つた。全島まん圓くも見ゆるばかりに樹木の茂つた小島である。その森蔭になつた崖の岩の巖々に縞をなして石蔭が咲き盛つてゐた。村上君の庭にもたくさん咲いてゐた。この花の多い土地らしく何だか色も他處のより美しく思はれ、初めてこの花を見る様な氣がした。

八幡では折柄降り始めた時雨の中を、荒生田山といふ岡の上の宿に案内せられた。宿のことに就い

ては戸畑八幡の支社の人たちがひどく心配して、静かで氣持よくて廉くて、といふのであれかこれかの末、この宿が選ばれたのださうだ。荒生田山は山といふより岡であるが、もと小笠原侯松茸狩のため備へられたものだから、今は開かれて遊園地となり、櫻や楓の若木が一面に植ゑ込んである。が、岡の一部に昔を忍ばせる自然林が残つてをり、松は少なくなつて居るが椎その他名も知らぬ二抱へ三抱への老樹大木があつてみつちりと茂つて居る。八幡といへば例の製鐵所の物凄い火焰と煤煙とのみが聯想せらるゝがまるでそれ等と縁故のないほど静かな場所であつた。

着いた第一夜はあづま屋風の離屋に四十人近かつたかと記憶せらるゝ支社の人たちが集つて歓迎宴を開いて下さつた。我等はみな年が若いから平常は決して酒など飲まない、たゞ今夜だけは別です、といふ勢ひであつた。何處でもさうであつたが、なかにもこの八幡の、それこそまだ青年揃ひの人たち（毛利雨一樓君は別）が半折會のために盡して下された有様は全く言葉のほかで、中の四五人といふものは小生滞在中の四五日間、殆んど寝ず食はずの姿であつた。すべて役所（製鐵所）を休んでの爲事である。心配してそれを言へば、いや我等には一年中に許された休日が十日ある、それをこの半折會の話の出た時からみな申合せてとつておいたのです、とのことであつた。夫婦づれで奔走して下さつた人たちも幾組があつた。自宅で御飯をたいてゐては時間が惜しいからといふので、その四五日間外出先でばかり、それも大抵うどんのみ濟まされたらしい。此處くらゐまたいゝ夫婦の揃つてゐる

るところは世にあるまい。見てゐて難有いやら少々憎らしいやらであつた。毎日揮毫に努めてゐるが、中の一日、わざと山道を辿つて戸畑に毛利君を訪うた。山道の入口まで佐藤須美子（白霧君夫人）三苦京子さんの二人に送つて貰ひ、岡と田圃の間を長閑な小春日に照らされながら、煤の町から煤の町へと辿つた。忘れられない一日である。

福岡では加藤介春君宅に厄介になつた。新聞記者の癖にまるで超世間的家庭を作つて居る同君夫婦にとつては我等の滞在はかなりの驚異であつたらう。同君とは十四年振に逢つたのであつた。此處も随分と忙しかつたが、或る日は某寺に大隈言道の墓を訪ひて香華を手向け、ある日は安河内洲起、吉田英資、春木水脈、高山三千樹の諸君に連れられて太宰府に參つた。都府樓の跡の枯芝原に坐つてゐると時雨が降つて通つた。天拜山などといふ名もその山の前に來ておのづから昔なつかしく思ひ出された。中の一、二度歌會のあつた夜、四五人して安河内君の宅を襲うて泊り込んだ。夜ふけではあり、ことに嫁いで來られてまだ三十日たゝぬといふうら若い同君夫人にとつてはさぞかし迷惑であつたらう。その次の朝が忘れられない。明方眼がさめると、庭を掃く音がする。枕もとの時計を見ればまだ四時である。手燭に灯をつけて厠にゆき、ひそかに庭を見ると夫人が掃いて居らるゝのであつた。同君宅は市内とは云つても郊外めいた處で、庭などはすつかり田舎風であり、其處にわたしたちの行くのを待つてまだ梢にその實のとつておかれた柿の木が四五本あつた。早曉、熟れ切つて粉をふき、さ

ながら霜の結んだ様にも見ゆる二三種類の柿を大きな筥一杯にもいで縁先に持つて來られた時にはまつたく我を忘れて聲を擧げたのであつた。洋服姿の春木君達はみな庭に立並んで喰べた。咲き亂れた破籬の菊といひ、箒目の正しい濕つた庭といひ、まことにこの朝のことは印象深い。

前號の様に日記體に書いてゆくとどうしても喜志子の紀行と一緒になつてしまふので、今度は小生は前後をつけずたゞ斷片的に座談風に書くことにします。

温泉のこと

長崎から温泉嶽に登り一兩日其處の湯に浸るつもりであつたが天氣と荷物都合で行けなかつた。その代りといふでもなかつたが人を離れて靜かに休みもし揮毫もしようといふので我等夫婦だけ大牟田から船小屋温泉といふに行つた。

此處にはこの前の九州行の時、一昨々年の春、にも行つた事があつたが、今度もあまりいゝ氣持がしなかつた。第一沸し湯はきたないが當で、それに此處は胃腸にきくとかで病人らしいのが多く、さういふのに限つて行儀のわるいが常であるが此處では他處より一層眼についた。従つて番人の眼つきも嶮しく、横柄であり、それでゐて入浴料一回拾錢をとるのである。先づほかに斯ういふ處はあるま

い。たゞ宿が矢部川の岸に在ると、對岸にこれも此處だけに見らるゝであらう大きな樟の並木が數町に亘つて鬱蒼と連り茂つてゐるのが取柄であらう。そして温泉場を圍んで四方は一面の櫨の畑である。筑後筑前の櫨紅葉はよく云はれてゐるが、我等の行つた時はそれはもう過ぎてゐた。が、私は寧ろ紅葉よりあの粒々の黒い實が冬枯の枝に房をなして垂れてゐるのに親しみを覺えた。其處から遠くない上妻村に高山三千樹君を訪ふべく或る日我等はぼつ／＼とその櫨の畑の中を二里近く歩いて羽犬塚といふ停車場まで出たがいかにも冬風らしい一日であつた。船小屋には豫定の半分も泊らなかつた。熊本に着いた翌日、栃の木温泉といふへ赴いた。これは九州日日新聞の後藤是山君に案内して貰つたので、我等のほかには黒木傳松、高木大樹の兩君も一緒であつた。九州、ことにわたしの郷里日向地方には温泉といふものがなく、温泉といへば即ち別府といふ風であつた。今では霧島や指宿などがやや聞え出してゐる様だが、わたしの中學時代まではそれらの所在すらわが地方には知られてゐなかつた。たゞどうしたものかこの阿蘇の谷間に在るといふ栃の木温泉ばかりは折々われ等子供の耳にも聞えてゐた。ちひさき時母に別府に連れられて初めて温泉といふものを知つたわたしの心には妙にこの栃の木といふ名が忘れなかつた。で、この栃の木行きはさういふ意味でもずつと前から楽しみにしてゐたのであつた。そしてよくありがちのこの幼い豫想の裏切られることをもひそかに虞れてゐたのであるが、幸にしてそれなしに濟んだ。

阿蘇の裾野のなだらかな傾斜の中の一線が鋭く細く抉られて其處に溪が流れてゐる、その溪間の一點にこの温泉は噴き出てるのであつた。こちら崖、瀨を挟んで對岸も峻しい崖である。そして向う岸の崖は峻しいながらに種々の老樹を茂らせ深い木立をなして居るのである。十月から十一月にかけてその森の紅葉が甚だい、とのことであつたが我等の行つた時はもう過ぎてゐた。惜しいことでしたといふ人々の言葉を聞きながらわたしは矢張りそれよりもこの岩山の岩から岩の間にあらはに枝を張つてゐる冬木の姿をよしと眺めた。湯も綺麗で多量であつた。宿屋も自然崖なりに造られてゐた。峻しい石段を一つ降りれば其處にも湯、も一つ降れば其處にも湯槽、そしてその一つ／＼に湯瀧の音が響いてゐると云つた風であつた。われらの泊つたのは荒牧旅館と云ふ古風なうちであつたが、宿もよかつた。ために氣持よく爲事がはかどつて、中一日の餘裕が出来、それを利用して阿蘇登りをやつたといふわけであつた。

其處を立つて熊本に歸る日、これも後藤君に連れられて栃の木から半道ほど川下に當る戸下温泉といふのでお晝をたべた。これは北と南とから阿蘇を挟んで流れて來た二つの溪の落ち合う所に在り、前面は同じく懸崖であり密林であり、ことにその森林はいかにも自然林らしい趣きを持つてゐた。折も折、我等が杯をとつてゐる時俄かに烈しい時雨が降つて來てその森を一層深いものにして見せた。湯は栃の木から引いてゐるのださうだ。

栃の木をば熊本にゆく前から、といふより九州下りを企てたころから幾らか心に置いてゐた。が、全く思ひがけなかつたのは霧島温泉行であつた。初め九州に入つた時から熊本あたりに辿りついた頃は定めし勞れてゐるであらう、出來たら栃の木かさなくば林温泉に行つて一寸でも身心を休めたいと思つてゐた。そして栃の木には行つた。其處から熊本に歸つて來ると其處の次に豫定してある鹿兒島からの便りに主催者側の都合で揮毫會講演會を三四日延ばしてほしいと云つて來てゐた。やれ嬉しや、もう一つの林温泉にも行けるぞとわたしは喜んで口に出した。

林温泉は熊本から汽車で三時間、人吉驛で降り、右に折れて約一里あまり、球磨川の岸に沿うて居る。此處にはこの前、一昨々年長男旅人を連れての九州巡りの時、父子で來て一晚泊つて居る。場所も宿も湯も静かな處であつたので、今度は妻を連れて其處へ行かうとしたのであつた。その話を側で聞いてゐた高木大樹君が例の考へ深さうな顔をして、『先生、それは今度は林をよして霧島温泉にいらした方がいゝでせう、林はもう御存じですし、霧島は……』といふ風に諄々と霧島温泉のよいところを説いてくれた。さうして我等夫婦は思ひもかけなかつた山の上の温泉に登つてゆく事になつたのである。

其處へ行くには鹿兒島線牧園驛で降り、霧島火山の裾野の傾斜を約一時間自動車で駈け登らねばならなかつた。駈け登る自動車の右手下には廣々として裾野が開け、裾野のはてには鹿兒島灣（普通錦

江灣といふ)が輝き、灣の中には櫻島が聳えて居る。これが健康者で何の用事も荷物をも持たぬ旅客であつたならば如何にも珍しいそして景色のいゝ温泉の道であるに相違なかつたが、因果と我等はさう行かなかつた。既に五十日近い難行苦行の旅を續けて來てゐる我等夫婦の身體にとつてはこの雄大な坂道を駈け登るべく餘りに痛快にわが自動車は疾走し、動搖した。今にも放り出されるか、放り出されたら何處まで轉けて行くか量り知れぬ道下の崖である。必死とばかり車體の其處此處にしがみついてゐるのであるが、そのうちに頭は痛み、眩暈はするといふ風になつて來た。やれ／＼高木君はエライ所を教へて呉れた、休息どころか難儀をしに來た様なものだ、向うに着いたところで爲事も何も出來はしない、第一これでは身體がもたぬ、と思はれた。入浴とは云つても矢張り今までに申込んで來てある鹿兒島での揮毫會の分を其處の温泉で書かねばならなかつた。ほんとにこれはひどい目にあつたと今は早や景色どころか兩眼を瞑ぢながらひたすらにたゞ悔いられた。

漸く終點に着いた。見廻せばこれはまた老樹大木しん／＼として聳え立つた中にしよんぼりと小さな小屋が立つてゐるといふ終點である。エライ處に來たものだ、と又しても思ひながらそれでも意外に深切な青年運轉手に荷物を擔いで貰つて、更に五六町の急坂を登つて行つた。洋傘に縋つた妻などは正しく半泣きの態である。この自動車の終點を中心にして半道一里の間をおき三四ヶ所の湯が散在してをり、その中の榮之尾温泉といふへ我等は登つて行つたのであつた。

海拔九百米突といふその山の湯は随分と寒かつた。慄へながらに火鉢を中に相對した夫婦は誰からともなく誘はれて苦笑した。泣き笑ひといつたがよいかも知れなかつた。まア／＼一浴びして來ようとうち連れて湯に立つた。豊富な湯である。僅かに濁つて、硫黄の香がする。温まるもそこ／＼に部屋に歸つてまた火鉢を挟んだが、何ともいへず淋しい氣持である。とり返しのつかぬ事をしてしまつた様な氣持である。こんどの旅で斯んな心細い思ひをしたのはこの時が一番であつた。考へてみれば何もさう淋しがらずともよかつたのだが、一つは身體の疲勞からであつた、一つは爲事をせねばならぬといふ責任感からであつた。要するにこれは今度の旅の、揮毫旅行のもの、あはれを集めたものであつたらう。難有いことに酒がよかつた。一本二本と呷つてゐるうちにいつか心も靜まつた。いつの間に出たのか戸外は烈しい風である。ガラス戸は鳴りはためき、家は搖れ、山から谷に籠つての風の音である。聞くともなく聞いてゐるうちに、漸く三千尺高さの山の上に來て泊つてゐるといふ意識が、ほの／＼として身に湧いて來るのを覺えた。今までが全て「人」と「人事」との裡に包まれ通して來た今度の旅であつた。今夜はフイとそれから解放せられて、夫婦つきりの普通の旅となつてゐる様な心持が何處からとなく湧いて來た。「い、よ、これでい、よ、此處に來て矢張りよかつたよ」斯うした事を繰返して妻の前に言ふ様になつた時は徳利の五六本も並んでゐたであらう。風はいよ／＼荒んでゐた。

宵が早かつたので、朝早く眼がさめた。白く乾いた湯殿の板の間で身體をしめしていると何やら冷たいものが背にあたる。顔を上げると粗末な天井の湯気ぬきから何やら白いものがまひ落ちて來るのである。暫くそれを見てゐるが合點がゆかぬので、窓際に立ち寄つてみると正しくも雪である。窓と相對した崖に茂つてゐるうす赤らんだ枯萱叢から空にかけ霏々として降り狂うてゐる。驚いてわたしは妻をよんだ。そして笑ひ出した、昨日から今日にかけ何といふ突拍子もないことに會ふものぞといふ高笑ひであつた。而して甚だ愉快な笑ひであつた。十二月二日早曉のことである。

雪は終日降つた。時に深く時に淡く、風が添うてゐるので容易に積らなかつたが、庭さきの冠木門、とりふくの庭木、庭石、やがては庭いちめん白々と積つてゆくのを眺めながら、僅かに一二本の手紙など書いたきり、何をすることもなく一日を過してしまつた。これも今度の旅のうち、前後にかけて例の無い一日であつた。

此處の湯は實に豊かに、そして幾個所にも湧いてゐた。謂ふ所によると僅か方一町ほどの範圍に二三種の性質の湯が湧いてゐた。硫黄泉、含鐵泉、明礬泉など、それ〴〵湯殿を異にして三四ヶ所に湧いてゐるのである。中にもわたしの喜んだのは此處の湯瀧であつた。懸け並べられた十一の筧の口から大小とりどりの湯が落ちてゐるのである。ことに難有いのは、湯瀧とは云つても大抵他處のは普通の湯槽の隅に一つか二つ落ちてゐるが常であるに、此處にはその外に、瀧専門の浴槽が設けられてあ

るのである。深さが二三寸、丁度兩方の掌を重ねて顎を載せ、腹這ひになつて頭なり肩なりを打たせることが出来る様になつてゐる。ために、のぼせる憂ひがなく心ゆくまで悠々と打たせ得る。そして數が多いので一つの瀧に頭を打たせ、一つには脚腰を打たせることが出来るのである。浮かれて打たせすぎてわたしは肩や三里を痛くした。恰も強い按摩に一二度續けて揉ませたあとの痛さであつた。

翌日は早朝から墨を磨つた。昨日一日で悉く氣持をよくしたので今日はせつせと書かうといふのである。折よく雪の後の快晴で、此處の自慢の裾野からかけて錦江灣一帶の遠望がよく利いた。海上に雪を冠つて聳えた櫻島の姿が美しかつた。庭さきから登つて行つた坂の上で見廻すと、宿屋の周圍は思ひもかけぬ深い森で圍まれてゐるのであつた。御料林か官有林か、諸所伐り開かれた跡も見ゆるが兎に角に斧を知らぬ自然林の姿を留めてゐた。樅か檜の多いらしいその森には昨日の雪が色鮮かに積んでゐた。高千穂の西の峰、韓國嶽の圓やかな頂にも美しく輝いてゐた。滞在三泊、十二月四日、鹿兒島に向つた。今度下りの自動車には寧ろ快く乗りおほせる事が出來た。矢張り先日登りがけの神經質は疲勞から來たものであつた。

開聞嶽に近いといふ指宿温泉の名も久しく心にあつた。が、今度は諦めねばならぬと思つてゐたところに、前之園喜一郎君の厚意で大急ぎながらも行つて見て來ることが出來た。鹿兒島から十二里とか三里とか、多く海に沿うた明るい道を自動車を驅つて到着、わざと宿屋に寄らず、前之園君の叔父

の持家で留守番の婆やを置いてあるといふ家に一泊して、附近の湯にも入り、短い時間に係らず四邊を見て廻つた。指宿は別府と同じく山を負うた海岸の平地で、湯もまた同じく平地の隨所に湧いてゐた。あまりの多量を持ってあましてその湯に鐵力の舟を浮べ、舟中に海水を引き蒸發させて鹽を作つてゐるといふ奇觀もあつた。また到る所に砂湯が設けられ、普通の湯槽よりこの方に浸つてゐる人の方がよほど多かつた。レウマチ、關節炎等に對する効能、驚くべきものだといふ。

指宿温泉に對しては、文字通りたゞ見物して來たといふ感じにすぎない。一泊して翌早朝また自動車走らしたのであつた。いづれまたゆつくりと出直して其處の氣分に浸りたいものである。

別府の湯に入つたのは實に久しぶりであつた。何しろ温泉といふものをわたしの初めて知つたのはこの別府であつた。七つか八つの歳であつたであらうか。その頃はまだいまの指宿温泉程度の開けかたではなかつたかと思ひ出さるゝ。今度は大賑やかで乗り込んだ。即ち郷里の老母、長姉、次姉、我等夫婦、それに中津在から大悟法利雄君の阿父さん阿母さんにも其處まで出向いて來て貰つて一座したのである。合計七人、日名子旅館の離室の様になつた一棟の上下を占領して三日間大いに寛いだ。

今度の別府は、然し、温泉といふよりも人事の方が、しかも極く打解けた内輪な人事の方が主となつてゐた。今年明けて七十九歳である母の元氣はまつたく難有いもので、街中を散歩しながら數おほい自動車自轉車に對して彼女は自身を措いて先づ四十一歳のわたしに注意しわたしを庇ふのであつ

た。でも流石に耳は遠くなつてゐた。或る時、街を歩き乍ら、時刻であるのに氣が付き、何處ぞに寄つてお晝をたべたいがサテ何がよからうかと皆して話し合つた末、わたしは母に訊いた、『阿母さん、あなたは何がたべたいネ』すると一つ大きく合點をしておいて『ウム、何も別にほしいとも思はんが、金盃が一つのウ』これには皆、街上で吹き出してしまつた。酒氣が斷えると頭も手足も自由が利かなくなるので終日わたしはこれを用ゐてゐた。母に憚る氣持もあり、また自分自身にもさう覺悟してゐたので沁々と彼女に言つた。『阿母さん、わたしも随分ともう酒を飲んで來たからこれから少し慎まうとおもふよ』母の返事は意外であつた。『インニヤ、酒で焼き固めた身體ぢやカル、やつぱり飲まにやいかん』これにも皆笑つた。わたしも笑つたが、涙がこぼれさうであつた。二人の姉も寂しい人たちであつた。長姉は明暮れの暮しには不自由せぬが、子供がなかつた。そのために言ふに言はれぬ苦勞を永い間忍ばねばならなかつた。落ち残りの髪ももう眞白で、身振もすっかり老けてしまつた。次姉は子供を十人から生んだ。そしてその子供たちのために悉く苦しんだ。今でも朝夕の事にことを缺いて齷齪してゐるのである。自宅を出て旅らしい旅に出たのは五十幾歳かになつて今度が初めてあつた。無論宿屋も知らねば温泉も知らなかつた。いま一人、わたしには姉がある。この人はちひさき時に兩脚を摧き、不具者として日蔭にのみ生きて來た。折角のこの別府行にも彼女だけよう加はらなかつた。老母が沼津に來ず、故郷の家を見捨てかねてゐるのは一つはこの姉あるがためであつた。

大悟法氏夫妻には初対面であつたが、一向にその氣がしなかつた。利雄君と向つてゐるのと同じ氣持であつた。お二人とも童顔童心、まことに好一對の老夫婦である。一座したのは二日間であつたが、初めから矢張り内輪の人としか思へなかつた。

別れといふうちにも年をとつた人と別れるのはまことにいやなものである。十二月十四日、母や姉たちを停車場に送つておいて、何だか氣抜けのした様な心地で我等は汽船に乗つた。幸に大悟法氏たちが波止場まで見送つて下されたのでよほど助かつた。

風景及びそれ／＼の土地の事

大村灣の明るく輝いてゐる海岸を通り過ぎ長崎の入口にさしか、つたころ不意に線路の左右に素晴らしい蜜柑山が見えて来る。全く不意にと言ひたいほど其處だけに見らるゝのである。よくもあゝぎつちりと植ゑ込まれたものであり、よくもあゝ鈴なりになつたものである。此處をわたしは二度往復したが二度とも蜜柑の色づいた季節であつた。何蜜柑と云つたか名を忘れたが、味もいゝ。泊つてゐた高島儀太郎君方の近くに青物市場があり、わたしたちは出かけて行つては土地の名に呼ぶその何とか蜜柑を買つて來た。此處に限らず九州は一帶に蜜柑の味がよい様である。

長崎では今度は見物といふことをしなかつた。初めての妻のために一部分でも見せて貰ひたかつた

が、時間にも身體にもその餘裕がなかつた。中村三郎君の墓に参り、諏訪山公園を通りぬけた位のものであつた。たゞ半日高島君、大橋松平君と我等兩人と散歩とも買物ともつかず街中を歩いたことがあつた。兩君とも大の骨董眼自慢である。で、自然脚はさうした性質の店の前に立ちどまりがちであつた。お蔭で我等は怪しき古道具屋から支那渡來其他の茶器酒器を、各數錢を投じて買ふ事が出来た。大橋君昂然として曰く、『先生、今に僕が大きな掘り出しものをして創作社の借金なんか獨りで拂つてあげますよ』夫について思ひ出されたのは矢張り今度の途中、大阪で野元純彦君上海行送別宴の席上で、同君わたしの腕を掴んで『先生、僕が上海に行つたら競馬で當て、創作社の借金なんか僕獨りで……』と嘯いたことであつた。

阿蘇登りで意外だつたのは女性兩君の脚の達者なことであつた。わたしは草鞋を履いたが彼女たちは下駄がけであつた。今に弱るか今に弱るかと思ふが、終に平氣で歸りつゝいた。その夜柝の木の宿で高松千鶴子さんに、千鶴子さん、今はさう威張つてゐても明日の朝の階子段に氣をつけなさい、と脅かしたがそれも何でもなかつたらしい。阿蘇はもともと登り易い山ではある。活火山などといふと何だか凄味を感じるけれど、傾斜もゆるく全體から見ても極く穩かな豊かな草山である。熔岩とか火山灰とか噴煙とかに惱まされるのは頂上寄りのほんの僅かな部分である。わたしは中學生の頃に一度登つたきりであつたが、其頃に較べて噴煙が弱つてゐるやうに思はれた。と云ふが中學生の時には二三

間手前から火口壁の縁まで這ひずつて行つて中を覗いたものであつたが、今ではもうとても十間も手前に立つてゐてなほ不安であつた。覗けば必ず飛び込みたくなるに相違ない神經衰弱患者の悲哀である。皆に笑はれながら一人離れて昨日あたり降つたらしい雨に濡れた火山灰の中に草鞋を踏みしめてわたしは立つてゐた。然し噴き上げ／＼狂ひ亂るゝ火山の煙は實にいゝものである。久し振に胸のすくのを覺えた。

阿蘇よ、永久に活火山であつて呉れ！

下山道の枯野は美しかつた。冬野にふさはしい静かな日和で、六人連の一行があとになり先になりして歩く氣持は、惶しい今度の旅には珍しいものであつた。

熊本を立つ朝は雨もよひであつた。汽車が球磨川に沿ふ様になると、こまかに降つて來た。それが一層あの大きな山あひの溪の姿を生かしてくれた。静かにもし、深くもしてくれた。ともすれば眠らうとする勞れた妻を、わたしは幾度か揺り起した。まつたく彼女にしては生れて初めて見る見ごとな溪谷であつた。木曾川をば幾度か見てゐるであらうが、木曾には此處の明るさ、こまかさ、すが／＼しさが見られないのである。

球磨川を過ぎるとわたしの呼ぶ日本の高山鐵道になる。大畑、矢嶽、眞幸驛あたり、わざ／＼遠い處を望まずともいかにいま自分等の汽車が山の高みを辿りつゝあるか、解るほどにあの邊の車中の眺

めは高爽である。肥後大隅日向の平を遙かな下に見下して走るのは全く心地よい。

薩摩の阿久根の鶴といふことをば久しく聞いてゐた。いつだつたか杉本萍吉君に素晴らしい鶴の歌を見せて貰つて以來、一度は其處へ行つて見たいと思つてゐた。そして今度そのおもひが叶うた。鹿兒島から三時間あまり汽車に揺られて行くと、阿久根に着いた。其處には先發の某君が待ち受けてゐて、昨今此處には殆んど鶴がなくなつたとかで、も一つ先の野田郷驛までゆき、其處から荒崎といふのに出ると澤山ゐるさうだ、このまゝ行きませうとのことで、野田郷といふへゆき、其處から馬車で荒崎に赴いた。その馬車の中から端なくも列を正して中空をまひ渡る鶴の一群を仰ぐことが出來た。おほらかに羽根をつらねて急ぐともなくつきりとまひ浮んだ様は全く静かな大きな眺めであつた。我等の眼には百羽近くにも見えたが、本當は四十羽位のものでさほど大きい群とはいへない、ともすると二百羽から羽根を連ぬる事があるといふ。

なるほど、沖も浪も見えないが、海沿ひの平かな田圃村荒崎といふに行くと、水を含んだ田づらのあちこちに三羽四羽づつ群れて餌をあさつてゐる鶴を見た。翔ふ姿も静かだが立つてゐるのは更に靜かに見えた。鍋鶴といふが多く、丹頂は少いのださうだが幸ひにその丹頂の二三羽立つてゐるのを遠望することが出來た。日は次第に暮れかけて來た。田圃を限る低い山垣に夕日の色のうつる頃、もうそろ／＼歸つて來る時分だと言ひながら我等は冬寂びはてた水田の畦の枯草に腰をおろし、冷たい

酒をふくんで待った。先刻の様な大きな群には出會はなかつたが、それでも五羽七羽と打ちつれてまつて来るのを夕闇の空に仰ぐことが出来た。荒崎村は鶴のために各自持ち寄りて餌料を田圃におろしておくのださうだ。

先に矢嶽附近の高山鐵道を説いたが、汽車が日向路に入つて山之口、青井岳驛あたりを走る附近がまた甚だ山深い。此處をば高山でなく山中鐵道と呼びたい。汽車は多く山腹を走り、周圍に原始林らしい森林を見て過ぐるのである。青井岳驛で降りた獵師らしい二人の男が貂に似た獸を背負ひ、藁の笠を冠つてゐるたのなども土地に似つかはしい光景であつた。

其處を通り過ぎれば日向路の汽車は全部平地を走るのである。宮崎までは乾いた平野、其處からは海に沿ふ。海に沿うた中にも高鍋から美々津岩脇附近の海岸は松林の明るさ美しさ、磯から濱の曲折に富んだことなど、眼に残る景色である。太平洋の遠いはてのうす紫に光るのなどもわたしには思ひ出深いものがあつた。

岩の間を這ひて歩く、はだしで、笑ひて浪とわれと

鶉が一羽不意にまひたちぬ、岩蔭の藍色の浪のふくらみより

水平線が鋸の刃の如く見ゆ、太陽の下なる浪のいたましさよ

わが窓のつめたさよ、海はけふげにいくたびか色を變へけむ

とある雲のかたちには夏をおもひ出でぬ、三月の海のさびしき紫紺

手に觸るるわびしき記憶、にがき悔、岩をめぐりて浪ぞむらがる

たらたらと砂ぞくづるる、わが踏めば砂ぞ崩るる、藍色の海の低さよ

嬉し、嬉し、海が曇る、これからわたしにの身體にもあぶらが出る

など、この美々津から岩脇あたりの海岸で作つたものであつた。

都農町の姉の家の裏木戸を出ればたひらかな肥えた畑で、其處に立つと眞北に尾鈴山が仰がる、その山の向う麓にわたしに生れた村はあるのである。少年の頃、や、久しく此處に客に來てゐたことがあり、毎日この廣い畑から尾鈴山を望むのを喜んだ。春の深い頃でもあつたか、煙つた畑、おぼろくに霞みそびえた尾鈴山の姿がしみんと思ひ出さるる。その心を語らうとして妻をその畑中に誘うたが、傳へかぬる氣持の様に思はれて噤んだ。丁度母も姉もあとからついて來た。姉は野菜づくりが好きで、その時もたか菜、かぶら菜、しゆんぎく、はうれん草等、其處等一面にみづ／＼しく生ひたつてゐた。老若三人の女たちの間にはひとしきり野菜の話がはずんだ。

延岡から東、別府までの汽車はわたしには初めての線路であつた。いゝ景色があると聞いてゐたのであちこち眺めたいと思つたが、都農の義兄の家での接待酒が利いて、ともすればうと／＼と眠りかけた。然し、冬枯の赤錆びた山肌や、多分祝子川（はふり川と訓む）であらうと思はるゝ川の瘦せた

川原が遙か目下に流れてゐたりするのが折々眼に觸れて、静かな車中であつた。正午一寸覗いてみると食堂車が空いてゐたので、母、二人の姉、妻を其處に誘うた。丁度汽車は日當りのいい山腹を走つてゐた。枯葉をつけたまゝの櫟林が明るく車窓に見えた。他に客がないので、そして汽車の食堂といふものが珍しくもあつたので、年寄りの女たちもお喋舌をしながら幾らか盃を重ねた。

別府からは大阪別府間の定期船である紅丸といふに乗つた。無駄話を挿ましていたゞきたい。わたしが早稲田の學校に通つてゐた頃郷里と東京との往復に郷里の細島港から神戸まではどうしても船によらねばならなかつた。無論、蠶棚式の三等室に限られてゐた。一等二等三等の船客はそれぞれ上草履によつて區別せられ、三等は竹の皮の冷飯草履であり二等は鼻緒の赤い麻裏であり、一等のは白かつた。そして船中の各所に、三等客はこの便所使用すべからず、この階子段登る可からずといふ制札が建てられてあり、癪にさはる事が多かつた。どうがなして自分も一生に一度一等船客になつて見たいと考へさせられたものであつた。さうして、今度その一等に乗つたのである。

幸ひ宿屋が早く手を廻して呉れたので二人だけの一室を取る事が出来た。そして曾て外國に行く人を横濱に見送つた時に見た所謂船室らしい船室の白い柔かなベットに横はる事が出来たのである。夫婦きりの部屋なので氣兼ねなくウキスキイをなめ、果物を嚙り、ねむたい時に眠る事が出来た。その代り、曾つては殆んど甲板に佇ちづめで眺め廻した海上の風景、瀬戸の島々をば今度は殆んど見る事な

しに部屋にのみ籠つてゐた。矢張り勞れてゐたのだ。飲むか眠るかがその時の自分の身體に最も適してゐた。初めて船に乗るといつていゝ妻も心配してゐた船暈をやらなかつた。そして獨りで浮れて甲板のあちこちを歩いてゐる様だつた。ボーイに案内させて風呂にも入つたと自慢であつた。十四日の夕食は部屋にとり寄せてたべ、十五日の朝は食堂に行つた。

たべものの事

半折揮毫の旅を始めて足かけ二年ごし、自づと季節のものをあちこちとたべて歩いた。中でも果物が一番季節を語つてゐる。木曾から長野にかけてはさくらんぼうをよくたべた。ことに長野附近の、摘みたてのつゆ／＼しいのを含んだ舌ざりは忘れ難い。子供の様に枕許にまで置いて寝たものだ。千葉縣、といふうちにも多古町では西瓜を飽食した。泊つてゐる宿の庭に水を噴く池があり、それに二つ三つづゝいつも浸しておいたものだ。あとでは勿體ないと思ふ様なたべかたまでした。

今度の九州では先づ蜜柑であつた、といふより朱欒であつた。關門海峡から門司に上ると誰もが眼につく果物店であるが、逸早くわたしは朱欒を買つた。そして八幡に滞在してゐるぢゆう身のめぐりから一つ二つのそれを離さなかつた。酒を飲みながらもたべた。丁度臺灣から新しいのゝ入荷する時であつたのださうだが、誠にうまかつた。わたしに劣らず妻も食つた。そして三苦京子さんがその買

入れ役であつた。矢張り馴れないとまづいのを買つた。船小屋鑛泉から、上妻村の高山三千樹君の家を訪ねた時、フツと見ると軒先にその老樹があり、大きなのがごろ／＼となつてゐた。早速物干棹で三つ四つ叩き落して貰つた。然し、味は臺灣ものに及ばなかつた。

ザボンの外にも珍しい蜜柑をたべた。九年母、佛手柑、きんかうじ、などである。珍しいと云ふよりわたしには久しぶりのものであつた。わたしの郷里にも此等の種類はあつたが、其處を出て以來容易に眼につかぬのであつた。例の長崎の生力蜜柑、熊本の八代蜜柑みなうまかつた、『九州のをたべたら沼津のなんかたべられない』などと妻は言つた。

八幡の事で、わたしたちが其處に着いたと知ると三里とかの道を、しかも夜、自轉車でかけつけて来た青年（もと社友）があつた。そして、提灯をつけて攀つてとつて来たので濫いのあるかも知れぬと云つて大きな風呂敷包から取り出された枝のまゝの柿は、なるほど少々濫かつたが見ごとな大きいものであつた。福岡の、安河内君かたの柿に就いては前に書いた。柿は、たべるより葉の落ちた枝になつてゐる姿が私には更にこのもしい。一體に柿は古雅なものである。

同じ福岡で箱崎の宮に参つた時、お鳥居の蔭で珍しい——といふよりこれも實に久しぶりの椎の實を賣つてゐるのを見附けた。早速買ひ求めて、海岸の砂の上でたべ、更に買ひ足して宿に持つて歸つて、それこそ酒のさかなにしてまでたべた。ちひさき時の味がしみじみと口中に湧くの覺えた。妻

には初めて、あつたさうだ。熊本でも、宴會の歸りおほぜいして酔つて歩きながらも逸早くこれを見とめて買つたものである。船小屋ではなまのまゝのを見つけ、宿に歸つて焙烙を借り、灼りながらたべた。

八幡の荒生田山の宿にゐる時、或日庭園を散歩してゐると庭つづきの藪の中に人聲がして何かを掘つてゐるらしい。山芋かナ、と思つて通りすぎた。するとその晩にはとろ、汁が出た。聞けばわたしが膳の物に一向手を出さない、一體何がお好きだらうと宿の者が誰かに訊ね、そして庭さきの山芋掘りとなつたのださうだ。するとその翌日、山林官である杉本萍吉君がその出張先なるながし山から泥のついた長いのをしこたま持つて來てくれた。熊本では金森一子さんが、その阿父さんの五個庄からのお土産であるといふ山芋をわけて下された。

同じく熊本では高松千鶴子さんから繪圖湖でとれたといふ鮒の刺身を御馳走になつた。鮒の刺身など、これも久し振のものであつた。また、満田君から球磨川の鮎の白うるかをいたゞいた。大いに珍重しようとしてゐるうち、大きな餓鬼たちにべろりとやられてしまつた。

171
玄華といふ毛はえ薬を製造してゐる井波君に招かれ、小倉のやつこといふ料理屋で河豚を馳走になつた。その前、わたしのまだ八幡に着かぬ頃大阪毎日新聞の關門版に河豚通の若山牧水來るとか何とか書いてあつたのださうだが、なるほど、ちひさい頃右の都農町の姉のうちでよくたべたことがある、

相模三浦半島の漁村に住んでゐた頃は手料理までして食つてはゐるが、いはゆる河豚料理としての本式のものに出會つたのは初めてであつた。やつこの主人といふのがまたその道の名人とやらで、直径三尺もあるかと思はるゝ大きな皿に、肉や皮や腸の色どりを配合してきながら牡丹の花の咲き開いた形に盛られたのを持ち出された時は、我等ひとしく眼を瞠つた。それを片端から刺身に、ちりに、鍋に、雑炊にといふ風にいろ／＼にしてたべてゆくのであるが、とり／＼にうまかつた。極めてあつさりしてゐて其處に謂ひ難き風味を持つてゐるのが河豚である。久し振にこれを味はつた。そして最後に鱈酒といふのが出た。これは河豚の鱈をほど／＼に焦がして、茶碗に入れ、熱燗の酒を注ぎ、暫時蓋をし、さて飲むのである。いかにもうまい。上品な香ばしさが酒の味を一層澄ませてゐる。が、何しろ容器が小さくない。それを馴れた女達の手練に乗せられ、立所に四五杯呷らせられてしまつた。初めて出會つたものに、もう一つ博多の水だきがあつた。これは福岡の社友安河内、吉田、塚越の三君（白谷君は役所の都合がつかなかつた）に連れられて行つたので、第一場所がよかつた。昔の博多港の港口、其處に近年まであつた廓柳町の跡で、廓の主であつた新三浦屋が即ちいま水だき屋となつてゐるのである。宏壯な構は見ると昔の全盛を偲ばせ家の中の間取も殆んどものまゝにと残してあるらしく、物寂びて静かであつた。我等の部屋の下真下にはひた／＼と潮が寄せ、時雨もよひの霏が立つてゐた。サテ、水だき料理の説明を試むべきであるが、出来ない。鶏の肉や骨を幾日間とか

水煮にし、汁そのまゝの肉や骨を他の調味された汁に投じて喰ふ、といふだけであるが、其處が曰く謂ひ難しで、その簡単ななかに何ともいへぬ微妙な複雑な味を宿してゐるのである。舌ざはり柔く、たべてもおなかに溜らない。寡食のわたしがいつか知ら大いに食つてゐた。近來この水だきが非常に流行つて、各地に同じく新三浦屋などを名乗つて店を出してゐるさうだが、矢張り遠くこの本家に及ばないといふ。そして此處の料理法を盗みに來る者が多いといふ。

長崎自慢の支那料理をも無論馳走になつたが、この前の長崎行の時に書いたので今度は省略する。筆は自づと飲む話に移る。

今度の九州旅行は要するに大酒ぐらひのわたしとしての最後であつた。とにかく思ひおくことなく飲んで來た。五十一日の間、殆んど高低なく毎日飲み續け、朝、三四合、晝、四五合、夜、一升以上といふところであつた。而してこの間、揮毫をしながら大きな器で傾けつゝあるのである。また、別に宴會なるものがあつた。一日平均二升五合に見つゝも、この旅の間に一人して約一石三斗を飲んで來た、と數字に示された時は、流石のわたしも物がいへなかつた。

が、これで安心してこの馬鹿飲みの癖をやめることが出来る、といふものである。現にもうやめてゐる。やめねばならぬ所まで到着して來たのである。やれ／＼、長い道中ではあつたぞよ、といふ氣持である。

梅雨紀行

發動機船は棧橋を離れやうとし、若い船員は纜を解いてゐた。惶て、切符を買つて棧橋へ駆け出すところを私は呼びとめられた。いま休んでゐた待合室内の茶店の婆さんが、膳の端に私の置いて来た銀貨を掌にしながら、勘定が足らぬといふ。足らぬ筈はない、四五十錢ばかり茶代の積りに餘分に置いて来た。

『そんな筈はない、よく數へてごらん。』

振返つて私はいつた。

『足らん、なアこれ……』

其處を掃除してゐた爺さんをも呼んで、酒が幾らで肴が幾らでこの錢はこれぐで、と勘定を始めた。私はそれを捨て、おいて船へ乗らうとした。

爺さんと婆さんは追つかけて来た。切符賣場からも男が出て来た。船の窓からも二三の顔が出た。止むなく私は立ち留つた。そして婆さんの掌の上の四五枚の銀貨を數へた。どうも足らぬ筈はない。

『これでい、ぢやアないか、四十錢ばかり多いよ。』

『馬鹿なことを……』

婆さんの聲は愈々尖つた。そして、酒が幾らで、肴が幾らで、と指を折り始めた。私もそれを數へてみた。そして、オヤ／＼と思ひながら一二度數へ直して見ると、矢つ張り私の間違ひであつた。茶代抜きにして丁度五十錢ほど足りなかつた。私は帽子を脱いだ。そして五十錢銀貨二枚を婆さんの掌に載せた。載せながら婆さんの眼の心底から險しくなつてゐるのに驚いた。汗がぐつしより私の身體に湧いた。

船は思ひのほか揺れながら走つた。船内の腰掛には十人ほどの男女が掛けてゐた。

『間違ひといふものはあるもんで……』

私の前に掛けてゐた双肌ぬぎの爺さんは私に言つた。この爺さんは茶店で私が酒を飲んでゐる時から二三度私に聲をかけてゐた。

『イヤ、どうも、……』

私は改めて額の汗を拭いた。今日はもう一つ私は失敗をやつてゐた。鷺津までの切符を買つてゐながら一つ手前の新居町驛で汽車を降りた。濱名湖が見え出すと妙に氣がせいて、ともすると新居町から汽船が出るのではないか知らといふ氣になつたからであつた。が、矢張り淡い記憶の通り、鷺津か

ら出るのであつた。そして通りがかりの自動車を雇つて鷺津の汽船發着所へ着いたのである。然しその時の船はもう出てゐた。次の正午發まで一時間半ほど待たねばならぬ。そして私は酒をとつた。朝飯を五時に済まして來たので妙に食欲があり、茶店で出した肴だけでは足りなかつた。茶店の婆さんは附近の宿屋だか料理屋だかに電話をかけて二三品のものを取り寄せて呉れた。それこれの勘定が間違のもと、なつたわけである。

永年の酒の毒が漸く身體に表れて來た。ことに大厄だといふ今年の正月あたりからめつきりと五體の其處此處に出て來た。この半年、外出らしい外出すらしないで私は部屋に籠つてゐた。花のころ、若葉のころ、毎年必ず出かけてゐた旅にもよう出ないで、我慢してゐた。それがこの梅雨の季節に入つていよく頭が鬱して來た。いつそ息抜きに何處かへ出かけて、も見ることがよくはないかと自分にも思ひ、家人も言ふので企てられた今度のこの濱名湖めぐりから三河行の小さな旅行であつた。そしてその第一日早々から重ねられたこれらの失敗であつた。

湖全體を一周するには別に船を仕立てねばならなかつた。私の乗つたのは鷺津から湖の西岸に沿ふて氣賀町まで行くものであつた。肌ぬぎの爺さんはいろ／＼と山や土地の名などを教へて呉れた。梅雨晴とも梅雨曇とも云ひ得る重い日和で、うす濁りの波の色は黒く見えた。湖を圍む低い端山の列も黒かつた。物洗ひ場かとも見ゆる簡単な船着場に二三度船は止つて、一時間もした頃館山寺かんざんじに着いた。

私は裾を端折はしやつて降り仕度をしながら、いかにも酒ずきらしいこの爺さんに言つた。

『お爺さん、一緒に降りませんか、次の船の來る間、一杯御馳走ませう。』

爺さんは仰山に打ち消した。

『とんでもねエ、わしはこれで氣賀で降りて、其處から荷物を背負つてまだ五里も歩かなくちやならねエ。』

館山寺かんざんじは古い由緒のある寺だとかだが、ひどくすたれて、此頃ではたゞ新しい遊覽地として聞え出して來た、と謂つた所であつた。殆んど島かと思ゆる小さな半島全體が圓やかな岡となり、汀からいたゞきにかけて、みつちりと稚松が茂つてゐた。寺の横から岡を越えて裏に出ると、廣い湖面に臨んだ小さな斷崖となつてゐた。腰をおろし、帽をぬげば、よく風が吹いた。そして漸く私は、

『ヤレ、ヤレ。』

といふ氣になつた。

湖には釣舟が幾つか浮び、三味線太鼓の起つて居る所謂遊覽船も一艘見えてゐた。風のためか日光のせるか、湖いちめんがほの白く輝いて見えた。岡の松はみな赤松であつた。そしてその下草にところ／＼山梔子が咲いてゐた。花の頃の思はるほど、躑躅の木も多かつた。岡のあちこちに設けられた小徑はまだ眞新しく、新聞紙など散らばつてゐた。惜しいと思つたは稚松の間に混つてゐた稚の老

木を幾つとなく伐り倒したことで、みな一抱え二抱えの大きいものであつたらしい。恐らく美しい小松ばかりの山にせむために伐つたものであらう。

二十分もかゝつたか、私は岡を巡つて寺に出た。次の船の来る迄にはまだ二時間もある。止むなく寺の前の料理兼旅館の山水館といふに寄つた。上にあがればめんどうになると思つたので、庭つたひに奥に通つて其處の縁側に腰かけながら、兎に角一杯を註文した。

庭さきの水際の生簀に一人の男が出て行つた。私のために何か料理するものらしい。そして當然鯉か鮒が其處から掬ひ上げられるものとのみ思ふて何氣なく眺めてゐた私は少なからず驚いた。思はず立ち上つてその手網を見に行つた。見ごとな鮒こもがその中に跳ねてゐた。

『ホ、ウ、此處に海の魚がゐるのかネ。』

番頭の方が寧ろ不思議さうに私を見た。

『よく釣れます、今朝お立ちになつたお客様はほんの立ちがけに子鯖を二十から釣つてお持ちになりました。』

宿屋の前は背後の岡と同じ様な小松の岡にとりかこまれた小さな入江になつてゐた。入江といふより大きな淵か池である。青んで湛へた水面には岸の松樹の影がづばらかに映つて居る。其處から鯖の子を釣りあぐる………、何としても私には變な氣がした。聞けば今は子鯖とかははぎの釣れる盛り

だといふ。かははぎは皮剥ぎの謂で、形の可笑しな魚だが、肉がしまつてゐておいしい。私の好物の一つである。兎に角、濱名湖は淡水湖なりや鹹水湖なりやとむづかしく考へずとも、汽船で一時間も奥に入り込んで来た此處等のこの山の蔭にこれらの魚が棲んでゐるやうとはどうも考へにくい事であつた。

館山寺前に入江を出た船は袋の口の様な細い入口を通つてまた他の入江に入つて行つた。此處はやや大きく、引佐細江いんざほそえといふ。細江の奥、下氣賀しもけがで船を乗換へた。今度の小さな發動機船は入江を離れて、堀割りに似た都田川といふを溯るのである。川の西岸にうち開けて、ひたひたに水をたへてゐる廣田には何やら藺の様なものがいちめんいに植ゑ込んである。乗合の婦人に尋ねると、あれはルイキルイキユウですとのことであつた。

氣賀町けがまちに上つた私は迷つた。豫定どほりだと其儘輕便鐵道に乗つて終點奥山村に到り半僧坊に詣でて一泊、翌日は陣座峠といふを越えて三河に入り、新城町しんじょうまちに病臥してゐる友人を見舞ひ、天氣都合がよければ鳳來寺山に登つて佛法僧を聴く、といふのであつた。が、氣賀町には我等の歌の結社創作社社友Y——君が住んでゐた。自分の身體の具合もあるので今度は途中誰にも逢はないで行き過ぎるつもりで出て来たのだが、サテ、實際その人の土地に入り込んで見ると一寸でも逢つてゆきたい。それこそ立關で、も逢つて、それから輕便鐵道に急いでも遅くはあるまいと、通りがかりの女學生に訊くと

この友の家は直ぐ解つた。

私の名を聞いて奥から出て来た背の高い友の白髪は、この前逢つた時より一層ひどいものに眼に付いた。その細君には初対面であつた。頻りに固辭したが、終に下駄をぬがせられ、やがて一晚厄介になる事になつてしまつた。そして夕飯の仕度の出来るまで、近くを散歩した。公園の何山とかいふに登れば眺望がいゝとの事であつたが、勞れてゐて出来なかつた。錢湯に行くすら億劫であつた。勞れるわけではないのだが、久し振に家を出た氣づかれとでもいふであらう。或は失敗勞れであつたかも知れぬ。

氣賀町は寂びて靜かな町に見えた。昔、何街道とかの要所に當り、關所の趾をそのまゝにとつてある家などあつた。町はづれを淺く清らかな伊井谷川が流れてゐた。橋に立つて見ると、鮎や鰻の群れて遊んでゐるのがよく見えた。泳いでゐる魚の姿を久し振に見た。

この友はこの附近で小學校の校長を長い間やつてゐた。それをこの四月にやめて、今は土地に新設された實科女學校に出てゐるとの事であつた。廣くもない庭に、植ゑも植ゑたり、蟻の這ふ隙間もなままで色々なものが植ゑてあつた。いま花の眼についたは、罌粟、菖蒲、孔雀草、百日草、鳳仙花、其他、梅から柿梨茶菓のたぐひまで植ゑ込である。その間にはまた、ちしや、きやべつ、こんにやくだま、などの野菜ものも雜居してゐるのである。それでゐて何處か落ちついてゐる。妙に調和した寂びが感じられた。

夜は、酒嫌ひで言葉少なのこの友を前に私は一人して飲み一人して喋舌つた、これだから誰にも逢つてはいけないと思つたのにと思ひながら。

六月二十二日。

學校を一日なまけてY——君もけふ一日私と歩かうといふことになつた。停車場の附近にも昨日見たルイキユウの田が廣い。聞けばこれは琉球から取り寄せた蘭ださうで、それを土地の人はルイキユウと呼び、稻よりもこれを作る者が多くなつてゐるさうだ。疊表其他の材料として支那の方にも行くといふ。

伊井谷神社の深い森を車窓に眺めて過ぎた。宗良親王を祀るところといふ。親王のお歌は若い頃私の愛誦したものであつた。程なく奥山終點着。

奥山半僧坊の名はかなり聞えてゐる。で、私は何とはなしに成田の不動の様な盛り場を想像してゐたが、案外に靜かな山の中の寺であつた。門前町に三四軒並んでゐる宿屋なども、なつかしい古び様を見せてゐた。

奥山の村を外れて陣座峠の路にかゝる。路は伊井谷川の源とも見受けらるゝ溪に沿つてゐた。溪は細く、岩の床で、岸の一方は直ちに雜木林となつてゐた。流れつ湛へつしてゐる水際には岩躑躅が到